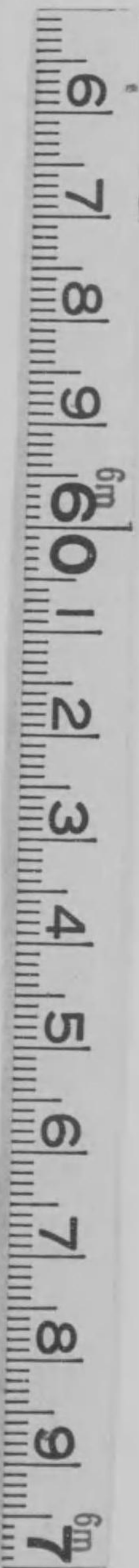


390
84



始





L'Insecte

par

Jules Michelet

蟲 昆 の 詩

譯 君 木 柁 林

14. 5. 14
内 交



原著者ミシュレー氏

390-84

序

此書の原名は單に「昆蟲」"Insecte"とされてゐる。私はそれを表記の様にわざわざ「詩の昆蟲」とした。「詩の昆蟲」とは些か明確を缺いた題である。然も私は何うしても單に「昆蟲」として置くことに満足し得なかつた。そのころを簡單に記して序の言葉としたいと思ふ。

凡そ科學は萬物を客觀的に觀察する、凡ての活動を一個の現象として取扱ふ。其處には何等の主觀がない。想像がない。詩がない。然るに此書を読むものは、到る處に昆蟲の言葉が記されてゐるのを發見するであらう。蟻は或處では軍歌を歌ひ、或處では小守歌を歌ふ。蜜蜂の會話があるかと思へば、山蜂の獨白モノログも聞かれる。胡蝶が戀の歡喜に酔ふかと思へば、蜘蛛は貧困の悲愁に沈んでゐる。此書は正に單なる科學の書ではない。

今日の進んだ昆蟲學から見れば、此書は或は誤り……でないまでも不備の點の多いもので

あらう。此書は正に科學の書ではない。私は敢て言はう、若し此書が科學以下のものでありとすれば、此書は又同時に科學以上のものであると。

此書は決して科學を否定若しくは無關係にして書かれたものではない。著者は明らかに、昆蟲を輕蔑した或獨逸の哲學者を、彼が無智であり、人間本位であると言つて嗤つてゐる。彼が非科學的であると言つて、之を子供の心理に譬へて、一笑に附してゐる。そして嚴密な科學の創始者スワムメルダムやガリレーを如何に讚美してゐるかに依つてもそれは明らかである。然も遂に此書は單に科學的な書物にならなかつた。「昆蟲を理解し、昆蟲を説明し、出來得べくんば、之が好意ある代辯者たること」と此著者が緒言に言つてゐるのを見るとき、そして此書の内容を讀む時、私達は始めて、此書が科學以下のものであるとしても同時に又、それ以上のものでもあることを認め得るであらう。然し私は今此處に自分の貧弱な感想を述べて、此書から受けようとする讀者の多種多様な感興を豫め減殺するの愚をなしたくはない。「物を研究する心算である、私は靈に出會つた」と著者は結論に

言つてゐる。私もそれと同じことを、此書を読みながら、感じた。「昆蟲」を讀む心算で、私は昆蟲以上のものを——自然の意志を讀む氣がした。讀者は恐らく、それ以上の多くのものを得らるゝこと、信ずる。私がわざわざ「詩の昆蟲」と題したのは、單に之が昆蟲の詩であるばかりでなしに、私達の抱いてゐる「昆蟲」なる概念以上の昆蟲であることを現はしたい爲である。

最後に著者に就いて一言したい。ジュウル・ミシュナー(Jules Michelet, 一七九八—一八七四年)は人も知る通り十九世紀前半、佛蘭西大革命後の浪漫期に立つた有名な歴史家である。その歴史は眞に民衆の立場に立つた民衆の歴史——過去の暗い霧の中に消えた人間活動の再現であるとされてゐる。彼の豊富な想像力と、鋭い感受性と、高い詩情と、自然に對する新しい理解と、更に加ふるに繪畫的な表現方法とは、その強烈な人道精神と結び合はされて、遂に在來の事件本位、記述本位の歴史を打破つた、そうして、眞の歴史——人間活動の動きを、精神活動の姿をうつつし出すに至つた。彼の有名な「佛蘭西大革命史」

が革命の歴史ではなくて、革命時の人間の心の歴史であると言はれ、叙事詩であると言はれてゐるのをみても這般の消息を覗ひ得るであらう。此處に彼の歴史家としての特異な點がある、が又それが缺點であるとも見られてゐる。

此書が歴史家の著であるといふことに、一寸奇異な思をされる讀者もあること、思ふ。だが此書は正しく歴史家としてのミシュレーの著なのである。そしてそのことが此書の使命を雄辯に物語る。

彼の著作はその數と共にその範圍が非常に洽汎に渡つてゐる。之を大別すれば、歴史的な著作と、此書の如き一見好事家アマチュアの著作らしいものとなる。之を彼の年代から見れば、一八五一年、彼が五十三歳にして佛蘭西大學教授の席を去つた年以前と以後とに大別することが出来る。即此書は彼が晩年の著であつて、此種に屬するものに、「鳥類」「海洋論」「山岳論」「戀愛論」「婦人論」等がある。

之等の著作が如何にして書かれたかは、當時の社會状態と、ミシュレー自身の境遇とを詳

細に調べずには、到底明らかになることは出来ない。私は今此處にそれを記してゐられないことを残念に思ふが、簡単に言へば、ミシュレーは貧しき印刷工の子として、その幼時何等の教育を受けず、食ふに肉なく、あたるに火なく、「日光の當たらぬ舗石の間に生えた草」の様にして早くから食ふ爲に勞働してゐた。後年一家の犠牲的補助に依つて、兎に角サン・バルブ大學を卒業し、同大學の教授を振出しに、師範大學の教授から、轉じて佛蘭西大學に移り遂に一八四八年の革命には自ら民衆の内に加はり、その後の政變（第二帝政）と共に大學教授の職を放棄するに至るまで、彼の活動の根本を支配してゐたのは、眞理でも正義でも、詩でも、愛でも、宗教でも、科學でも、凡ては唯貧しく虐けられし人々の爲であつたのである。彼の歴史が全く感情の一點張であるとは屢々言はれる處である。讀者は之等に於て、貧しきものの感情、食に餓えたるもの、寒さに震えたるものの感情が如何に鋭く現はされてゐるかを見らるゝことであらう。さうした心に燃えてゐるミシュレーが、慙うしたアマトウルらしい著作をなす時、それは決してアマトウルの活動ではなかつた。彼

は言つてゐる、私は「慘酷な、野蠻な人間の歴史を捨て、^(一)「罪なきものを求めた。私は少くも動物界の中に自然の平等な正義、創造界の素朴な正しさを求めんと欲した。彼等の中に勤勉な、實直な、共存道德の嚴格な相^{すがた}を求めんと欲した」と。要するに彼は人間の歴史に向けてゐた眼を、自然の中に移したのだ、そして、自然の中に行はれる自然の命令を、意志を窮めて、以て人間界の光明たらしめようとしたのである。此書はその意味で、自然研究の一部である。昆虫の叙事詩であり、歴史であり、文明史であると同時に、自然の叙事詩であり、歴史であり、文明史である。

一九二五年三月十一日

市外尾久町にて、

林 証 木 識 す

例 言

四月刊行書として佛ジー・ミシユレー著『詩の昆虫』を譯出した。原名は“L'Insecte”とあつて字義通りには『昆虫』とも譯すべきであらうか、たゞ斯く命名したのみでは内容に盛られた著者の昆虫に對する豊饒なる詩的觀察と、また珠玉を連ねたる如き美文とを直感し得ないようにさへも思はれるので、特に「詩の」なる二文字を付け加へたことを諒とされたい。

然して著者の人と爲りと本書に關しての内容とは、譯者林君が巻頭の長序中に巧みに叙述されあるを以てこれに就き看られたい。

協會は本書の譯者早稻田大學英文科出身林証木君及び特に本書を協會のため推選され、巻頭の原著者晩年の小照を貸附されし早稻田大學教授推名其二氏に對し茲に瞞腔の謝意を表するものである。

大正十四年四月

大日本文明協會識

目次

第一篇 變態

| | | |
|--------------|-------|-----|
| 緒言 | | 一 |
| 第一章 子供の恐怖 | | 四五 |
| 第二章 慈悲 | | 五三 |
| 第三章 微細な地球建造者 | | 六七 |
| 第四章 愛と死 | | 七八 |
| 第五章 親なし娘寒がり娘 | | 八八 |
| 第六章 變態 | | 一〇一 |

第七章 鳳凰……………一三三

第二篇 昆蟲の藝術と使命……………一三三

第八章 スワムメルダム……………一三三

第九章 顯微鏡……………一四八

第十章 昆蟲の使命と自然……………一六四

第十一章 昆蟲と人類……………一七八

第十二章 色と光との幻覺……………一九二

第十三章 蜘蛛の勤勞と休業……………二〇五

第十四章 蜘蛛の家蜘蛛の戀……………二二一

第三篇 昆蟲の社會……………二三五

第十五章 暗黒の都市白蟻……………二三五

第十六章 蟻の結婚とその家政……………二四八

第十七章 蟻の牧獸と奴隸……………二六三

第十八章 蟻の戦争都市の全滅……………二八一

第十九章 蜂(ダブ)の狂熱……………二九九

第二十章 ヴイルジルの蜜蜂……………三一一

第二十一章 田園の蜜蜂……………三二一

第二十二章 蜜蜂の建築……………三三四

目次

第二十三章 蜜蜂の市民及び共通母……………三四八

結論……………三六三

目次終

第一篇 變態

緒言

吾々は鳥と一緒に、今迄空間と光明との間を自由自在に飛び廻つて来た（ミシュレーは此書を書く前に「鳥類」を書いた）、けれども吾々の捨てた大地は吾々を捨てはしなかつた。翅の世界へいくら舞ひ上つても、廣大無邊な暗黒と沈黙との一世界の囁きは矢張吾々に聞えて来たのだ。それは人類の言葉を持たない、けれども無數の黙語を以て力強く自己を表現してゐる。

(二)

宇宙の慾求それは全自然から、地の底、水の底から、あらゆる植物の懐から、吾々の呼吸する大氣からさへも、同時に吾々の許へ到達する。

昆虫の巧妙な技術がなす雄辯な慾求が、その翅翼やその色彩に依つて、その夜を照す燦爛たる閃光に依つて、非常に力強く發揮される彼等の愛の力の雄辯な慾求。

無数の慾求者に依る恐ろしい慾求。鳥類又は四足類の小族を之に比較したらどんなものだらう？ あらゆる動物の種は、あらゆる生命の形式は、唯此一種の前に姿を消して零た。此の世界を一方に、昆虫界を他方に別けて見給へ、優越は後者である。

吾々の蒐集は約十萬を數へてゐる。けれども各種の植物が少くも三種の昆虫を養つてゐることを思へば、既に知られてゐる植物の數から推して、三十六萬種の昆虫が存在するのである。——忘れ給ふな、その各々が素晴らしく多産なのだ。

次には、その凡てのものが自分の外皮に、その固形體の中に、その流動體の中に、又その血液の中に數種を養つてゐるといふことを考へねばならぬ。各昆虫は數種の昆虫の常住

する一小世界なのだ。そしてその後者が又他種を包含してゐる。

是で凡てか？ といふにさうでない。吾々が礦物だとか無機物だとか信じてゐた物質の中に、十億集つて拊指の大きに達する程の動物があるのだ、それが盡く昆虫の組成を示さないではゐない。それは恐らく昆虫祖と呼べるべき権利があるだらう。——まあ此動物の數を數へるとなつたら何うだ？ その一種丈でも殘骸はアペニン山脈の一部をなし、又その微細物が、コルディールと呼ばれてゐる亞米利加の巨大な脊骨を高くしてゐるのだ。

是で此調査も終ると思ふ。も一寸の辛抱だ。軟體動物、之が南洋の多くの島嶼を形成してゐる。それは文字通り（最近の海底調査がそれを證明してゐる）歐米兩國を引離す千二百海里に疊石を敷くものである。是等の軟體動物は、多くの博物學者に依つて未發達昆虫なる名稱を與へられた。その結果猛烈な繁殖力を持つた此種族は、その優越種族たる昆虫の從屬又は候補者とでも云ふか、さういふものとなつてゐる。

此が大きいのだ。處で私は鳥の世界を、私をその翅の上に載せて呉れたあの愛すべき同行者の世界を懐しまずにはゐられない。それはあのコンサートの爲ぢやない。あの輕快な崇高な生活の光景の爲でもない。實にそれは、鳥が余を理解してゐたといふことの爲である！……

吾々は互に聞き合つた、互に愛し合つた、そして互に言葉を交はし合つた。私は彼の爲に語り、彼は私の爲に語つてゐた。

處が空界から冥土の入口に落ちて、此不可思議な沈黙の夜の子の前に立つた私は、如何なる言葉を、如何なる通意の合圖を見付けようとするか？ 何んな工夫を凝らしたら彼に到達する手段が見つかるといふのか？ 私の聲や身振は彼を逃がすより外に何の能もないのだ。彼の眼には何等の表情もない、その沈黙の面には何等の動きもない。闘争用のその鎧装の中へ、彼は入り込んでゐて、探るべくもない。彼の心臓（彼は心臓を持つてゐるのだ）は吾々のと同じ様に鼓動してゐるのか？ 彼の感覺は限りなく美妙である、だがそれは吾

吾の感覺に似たものだらうか！ 彼は、未だ名もない様な未知の感覺を持つてゐる様にさへ思はれる。

彼は吾々の手に止まらない。自然は、人間に對して彼の爲にいつも存在否定の答辯を設けてゐる。若し彼を一瞬間唯愛の光の中に示すとしても、自然は彼を何年となく暗黒の地底や、櫛の堅い懐の中に隠してゐる。見付け出して、捕へて、解剖して、解體して、顯微鏡で一部一部覗いて見て、猶吾々には或る謎が残る。

氣懸りな謎、その不思議はもう諦めて了ひたくなる程吾々の思索を混雜せしめるのだ。吾々の片側に呼吸する一存在を何と思つたらいいのか？ あらゆる事物に反對して、背を地に向け、腹を空に向けてゐる逆説的歩行者を何と考へたらいいのか？ 様々な場合に於て、昆蟲は吾々には一個あべこべな存在である。

その上、まあ考へても見給へ、あんまり微細なので譯が分らなくなつて了ふのだ。彼等の器官は吾々には奇怪だ、従つて無氣味だ、といふのは、吾々の鈍感な眼は、それを見て

も餘りの複雑さに、その構造や效用を見抜くことが出来ないから。明瞭に見えぬものは不安だ。止むを得ず人はそれを殺して了ふ。固より彼等は、吾々にはとても正鵠を得られない程、微細である。

吾々は諸學説を度外視してゐるのではない。(神は世界を造つた、が、悪魔が蟲虻を造つた)なんといふ一言で、昆虫達の主張を片付けてゐる獨逸の或る夢想家の強制的禁壓を、吾々は喜んで受入れましょう。

けれども此蟲虻は黙つて打たれてはゐない。哲學者の學説や、子供の怖氣(兩者は恐らく同じものであらう)に對しては、大體次のような彼の返答がある。

彼は先づ言ふ、正義は普遍的であること、此法則の上には何等體の大いさが關係してゐないこと、若し權利が平等でないといふことや、普遍的愛が平衡を失つても構はないといふことが我慢し得られるとすれば、それは微細物に對してゐあらうと。

次に彼は言ふ、外觀に依つて判断したり、その效用を辨へもしないで、その大部分が特

別な職能を有する器具であり、様々な仕事の道具である様な器官を罪に落すのは、むしろ不合理であると。吾が昆蟲類こそ、破壊建設の大立物であり、優れた産業家であり、生命の活動的遂行者であるといふことを。

最後に彼は言ふ(此言葉は恐らく傲慢に聞ゆるであらう)、顯著な特徴や事業や又その成績から判断するならば、我こそあらゆる存在物の中で、之を最も愛するものだ、といふことを。愛は彼に、讚嘆すべき虹色から明るい焰の色まで持った様々な翅を與へてゐる。愛は、彼に於ては、即坐の死となり、その遺兒の上に母性の驚く可き靈の眼をとめて、之が巧妙な保護を繼續する。最後に此母格精神が非常に廣大された結果、鳥類や四足類に稀に存する聯合組織などを遙かに凌駕して、昆虫の共和國や都市が形成されてゐる!

此處に私を感激せしむる威嚴ある辯論が存するのである。

若しお前が勞働してゐるなら、そして若しお前が愛してゐるなら、昆虫よ、譬へお前の恰好が何うあらうと、私はお前から遠ざかることが出来ない。吾々は成程殆んど血に繋が

れざるものである。が、然らば私自身は何か、一個の勞働者でなくて何だ？ 此世の中に私が所有する至高の存在は何であるか？

此行動と運命との共有、これこそ私の胸を開くものだ、そしてお前の沈黙に耳を傾ける可き新しい感覺を私に與へるものだ。愛、萬物に循環して、それ等の魂を一に結ぶ此聖き力、これこそ萬物に取つての通辯者であり、之に依つて萬物は言語を語ることなくして相語り相聞くことが出来るのだ。

二

博物學者や旅行家達のくどくどしい書物に依つて私はあの「鳥類」を調べたのだが、此等の、獨身女にも劣らぬ忍耐力を必要とした讀書中、私は順次に色々な昆蟲に就いての事實や細かい話を知つた、がそれは、昆蟲といふものに最も區々な説明を與へてゐるに過ぎなかつた。吾々には絶えず、昆蟲は鳥類に比較して此處では一致し、彼處では相反する、

が大體に於て類似し、從屬物であるといふ風に思はれてゐた。

長く、倦むことなく、常に愛すること、これが弱者を強者にするものだ。讀書から出て、觀察に、人生の細かい長い研究に這入らうとする時、此趣味と愛情との固執が何より必要なことだ。ジュリィヌ嬢 (Mlle-Jurine) がその父の蜜蜂に關する驚く可き發見にあれ程に優れた貢獻をなし、メリアン夫人 (Mme Mérian, 1647—1717 畫家及び博物學者) が遠い旅行の收穫として、ギアナ (Guyane 南米の一國) の昆蟲に就いてのあの専門的な、非常に立派な畫帖を吾々に残したとて、私は敢て怪しまない。婦人の、細々しい事物や微細な仕事に對する鋭敏な、完全な眼や手は、恚ういふものに最も適當してゐるのである。彼女達は微細物に對して注意と親切とを有すると同時に、それ以上の尊敬を抱いてゐた。若しも詩は何うかといふことになれば彼女等はさして詩人ではない、現實の上に自己の專横な想像を置くことがない。彼女等は現實に從順ではないが、之を支配しはしない、之に耐え忍んで、微細物に對してはその至高な生命に就いて屢々侮蔑的になり勝る急速な觀察を下

することがない。で、恚様なことに根氣を續ける時、彼女等は優れた観察者となり、小レオミナル (René Antoine de Réaumur, 1683—1757 有名な佛國の博物及び物理學者) となり得るであらう。

顯微鏡的研究は殊に婦人性を必要とする。之に成功せんとすれば幾分婦人となる必要がある。一寸見ると面白さうな顯微鏡は、若し之を眞面目な使用に役立てようとするれば、器用が要る、倦まずに續ける手腕が要る、殊に時間だ、非常な時間だ、同じ觀察を無限に繰返す爲に、同じものを様々な日光で、朝の清い光線の中や晝の暖かい光線や又時にはそれより遅い時にさへ見る爲に、時間の完全な自由が必要なのだ。之を要するに此種の研究は、今日人に最も缺けてゐるもの、人が世間と歲月との外にあつて、是等眼にも止まらぬ生命に對する他念なき好奇心と、敬虔な、倦むことのない愛情とにいつも燃えてゐることを必要とする。彼女等は一種の孤獨の處女母格である。

長い間十六世紀の歴史研究に没頭してゐた私は、千八百五十六年の春に至つて始めて自

由の身となつた。「鳥類」も矢張此時出たのであつた。私は一時息を抜かうと思つた。そしてジュネエヴの湖水に面したクララン (Clarens) の近くモントルウ (Montreux) に居をトした。けれども四方得も云はれぬ佳景に包まれた此場所は、自然に對する旺盛な鑑賞力を齎して、私に安逸を貪らしめなかつた。或る焔が私の胸にあつて、如何なるものも之を消すことが出来なかつた。私は路あるまゝ、に椀の杯を手にして出かけた、泉ある毎に (皆非常に冷たく、皆非常に清らかだ) その水を味はひつゝ、若しやその何れか、過去現在の苦しい多くのものを消す力を持つてゐはしないか、此程多くの泉の何れか、私の爲にレテ (Létié, 神話の地獄の川、その水を呑めば過去の罪を忘れるといふ) の水となりはしないかと、求めて歩いたのだ。

遂にルユセルヌ (Lucerne) の町から半里強の箇所に、私は、何日の頃の僧院が分らぬが、旅籠屋となつてゐるのを探し當てた。そして、その應接室を借り入れた、非常に広い部屋で、七個の窓が、山と湖水と町とから成る外景に向つてゐて、終日壯大な日輪を仰ぐ

ことが出来た。朝から晩まで、太陽は親切であつた、部屋の中央に据えられた私の顕微鏡の周囲を廻つて呉れた。前面及び四方に廣がつてゐる美しい湖は、此處では未だユリの湖 (Le lac d' Uri) と呼ばれる、あの迫つた、起伏の激しい、険しいものになつてはゐない。

が至る處風光の基調をなしてゐる樅の木々は氣候に餘り信頼する勿れと警告してゐる。寒い國だと人は言ふ。或る不規則な寒暑の厳しさが亦色々な特色をなしてゐる。午を過ぎると直きに冬の氣息がやつて来る。私の前には私の變ることなき道連れとして、地味なピラート (Pilate) が立つてゐた、剃刀で切つた様な鋭い尖りを持つた禿山で、その黒い肩の上からは白いヴィエルジュ (處女峰) とビック・ダルジャン (銀峰)、ユングフラウにシルベルボルン (Jungfrau-Silberhorn 共にアルプスの高峰) とが十里の彼方から私を凝視してゐた。

非常に美しい處だ、七月には非常に爽やかで、九月にはもう屢々寒い。吾々は上の方に、後の方に、非常な高所に、或る空に浮んだ水の海を感じてゐる。之が歐羅巴の諸大河の源泉たる第一の貯水池、大サン・ゴタール (Saint-Gethard) の十里四方の盆地で、一端はロ

ヌー (Rhône) 河に、他端はライン (Rhin) 河に、第三端はルウス (Reuss) 河に、そして南方に向つてはテッサン (Tessin) 河に注いでゐる。此大貯水池はその横顔が僅かに覗かれるばかりだが、吾々はそれを感じるのだ。諸君は水を慾するや？ さらば此處へ來つていざ飲み給へ、これこそ人類に水を與へる最も大きな杯である。

私は先づ渴を免れた。夏の最中も夜は寒く、朝夕は涼しかつた。私が夢中になつて、飽くことを知らぬ眼を以て眺め入る清淨な雪は私を純化した。それは、長い、埃に充ちた、黒くなつた、血の染んだ、そして崇高な、けれども亦時には塵だらけの人生の路、歴史の回轉の様に思はれる。私は世の悲劇と永遠の叙事詩との間に幾分の均衡を取返した。

アルプス連山以上に聖いものがあらうか？ 私はその或る部分を (歐羅巴の共同祭壇) と呼んだ。何故か？ 彼等の高きが爲ではない。より少し高くとも、より少し低くとも、それで吾々は空により近くなる譯ではない。調和といふものが、他所では漠然としてゐるに、此處では實に明瞭してゐるからである。生命の連帶關係、自然の循環、その諸要素の

優しい相互扶助、凡てが眼に見えてゐる。それは一大光明となつてゐる。

各山脈は、此近寄り難い地帯からの啓示として、その氷塊から一奔流を濾過する。これが廣い湖の中に集められ、静められ、純化され、清い水、碧い水と現はれて大河を發し、進むや、佳、至る處アルプスの魂を運ぶのである。此數限りない水から濃霧は再び山に昇るであらう、そして彼等の氷塊の寶藏を新しくする。

凡てが立派な調和にある、そして此背景たるや、湖や流れは、莊嚴な集合群山を遠ざかりながらも、猶、己が發露の本源たる高嶺の雪を、崇高な處女峰を反映し又は凝視してゐる。

彼等は互に眺め、互に語り、互に一致し、互に愛してゐる。だが、何という嚴肅の中に於て、あらう！ 彼等は最も甚だしい對照を恰も同一の如くに愛し合ふのだ。固定と流動、急速と久遠。綠葉の上の白雪、夏から豫覺せられた冬。

此處には物事の中に存する用意周到な性質、普遍的な節度さへ見られる。吾々は享樂す

るに當つて、享樂の長く續かざることを忘れない。だが、胸はかゝる嚴肅な、かゝる純潔な世界に感動しないではゐない。心を繋かれる此簡潔、心を囚はれる此峻嚴。雪から湖水まで、林から流れまで、綠なす爽やかな牧場まで、或る崇嚴な處女性があらゆる國を支配してゐる。

此處はあらゆる年齢の人によりき處である。老年期の人には此處で強健になり、此處で大自然に合體する。そして山々から落ちる大きな陰に悲しむこともなく感激するのだ。猶又若き魂、此處に極光と曙よりと外に感じない人々は、宗教的愛情のいみじき歡喜に胸を開く、世界の魂に對する愛情である、身分もない我子等に對する愛情である。

吾々のお氣に入りの散歩場で又吾々の研究室たる場所はシーブルフ(Seeburg)の奇岩の後、湖水の上を可成昇つた或るさ、やかな樅の林であつた。吾々は其處へ四郡の混つてゐる此輝かしい鏡の素的な反射で二重に明るい二本の道から昇るのであつた。此處からルエセルヌを眺めたら之程美しい景色はない。一方サンゴタールと連山の演戯場に眼を下し

たなら、此程嚴肅な此程莊嚴な眺めはない。だが、此光彩、此偉觀が、我等の椏林の下に一步を踏み入れたら最後、忽然と消えて了ふのだ、吾々は自分が世界の果にゐる様な気がした。

光は落ち物音はそゞろに消えて行く様に思はれた。生命そのものさへ空の様に感ぜられた。これは此林を始めて見る時の當然の結果である。二度目には全く變る。椏の木がその影に成長しようとする他の植物に加へる抑壓で、林の内部は疎らになつてゐる。で、眼が此種の暗光に馴れる時、吾々は普通の森林の、あらゆるものが皆障礙となるあの密生した、茂みの中よりは、遙に遠くまで見え、又遙かによく觀察が出来るのだ。

此光が氣品の高い、そして喪中にある様な数々の柱の下に、先づ最初に吾々に提出したものはお寺の感じとでもいふか、死の光景であつた。けれども、何等悲しみのない死、自然が屢々植物に與へる様な、飾られた、美化された、そして豊かな死の光景であつた。一步毎に、根拔ぎにされたのではなくて切り倒された木々の古い幹が、比なき緑の天鷲絨、柔かさうな細かい筈で造られたフェルト織を着て現はれて來た。その様々に變化する面、そ

の反射、その閃きが眼を惹くのであつた。

だが、動物の生活は一體何處にあつたか？ 吾々の耳はそれを意識し、それを辨別することに馴れた。私は山雀類の呼子に就いては、此處の殿様たる啄木鳥の奇妙な笑ひについては、語るまい。私は鳥類の敵である他の住民を考へるのだ。或る大きな羽音、小川の囁きを充分打消して了ふ程力強いぶうんぶうんといふ音が、吾々にゲープ（蜂の一種）が此森を往來してゐることを告げてゐる。既に吾々は彼等の要塞を見てゐた、其處から、その或る者は吾々の物腰を怪しみながら、無氣味な恰好をして吾々の後をつけて來たりした。

ゲープのそれ程出入しない場所ですへ、軽い、判然しない、内籠りのした幽かな物音が樹木から發してゐる様に思はれた。之は樹木の精靈なのか、女神なのか？ 否、反對だ、樹木の不可思議な敵、暗黒の大住民である。それらは幹の木理に従つて、その長さの限り、之を嚙食して、道路や運河、即ち無數の廻廊を造つてゐるものどもだ。小蠹蟲（之が彼等の名だ）は唯一本の樹に時には十萬近く居ることがある。病める椏は彼等の齒牙に會

つては次第に美しい透かしレースの状態になる。だが樹皮には手がつけられない、従つて木は生命の亡霊を呈する。

樹木は然らば如何にして自己防禦をするか？ 時には樹指に依る。これは、樹木が猶壯健な時には、敵を窒息せしめる。その外に外部より屢々その友達であり、醫師である啄木鳥がやつて来る、彼は注意深く之を聴診する、その強い槌を以つて、觸診し、打診する。そして不撓不屈の熱情を以て、徹宵、此齧齒群を求めぬ。

此動植物二個の生命の内部闘争を、實際に彼は理解しただらうか？ それはよく解らなかつた。吾々は時々誤謬に陥る様に思つた。

とは云へ、此沈黙ともなき沈黙の中で、誰とも分らぬものが、此死の森が生命に充ちてゐることを、今にも言葉を發せんとしてゐることを、吾々に語つてゐた。吾々は希望に充ちて耳を傾けた。發見は確實だ。吾々の好奇心に充ちた魂に、或る大きな復讐的な魂が今にも答へんとしてゐることを感じたのだ。當時非常に優れなかつた健康とその上歩いて來

たのとて私は可成疲勞してはゐるが、此の研究の中に、又此の青白い暗闇の中に喜びを感じたのであつた。私は私の前に、此大秘密に驚駭し感動せる一人物を見るのが好きであつた。彼は細杖を手にして、此幻想的な微光の中を、暗い森に質疑の眼をかけながら、黄金の小枝でも探すかの様にして、歩くのであつた。

私はことに依ると此處を放棄してゐたかも知れない、處が或る空地に私が腰を下した時、遂にそれはく、有效な調査をすることが出來た。他の老木と同様な、或る古い幹の内に、何等疑問の餘地のない一世界を發見したのだ。

根本から地上へ切倒された此幹の頂に、此木の前任民たるスコリートが木質の同心圓にならつて造り上げてゐた事業を余は明瞭と認めたのだ。だが此は凡て古代歴史であつた。問題は全く異つてゐた。是等哀れむべきスコリートは既に滅亡してゐた、彼等の寄木そのものと共に、凡ての生命を拒絶する或る偉大な化學的變化の力を蒙つてゐた。

唯一つ、最も峻烈な、燃ゆる、そして燃え盡したと思はれる生命、非常に小さな形をな

した是等力強い動物の生命、そこに吾々は、或る黒い、稲妻と輝やく焔が凡てのものを燃焼し盡して、唯その精神だけを保存したのだといふことを、何の苦もなく信じたのであつた。

舞臺面の變化は急烈であつた。そして此猛烈なはがゆさがその當然な結果を齎した。常ならぬ激烈な歡喜に、此甲斐ある發見をして全く感動してゐた手が戦いた。そして、その素晴しさが顯はれて來るに従つて、慘忍とも云ふべき程の逆上が此滅亡民族から此大崩壞の招致者へ乗移つた。此都市の城壁が飛ばされた、そして内部建築、廻廊や無數の内室等が現はれた。大體に於て間口四寸、奥行五寸、高さ五分。高さは勿論充分なものだ、で若し私
 が此宮殿の公民と脊丈が同じだつたら、私は如何に莊麗に之を物語り得たことであらう。誠に宮殿、或はむしろ廣大な立派な都市だ。廣さに限りはある。けれど大地の中に何の位深く這入り込んでゐることであらう？ 根氣に任せて掘り返した處、七百階まであつたのを見たことがあると云はれてゐる。テーブやニニヱヴ (Thèbes) 古代埃及の繁華な都市、

Ninive アッシリアの首都) は物の數ではなかつた。唯ヴァビロンとバベルとが (Babylone 古代カルデアの首都、Babel ヘブライ人が天國に登らんとて造れる大塔、聖書) その無法な高まりを以て、此奈落にまで膨張しようとする冥府のバベルに、幾分の比較を持つことが出来るばかりだ。

然し此大いさよりも猶驚かれるのは、此住居の内部の光景である。外部は全く濕つて、苔に黴の生えた、常に濡れてゐる小さな隠花植物に覆はれてゐる。處が、内部は驚くべき乾燥だ、嘆稱すべき清潔さだ。あらゆる壁は柔かさうに見えて堅固で、誠にそれは、強くはないがきらきらすることのない綿天鷲絨で張られたかの様である。此天鷲絨の柔かい黒味は、烈しく變質させられた木そのものからの、又は、木が未だ完全に濕氣を帯びてゐて、その力強い變質力を蒙らなかつた時、樹木の内に繁殖し得る顯微鏡的細菌の極く細かい筋からの物ではあるまいか？ 此變質の作因はそれ自身に見えてゐた。各々の部屋は之を取り出して、間近に嗅いでみると、その蟻酸の鋭い香が嗅覺を捕へる。此住民はこれで

住居の大變質を行つてゐたのである、我が身の焔で焼き、清め、その有効な毒藥を以て乾燥し、衛生的にしてゐたのだ。

此蟻酸が亦勿論その巨大な不思議な事業を援け抄らせたのである、缺としては齒より外に持たない是等倦むことを知らぬ彫刻家にその小さきみな浸蝕の路を開けたのだ。とは云へ、これを以つてしてさへ、非常な時間を要したことは疑ひない。代々相次いで、常に同じ計畫の下に、同じ方向に働きながら、暮して行つたに違ひないのだ。計畫し熱望した都市の幻に、一個の安全な要塞、氣高いそして堅固な衛城を築き上げようとする希望に、長い歲月の間是等の健實な市民が支配されてゐたのだ。噫呼、若し人が自分の爲以外に働かないとしたら、人生が如何なるものになり了つてゐることであらう？ 未來に留意しようではないか。必ずや、先人達は、此樹の中にその生命を注ぎ込んで、根を涸らしながら、その黒い小さな瘦せこけた身を以て、此樹を充たしてゐた樹液を抜き取つたのだ。彼等は、それはそれは哀れな、未だ不潔な濕氣や長い雨で非常に濕つてゐる所に住んで楽しむ

ことすらも出来なかつたのだ、けれども彼等は未來の市民を考へた、そして自分達の後裔を想像したのである。

噫呼、此希望の夢、私はその亡びて了ふのを恐れる。それは、子供の棒や、若々しい女性的な人の手が、大地に之程深く這入込んでゐる憊うした創造物を、それ程深く襲つて了ふといふことではない。けれども、凡てを覆ひ圍つて、雨を拒いでゐた外部の防禦が剝奪され、潰亂されて了つたのだ。そして、さあ此處へ、秋の洪水が、リジイ (Rigi) から、ピラトから、河流の本案サン・ゴタールからやつて來るのだ、或は黒い霧となつて森の上に浮動しながら、或は奔流となつて落下しながら、絶えず下層の室を浸すのだ。此洪水の連續的襲來に、如何なる熱烈な生命を、如何なる焔を對立せしめて、此家門を復興し、その清潔を保つであらうか？

私は或る樅の木の上に腰を下ろしてゐた。私は凝視し、夢想してゐた。共和政や帝政の没落には馴れてゐた、けれども、此の没落は私を思索の海に投じた。一波、又一波、上り

來つては、我が胸を打つた。そしてホオマーの句が私の口に昇つた、

かくてトロワも亦見るべし己が宿命の日を！

私は何をなし得るであらう？ 此潰滅した社會の爲に、殆んど廢墟となつた此都市の爲に、私は何をなし得るだらう、凡ゆる活氣に満ちた種族に、或は追撃せられ、或は啖はれ或は輕蔑せられてゐる此勤勉な、推稱すべき大昆蟲民族の爲に？ 然も吾々のあらゆる者に、私心なき愛情の、公衆歸依の最も強烈な象を示し、又社會意識をその最も熱烈な力を以て示してゐる彼等の爲に？……唯一事。これを理解すること、これを告ぐること、出來るならば、光明と同情ある代辯を務めることである。

吾々は冥想者に歸つた、言葉は交さないが、互に理解し合つた。慙うして此日まで、慰みであり、好奇心であり、研究であつたものが、此時から一つの書物となつたのである。

昆蟲界の大先覺スワムメルダム (Jean Swammerdam, 1637—1680 和蘭の博物學者) が顯微鏡に依つて始めてこれを一瞥した時、喫驚して退いたとしても、私は敢て驚かない。彼等の名、それは無限の生命である。

二百年此方人々は一方では單純にしながら、他方では複雑にしながら働いてゐる。此問題に就いて人々が書いた嘆稱すべき著作は、無數の部分的光明の中に、或る確かな驚異を残してゐる。これが、數年間の此研究が吾々に與へた印象である。

私は私の先師がやつた以上に單純化するものであると自惚れねばならなかつたか？ 決してそんなことはない。私は唯、リュウセルヌに於ける此發見に依つて、又その後の諸發見に依つて、吾々の無智な感動、熱情が、是等小生命が持つ意義の中へ、恐らく分類學者が這入つてゐる以上に遙かに深く這入つたといふことを考へた丈である。

その冬中、私は此問題に苦しめられた、しかも巴里に於ては如何なる試験をも確めることが出来なかつた、私がやがて諸君が讀まうとしつゝ、あるほんの簡單な法則に到達し、此問題に就いて或る精神的慰安を得るに至つたのは、漸くフォンテエヌブロー(Fontainebleau 中央佛蘭西アリエ縣の首都)に於てである。

此場所は私の態度、精神状態を非常に好都合にして呉れた。目前のあらゆる困窮状態は、私を壓縮した、そしてそれが私の自己集中を行つて呉れた。吾々は自己に完全な孤獨を造りあげた。吾々の部屋は吾々に取つては都市の全部であつた。外廓は唯樹木の一圓陣で、それは足で歩き廻ることが出来た、それ程に小さい。

此圓陣が砂岩の上に輝ける太陽の大暑熱の中に、幾分私をひきしめてゐた。だが此乾燥せる暑氣の中では、思索の糸は解けなかつた。私は、根氣強く思索を繼續し、追求することとは出来ない、そして人生に減多に見られない、概念と感情との調和を抱いて、私は之を變化せしめんとせず、深めようと欲した。

私は午になると獨り部屋を抜け出ては、此砂上の、吐息も聲もない陰鬱な無言の森の中を少しばかり歩いた。私は此處へ自分の問題を持つて來た、そして、此無數の落葉に覆はれた無數の砂の中に、それを發見することが出来ると信じてゐた。だが、此活氣旺盛な生命の問題、私が下つて行きたいと思つてゐる微細物の神秘境は猶如何ばかり廣大なものであらう！

フォンテエヌブローに就いてセナンクウル (Etienne de Senancour, 1770—1846 佛、小説家) の言つてゐることは、何等基調的思想を持たない漠然たる夢想家に取つては、眞理である。左様、此處の風景は(一般に小さく、陰鬱で、低調で、孤獨で、何等粗野な處がない)動物は極く稀だ、殆んど一種丈であらう、若干の鹿が見られるばかり。鳥類も多くはない。泉らしい泉も少い、或は全くない。

此水に缺けた外見が、殊にアルプスから來る人を淋しがらせる。アルプスから來る人は猶無數の泉の爽やかさを抱き、數々の湖水の光り、あの魅力に富んだ壯麗な鏡が、猶その

眼にあるのだ。

彼處では、凡てが水と雪とに依つて明るく、輝かしい。此處では、凡てが暗い。佛蘭西の極僻地たる小さな此一角は、一つの謎だ。それは吾々に何等生命の痕もない灰色の死を示してゐる。今日は殊に、此頃植林された松が見えてはゐるが、此木はその樹下に生命ある如何なるものをも許さないのである。かゝる木の下に隠れたるものを發見せんとすれば、その源泉を發見する占ひ杖を持たねばならぬ。然らば此占ひ杖とは何か？ 研究又は愛、同情、此内的世界を照らすものだ。

此地の強味は、その歴史的記念物の中にも、亦その人工的記念物の中にも、決してあるものではない。

* 此處に三つのものがある、壯麗なものとしては、アンリ二世の館 (Henri II, 1519—1559) ランソワ一世の子)、奇異なものとしては、フランシス一世 (François I, 1494—1547) の小屋、崇高なものとしては、比類なき殘存藝術品たる砂岩の彫刻、四個の巨像。

城はその歴史と時代とが此土地に何等の均衡を持たないので、森からは別物となつてゐる。反對にそれは、此處の印象を弱めるものである。眞の天女、それは此地の自然である、それは、この奇妙な、暗い、幻想的な不毛の國である。

森林が、或は視野の廣さに依つて、或は樹木の高さに依つて、偉觀を呈してゐる所は凡て、似通つた森らしい處があるものだといふことを注意して見給へ。バ・ブレオウ (Barbey-Breant) のすらすとした、非常に壯大な山毛櫸林は、それは幹も立派で、樹の膚も滑らかで美しいが、それでゐて、他所でも見られるもの、様に思はれる。此地は、低く、暗く、岩石だらけの點、砂岩と曲りくねつた樹木との鬭争、楡の不屈不撓とか樅の勇敢な努力等を示してゐる點丈が獨特である。

多くの人々は、烏鶉で捕へられた様に、此處に止まつてゐる。彼等は一ヶ月の心算でやつて来て、死ぬまで止まつてゐる。彼等は此處の地へ向つて、愛人が戀人へかける言葉を發ししるる、(私はお前のところで生き、お前のところで死にたいのだ！)

奇妙なことには、誰でも此處に於て自分の愛するものを得るのであつた。サン・ルイ(Saint-Louis)は何處でもない此處で、彼が夢見てゐたテバイド(Thébaïde)古代埃及の一地方、キリスト教修業者の初めて籠つた避地)を見付けた。アンリ四世(Henri IV, 1553—1598)は此處に快樂より外に何も見なかつた人で、(我がうれしき僻地)と言つた。哀れな不思議な追放者コスシュウスコ(Kassiusko, 波蘭の將軍一七九四年露國に反旗を翻し、捕はれたが後釋放せられてより餘生を此處に送つた)はりチュアニー(Lithuanie, 波蘭の二國、彼の故郷)の森の魅力を感じて、此處に根を張つた。砂岩と砂礫の人ブレトン・モウデュイ(Breton Maud'huis)といふ人は、此處に故國ブレタアニー(Bretagne 佛國北方の一地方)を發見し、輔石を以て、フォンテヌプロオに就いての最もオリジナルな書物を造つた。

此地の仙女(La Fée)はどの位變つた顔をして見せるか知らない。彼女はアルプスの冷たい植物を持つてゐる、そして、さうした隠家の陰に、寒がりの地方植物を隠してゐるかも知れぬ。峻嚴な冬と春には、彼女は鋭い岩石を以て人を威嚇し、秋になると、紅葉した木

の葉を以て、それを装ひ又は隠す。同じ日の内に變装する爲には、彼女は、ゆらゆらする美しい絹織を備へてゐる。ランタラ(Lantara, 1729—1778 佛人風景畫家)は彼女を自己の繪の中へ寫すに當つて、之を逸してゐない。例の森では、到る處樹木の頂に、淡い哀愁をといめる、それを以て好んでエールや肩掛や腰帶を造り、不思議な變装を試みる。この重苦しい塊をなした砂岩、それを諸君は不變なものと思つてゐるかも知れない、處が彼等は始終面影を、色彩を、形をさへ變へてゐる。譬へば、アヴンの岩(Le Rochard' Avon)と呼ばれてゐる一鑽の小岩は、朝はヒースの香の中で、曉の最もうきうきした光を以て、砂岩を蔷薇色に染める美事なあさばらけを以て、人々に挨拶してゐる。凡てが微笑する様だ、そして、詩的な敬虔な魂の無邪氣なエテウッドに調和する様だ。夕に人々は此處へ戻る、所が、氣まぐれな仙女は變つてゐる。松は吾々をその輕やかな日傘の陰に歡待して呉れた、それが急に野蠻になつてゐる。彼等は奇怪な音響を、凶兆の悲憤を轟かす。歡木は今朝優しげに白衣の人を招待して、漿果や花を摘ました。それが今や自分の茂

みの中へ、何かしら不穏なもの、盗賊か？ 妖術者か？ を匿つた様な風である。けれども最もはけしい變化は、吾々を迎へて腰をかけさせてゐる岩石である。彼等を變化せしめるのは、夕刻といふ時か又は差迫つてゐる急雨か？ 私はそれを知らない。だが、見給へ、彼等は陰鬱なスフィンクスとなり、大地に寢轉んだ象となり、マンモスとなり、その他既に存在しない古代世界の怪物となる……：彼等は坐つてゐる、それは眞實だ、だが、彼等が立上らんとしたが……：そんなことは何うでもい、時が経つてゐる、さあ先へ進まう……：皆が私の腕を急がしてゐる。

然らば此森は(as you like it)「御意のま、に」なる喜劇の名に相當するか？

違ふ、彼女を公正に判断すれば、此身の慰み、姿態の凡ての變化は、外面的のものであると、言はねばならぬ。木の葉や梢を自在に動かし、巻き揚がる砂中にのがれつ、も、彼女は如何なる森も恐らく有たないであらう様な底深い座を持つてゐる、魂に通ずる固着の力を持つてゐる、靈魂を確立せしめ、靈魂が不斷に包藏する處のものを追求探査する力を

持つてゐる。かの奇怪な事件にあまり捕はるゝこと勿れ。外面は言ふ、御意のま、に、内面は言ふ、永遠に永遠に。

その胸に秘められた深い、誠實な、そして優しい眞の美、これこそ彼女の風情を變へずにはゐないものだ、そして毎日シャルル・ドルレアン (Charles d'Orléans, 1391—1465 中世紀の詩人) の言葉を口にせしむる力を持つものだ、

彼女には何人か、くべしや？

とこしへにその美あたらし。

恚ういふ情が浮んだのは、或日ユッシイ山 (le mont Ussy) に腰を下ろして、フォンテエヌプロオの方を眺めてゐた時であつた。私は此狹隘な平凡な場所に、砂岩と樹木との外見的無秩序の中に、可成規律立つた一形式がある様に思つた、それが、彼女の内に、一瞥した丈では如何しても分らない様な、或る神祕を隠してゐるに相違ないと思つた。

要するに、此處はまあ、表面の全く乾燥した一圓の森林と丘陵である、だが此砂石は非

常に泌透質である、此砂は非常に浸潤質である。そして人の眼にも觸れない水は八方から、此地底を占めてゐる一大貯水地に降つて行く。

驟雨は此地には屢々ある、だがそれはそこへ溢れてはゐない。何時でも人々は雨を待つてゐる有様だ、森は雨を抑留し、阻止し、自分の爲に此盡きない水の富を保管する、そして、木の葉や樹木や下層の砂等に依つて必ず之を濾過しては底へ送る。これらが誰にも見られない内に。凡て下方に到達する。

發掘して見給へ、然らば諸君は發見するだらう。

其處に大變なもの、此地の精靈の生命力があるのだ。

精靈なる語は非常に固的である。仙女なる語は非常に動的である。誰が此深い隠れた鉢の神祕を説き明かすであらう？ 乾燥とばかり見せかけて、そのかけには忠實に水の寶を保存してゐる此素朴な、愛すべき偽りを？

伊太利の或大藝術家がこれをアンリ二世の館の繪の中に現してゐる。それはネモロザ

(Nemorosa)といふ繪で、兩手に一杯野の花を持ち、尖つた岩の根本に身を寄せてゐる、柔しい夢みる様な女、そしてその眼は涙に濡れてゐる。

吾々は此大作のお影で幾度となく之を感じた、殊に細かい優しい雨の降る日に感ずるのであつた。それは吾々の周圍に、恰も自然のもてなしの様にあらはれた。此深い沈黙の裡に聞えるものとは自分の心臓、時計の振子、時に頭上を過ぎる燕の叫び聲ばかり。

それはまどろむのでは決してない、より大なる覺醒に、より明らかなる注意に鎮靜されてである、吾々は、より深く此暗いアトムの世界に突入した、そこから、そこに存在するものを、光明を、殊に愛を、此の無言の世界の眞の公正を、その言語を、上部世界に話しかけようとするその雄辯な聲を、電出さうと欲して。

四

此大沈黙の時にさへ、森は時に音聲、物音、又は咳きを發して、諸君に生命を呼び起さ

せる。時々勤勞な啄木鳥が、その樅を穿つ苦しい勞働の合間に、奇妙な叫聲を發して自ら勵ます。屢々砂岩の上に打下ろす石工の重い鎚が鈍重な響きを遠く響かせる。最後に、若し諸君が耳をそばだて、ゐるならば、或る物言を明瞭と掴むに至るだらう、そして諸君の足下に、無數の民衆が、此地の眞の住人が、蟻達が、敲苦茶になつた木の葉の間を走つてゐるのを見るだらう。

根氣強い勞働の同じ相、それが此幻想の地に威嚴を添へてゐる。彼等は皆各自各様に掘鑿してゐるのだ。お前も亦お前の仕事に従へ、お前の思索を掘鑿せよ。

現代の大なる疾患、動搖性、無益な激動を癒すべき最上の場所。現代人は此疾患を知らない、彼等は録に觸つても見ない内に、獨りでもう充分だと思つてゐる。彼等は、萬物に於て、最も大切なものはその表面だ、その上部だ、そして口唇を其處へ持つて行けば充分だ、といふ全く誤つた考へから發足してゐる。上部は屢々泡である。最下部にこそ、その内部にこそ、生命の飲料が存在する。意志と習慣とに依つて、より深く泌徹してこそ、よ

り強く混入してこそ、幸福と力とが共に含まれてゐる調和を發見することが出来るといふものだ。不幸と精神的貧困とは精神の分散の謂いである。

余は思想の分野を集中し、緊縮する場所を愛する。此處、此狹隘な圓陣をなした諸丘陵に於ては、變化は全く外面的で、純粹に視覺にのみ憑へてゐる。此程の障礙物があるので風は自然に殆んど變化しない。此寒氣の固定は精神的沈着を與へてゐる。人の思想が此處では強く覺醒するか否かを知らない。だが、覺醒せる思想を持つてゐるものは、それを長く保持し、そこに遺漏なく自己の夢を愛撫し、外は事變の凡てを、内は神祕の凡てを把握し、味到することが出来よう。魂は其處に根を張るだらう。そして、眞實の感覺、生命の微妙な感覺は表面を走るものではなくて、奥底に這入つて觀察し、追求し、享樂すべきものであるといふことを發見するだらう。

此場所がその思想を豫告する。木の葉の動搖の下にあつて固着不動な砂岩は、自己の沈黙の内に充分物語る。彼等は其處に据えられてゐる、何時からか？ 遠い昔からだ。だか

ら、彼等の硬さにも拘らず、雨滴が彼等を穿つてゐるのだ！ 他の如何なる力もそこに加はりはしない。かゝるものが彼等だつた、従つて、彼等はかゝるものである。彼等の外觀は心に言ふ、(不撓不屈)。

彼等は植物の生命を排斥せずにはゐない様だ。けれども勇敢な樅の木は失望してはゐない。此處に生きて行くべき運命を擔ふて、彼等は直立して來た。その曲りくねつた根、岩石を擱む力強い爪を以て、彼等も亦、彼等の方法で、雄辯に語つてゐる、(不撓不屈)。不屈な此木は、拒絶される以上に固執しつゝ、自由な方面から、益々大地の底へ割込んでゐる、測り知れざる力を吸ひ取つてゐる。彼等の一人、シャルルマアニュと人が名付けてゐる哀れな老いたる巨人は、疲れ、瘦せ、雷に撃たれ、長き時代と、多くの事變とを経てゐながら、猶その腰の上に確乎として突立つてゐる。その枝の唯一本文にさへ、彼は腕を伸した樅の大樹を以て自ら誇るの概がある程である。

砂岩と樅との間には多くの利益がある。若し諸君が此地で働いてゐる人間を見るとすれ

ば、彼は樅の下にはゐないのだ。私は、とても人間の手が使ひこなせるものではないと思はれる様な奇怪な鏈を以て、砂岩と戦つてゐる勇敢な石截工夫に會つた時、彼等は砂岩に對しては忍耐力の強い力を持ち、樅に對しては鋼鐵の心を持つてゐるだらうと、極く自然に感じた。そしてこれは勿論その魂、その意志に對しては眞實である。けれども肉體はそれ程頑強なものではない。彼等の大部分は四十歳で死んで了ふ。初めて傭はれて來たものは正にその優者だ。彼は仕事に最も熱心である。

石工と蟻、これが此森の全生命だ。既に吾々は蜜蜂のことも語つて置いた。彼等はそれは非常な數だつた。そして猶存在する。殊にフランシャルの方面に見られてゐる。だが松や、その他北方の樹木が非常に植林せられたので、彼等は減少して行かねばならなかつた。是等の樹木は、その影に何者をも宿さない、大部分の場所に、ヒース及び花卉類を廢滅せしめて了つた。その代りに、灰褐色の蟻が、松柏類の針や松毬を足場として、此處に繁殖し始めた。如何なる森も恐らくこれ程蟻の種類に豊富ではあるまい。

是が此僻地の眞の住民であり、此地の魂である、砂に働く蟻と、砂岩に働く石工。互に同じ才能を持つ人間は上の蟻であり、蟻は全く下の人間である。

私は、彼等の運命、彼等の勤勞的忍耐力、彼等の驚異すべき根氣強さ等の類似に讃嘆した。砂岩は非常に頑固な始末に終へない物質だ。屢々變な風に割れては、是等哀れな勤勞者に大失望を齎す。殊に長い冬の後、此悪い期間の終りに仕事場に歸つて來る人々は、是等の塊物（非常に堅いが然も非常に泌透性だ）が全く濕氣を帯びて、半ば凍結してゐるのを見る。それで、多くの切石が不成功、屑になる。然るに彼等は少しも落膽しない。そして愚知も云はずにその激しい仕事を再び始める。

同じ忍耐の教訓が蟻に依つて與へられてゐる。鳥類牧養者、雉子類飼養者達が、絶へず彼等が一季間を賭して造りあげたその無数の卵を損傷し、顛覆し、搔擾つて行く。處が、彼等は又絶えず勇敢な熱情を以て、造り直してゐる。

吾々は終始彼等を觀察して行つた、そして次第に彼等に意氣投合する様になつた。彼等

の根氣強い態度、その活動的な熱中のな生活は、實際、そわまで吾々を捕へてゐた鳥類の翹翼生活よりも、遙かに勞働者の生活に似てゐる。あの自由な日の所有者、自然の寵兒は、非常な高所から人間を瞰下してゐるのだ！……何者に、私は私の長い勤勞生活を比較し得べきか？ 私は時に大空を眺めて來た、時々高空の歌に傾聽する。けれども私の全存在、著作の上に私を引着けてゐる飽くことなき勤勞は、私を、此蜜蜂と蟻との謙讓な協力に、最も近く類似せしめてゐる。

彼等の同業者、石截工夫の仕事は一目した處では、あまり見よいものではない。出來損ひの角も録に揃はない多くの石、多くの破片、多くの埃、砂、それは心を惹きつけはしない。人々は廢墟の野を見る様に思ふ。けれども大自然は何う考へるだらう？ かりに、植物が此砂石にしがみつき、之をほぐし、之を土壤として己が使用に役立たせんとする時のあの熱心を標準として、私が之を判断するならば、此何千年來砂岩の内に閃ちられて、運轉することのなかつた物體が、宇宙の生命が持つ運動性の中へ歸するのを見て、大自然は

喜んでゐる様に、私には思はれる。岩石に對する人間の此幸ある抗爭は、遂に此の長い呪縛からその拘禁要素を引出してゐる。草が之を占領してゐる、樹木が之を占領してゐる、動物が之を占領してゐる。絶へず次第に岩石から造り出される砂は、凡て、廣大な地中の世界の活動性に泌透し得るものとなる。

如何なるものも此程私を恍惚たらしめたものはなかつた。如何なる光景も此程強く私自身の上に私を連れ來つたものはなかつた。私、私も亦、長い間、譯の分らぬ哀れさ、のろのろしさに依つて、此の頑固な砂岩の様なものであつた。屢々何者も食ひ入ることの出来ない様な、又は、變な風に割れて了つて、不恰好な、不正確な、廢物の破片より外に何も出來ない様な砂岩だつた。私は、『歴史』の重い鐵鎚に依つて、私自身から解放せられ、私の障礙物から引離され、打碎かれ、釋放せられねばならなかつた。

嚴肅な解放。私が未來の大石匠に與へた若干の石材の爲めに、私は私自身から何を失つたらうか？ 時々、過去現在から二重に答打たれて、私は自分が粉々に、何と云はう？

塵に、埃に、なつて了ふ様な氣がする。そして時々、自分の上に、石截場の底を見る様に、砂の凡てを、破片の凡てを見るのだ。

之は、然しながら、全能の大自然が、此の小石の底に隠された、私には分らない或る活かに依つて、私に更新を行ふ處の要素である。ほんの僅かな草やヒースを以て、「歴史」と宇宙とが粉碎し來つた所のものを再び結び合せながら、自然は微笑を湛へて言つてゐる。
〔お前方は凡て時間である。私は永遠の大自然だ。〕

さて、これが積年の破片に蔽はれた荒涼たる石截場である、それは緑に染つてゐる、猶多くの雜草を生じて、自分を蔽ふてゐる、人が鐵を入れるまでは、決してかゝる雜草などは見られなかつたものだ。(冬の野生植物か？ 黒い樅か？ 陰氣な樺か？……)勿論、かかる悲しみに溶入るものは山楂子の花より外にはない。

恰も乾燥した塊、石の人の様にしてゐた私の多年の沈黙の中に、私が探し求めてゐたもの、それこそ此の活力の流動性、溢流の氣力であつた。私の遅れ馳せな青春が私の打捨に

(四四)

なつた魂を伸べ擴めようと欲するのである。昨日は光明に向つた心の飛揚「鳥類」を出した。今日はその同じ力が反對に私を大地の下に連れ來つて、諸君と共に動物變形の生ける大海に乗出さしめる。神祕と暗黒との世界。とは云へ、こゝは、魂の尊貴な二個の寶、不滅と愛との上に最もよく透徹する閃光の存する所である。

一八五七年九月八日

フオンテエヌブロオにて。

第一章 子供の恐怖

(ルイジアヌへ向けて父が出發してから、その冬も過ぎてゐました。夏で、殆んど好天氣ばかり、父は歸つて來る筈にはなつてはなりませんでした。田舎の私達の家は住む人もなく打捨になつてゐました。妾の母は豫覺力が強く、自分で其處へ行くのを恐れてゐたので、妾が其處へ或午後のこと、弟達と一緒に果物を取つて來る様にと遣られました。

(妾は出かけました。實を申せば、或幻の名残を抱いてゐました。もう殆んどあの戸口に妾を迎へて呉れる優しい父の腕を又見付けた様に思ひ込みながらでした。

(全く胸を躍らせて、妾は屋敷の第一番の關門を飛び越えました。そして踊り上りながら、戸口の前に到着しました、それは幾度も幾度も父が、あの今でも眼に寫る優しい微笑を以て、妾達に開けて呉れた處です。

(子供、そしてもう娘で、何事も夢に支配されてゐる様な想像力の時代にあつた妾は：

(四五)

自分の心の執拗な要求を事實と取違へてゐました。妾は或不思議な不安の内に、一時を戸口に待ちました。妾の信念の力がこの悲しい現實を征服せずには置かなかつたのでありませう……けれども、戸は閉ぢられたまゝでした。……

(そこで、手を顔はせながら、妾は自分で戸を開けて、せめて父の影でもそこに求めようとした。それさへそこには消えてゐたのでした。或闇の世界、光の敵が、此の隠家に忍び入つてゐたのでした。妾はまるでそれに包み蔽はれて了ひました。

(父の小さな黒いテーブル、哀れな家庭の遺物、父の書架などは喫嚙蟲の齒にかゝつて、その間隙の處から軌り鳴つてゐました。室が既に古色蒼然たる様子になつてゐました。大きな蜘蛛達は、動きもせず、恰も此處の主人の様に、空な寢間に一面に糸を張つてゐました。鼠婦は無数の足で走りました、羽目板の下に隠場所を求めて彼方此方這ひ廻つてゐました。

(此の意外な奇怪な有様が痛ましくも妾を貫きました、妾はハツと我に歸り、涙を溢れ

させて叫んだ程でした。(お、お父さん！ 何處へ行つたんですよう？……)

(此の瞬間から、最う妾は此場の荒廢を感じませんでした。そして到る處、庭の中にも園の中にも、此の妾達の所を占領してゐた無言の新主人を見るのでした。

(もう夕の靄は逸早く太陽の最後の光の中に混つてゐました、そして、蝸牛が、此の暖かい濕潤に誘はれて、既に小徑を蔽ふてゐた木の葉の中に群をなして出てゐました。彼等はのろ／＼と、けれども確固と歩いて、落ちた果實を食べてゐました。蜂は、やはり大舉して、妾達の最も、獲物、妾達の最も立派な葡萄の實を、その鋭い齒に寸斷して、大膽な掠奪を專にしてゐました。

(妾達の林檎の樹は、毎年非常によくなつたものが、青蟲の紡いだ麻織に蔽はれて、黄ばんだ葉より外に何も出來てゐませんでした。僅か一ヶ年の内に、彼等は老いて了つたのでした。

(妾は此の世界には携はつてゐませんでした。父の注意と、それに猶小鳥達の援助とが、

妾達の手を煩はさなかつたのでした。猶又妾は、自分の無経験と、心が慄の様な荒廢に鋭く痛められてゐたのとで、呪つてはならない者を呪いました。何といつてもあらゆる生物は神のものでございますもの。

〔その後、勿論ずつと後、妾は攝理の教を悟りました。人がるないので、凡てのものが、大坩堝の中を通る爲めには、更新される爲には、昆蟲がその場所を乗り取らねばならないのです。〕

此處に子供の本能的恐怖と嫌忌とが見られる。だが吾々は凡て子供だ、哲學者さへ、その宇宙的同情の全意志を持ちながら、此の感じからまぬかれてはゐない。昆蟲が殆んど例外なく所有する奇怪な武器の恰好が彼には人間に對する威嚇だと思はれるのだ。

鬪争の世界に生きて行く昆蟲は、生れながら、あらゆる種類の武装が大に必要であつた。熱帯地方の昆蟲は殊に、見るも恐ろしいものが多い。

然しながら、吾々を恐怖せしめる此の武器の大部分、鋏、爪、鋸、鐵串、螫、絲生器、伸金器、鋸狀の齒等、彼等が戰場に向ふ古武士の様な風をする此の驚く可き兵器庫は、之を仔細に驗分するならば、多くの場合、己が生活の資を得る爲めの平和の器具、彼等の職業の道具である。此處に於てか、此の工人は凡てを身につけてゐる。彼は勞働者であると同時に工場である。我々人間の勞働者にした處で、若し彼等がその仕事に使用してゐる鐵器や鐵屑を身に逆立て、何時も歩いてゐるとしたならば、一體何うであらう？ 恐らく彼等は奇怪な怪物に思はれるであらう、吾々を恐怖せしめるであらう。

昆蟲は、後に調べるであらう如く、境遇に依つては、防禦又は饑餓の必要に依つては、闘士である。けれども一般には、彼は何よりも、さうして主に、産業家である。彼等の技術に依つて類別することが出來、又、一職業團體の旗色の下に集めることの出來るものは、唯の一種も存在しない。

此の技術がなす仕事、又は人間の舊式な同業者の言葉そのもので言ふならば、此の勞働

者の傑作、そこに彼が熟練家たることが證明されてゐるが、それはかの搖籃である。彼等に於ては、母たるものは子を産むと當然死なねばならぬので、その遺兒を守り、養ひ、且つ母の役目をなす處の巧妙なる隱家を創造するといふことが大問題である。かゝる困難な事業は、吾々には不可解に思はれる様な器具を必要とする。諸君が中世紀の短刀、伊太利の暗殺者達が持つ狡猾不信な武器にも譬へるでもあらう様なものは、反對に愛と母性との器具である。

そればかりではなく、大自然は、吾々の様な、偏見や嫌惡や子供じみた恐怖などを持たうなどとはしてゐない、自然はむしろ彼等、此吾々の小さな耕作上の調和を害してゐる、けれども又一方種の均衡を保持し、或風土の下に行はれる植物の雜生を防いで、巧みに調和を助成してゐる此喫嚙類を、特別に愛護してゐるかと思はれる程である。自然は、吾々が退治する幼蟲を非常な注意を以て守護する。彼女は(櫛の幼蟲などに見るごとく)その卵に釉藥を施してやる様な注意をする、枯れた葉の下で風雨に打たれる彼等が冬に少しでも

堪へ得る様に。行列毛蟲は、蟻となつて、自由に楽しく樹蔭に舞遊ぶ様になるまで、厚い毛皮の衣を着て、その敵群に備へる。

或もの等には、もつと用心深いものがある。生活變化の最も根本的な固が、他のもの以上に、存續の保證を持つてゐた、彼等の種の不滅を必然的に確立してゐる。

例へば、木虱だ、^{ビユシロシ} 彼等は交互に胎生卵生で、夏は直ちに活動に就ける様に生物として生れ、秋の落葉して、樹液沈滯の時には、冬の寒氣に抵抗する爲に、卵として生れる。矢張彼等の慈母たる自然が、前代未聞の此賜もの、四十回の生産にも相當する繁殖力を此寵兒に與へてゐる!

かゝる特權生物は、明らかになすべきことを持つてゐる、彼等がなくてはならぬもの、彼等を以て世界調和本質の一部所を造る所の或偉大な、重要な使命を帯びてゐるのだ。群星は必要である、だが羽蟲も同じである。銀河の中には大なる秩序がある、だが蜂群の中にもなくはない。群星の生命がさして重要なものであるかないか、誰が知らう! 私は

彼等の行列するのを見る、然るとき神はそこにみそなはず。昆蟲類の一種も點呼に漏れてはゐるのである。蟻の唯一種をも缺いてみよ、それこそ重大だ、宇宙の調和の中に危険な空隙が生ずるであらう。

第二章 慈 悲

畫家のグロ (Antoine-Jean-Gros, 1771—1835 佛の有名な浪漫派の畫家) のアトリエへ或日その弟子の一人が這入つて來た、無頓着な若者でその時彼は今しがた捕へて來た、そしてまだばたばたしてゐる美しい蝶を意氣な心算で自分の帽子に刺してゐた。それを見た此美術家はむつとした、彼は烈しい怒りを發した、(まあ! 何といふことだ、と彼は言つた、それが美しいものに對する君の感情なのだ! 君は愛らしい生物を發見しても、それを苦しめるより外には、そして慘酷にも殺して丁ふより外には何にも出來ないのだ! ……此處を出て行き給へ、再び這入つてはならん又と再び私の前へ決して來てはならない!)

此言葉は、大藝術家の鋭い感受性が如何なるものであるか、美に對する信仰が如何なるものであるかを知る人々を驚かしはしないだらう。それよりも驚かれることは、或解剖學者、メスを手にして生活してゐる人、リオンネ (Lyonnet) が、最も感情を惹かない様な

昆蟲の問題に就いて、同じ意味のことを語つてゐるといふことだ。此忍耐強い老練家は、人も知る如く、柳の青蟲に就いての深奥な研究に依つて、科學の上に一新機軸を出だしてゐる。それに依れば、昆蟲は筋肉上に於ては高等動物と同じであることが知られてゐる。リオンネは、此長い研究を終了するに當つて、彼が叙述せんと欲した昆蟲を七八匹しか殺さないで、すんだことを自らよろこんでゐるのである。

此れ研究の尊貴な賜である！ 根氣強い勤勉に依つて生命を深く研究した時、彼は昆蟲に冷酷になることなく、益々同情されて來た。此の微細物のほんの一吋した委曲が、自然が至る處に隠蔽してゐる鋭い感受性の源泉を、彼に開いてゐた。彼は又、動物の最低階級にも同一物を發見してゐた、そしてあらゆる生動に尊敬を拂つてゐた。

昆蟲は吾々を嫌惡せしめる、不安にする。時に、吾々が無智であればある程吾人を恐怖せしめる。然しながら、昆蟲の殆んど全部が、殊に我が國の氣候に於ては、無害である。

だが吾々は知らぬ物を怪しむのだ。殆んど常に、吾々は彼等を様々な言譯の下に殺してゐる。

私は或朝のことを思出す、六月のある朝、四時頃、太陽は既に高かつた、私は可成急に眼を覺したが、まだ非常に疲れてゐて睡かつた。私は田舎に居た、部屋は東に面して鎧戸も窓掛もなく、光線は私の寢臺までもとゞいてゐた。一匹の美しい山蜂が、何うしてか分らないが、部屋の中に這入つてゐた、そして、光の中をうれしげにふいふい飛びながら、ぶんぶん羽を鳴らしてゐた。此物音に私は苦しめられた。私は起き上つた、そして彼が出たがつてゐると考へたので、窓をあけてやつた。だがとんでもない、そんなのは彼の望みではなかつた。朝は、如何に素晴らしい天氣にしても、非常に冷えて、甚どく濕つぽかつた。彼は部屋の中に、自分を乾かして暖めて呉れる好都合の溫度の中に、止まる方を選んだ。外は、四時だ、内はもう午だ。彼は正しく、私もさうしたであらう様に行動した、出では行かなかつた。私は彼に時を與へようとした、私は窓を開け放しにして、又寢て了つ

た。だが休む手段もあらばこそ。外部の冷氣が這入つて、彼も亦前より一層這入り込んで、部屋中をふいふい飛んでゐた。此執拗な五月蠅い客には私も幾分機嫌を悪くした。私は起きた、非常な勢ひで彼を追拂ふことにした。ハンケチが私の武器であつた。が私は勿論それを巧みに役立てることはとても出来なかつた。私は彼を茫然たらしめ、恐怖せしめて了つた。彼は夢中になつて旋回した、そしてますます出ようなど、はしなかつた。私は益々びれて行つた。私は益々烈しく追回した、疑ひもなくあまりに烈し過ぎた………彼は窓の手摺の上に落ちた。そしてもう再度起きあがらなかつた。

彼は死んだのか眼をまわしたのか？ 私はこんな場合には、空氣が彼を蘇生せしめるであらう、彼は出て行くであらうと考へて、確かめもしなかつた。私は又床に這入つた、だが矢張可成不満足であつた。要するに、これは彼の罪だ、何故彼は出て行かなかつたのだ？これが私が起した初めの推理だ。次に、反省して行くに従つて私は自分に對してもつともつと嚴重になつた。私は自分の短氣を責めた。斯の如きは人間の專横だ。人間は如何

なることも恕すことが出来ない。此の萬物の王は、あらゆる王と同じく暴虐である。最少限の背馳にも、彼は憤激し、爆發し、殺す。

その朝は非常な美はしい、冷たい、けれども既に少しづつ、暖かくなつてゐたい、日であつた。此國の此季節に特有な温度のいみじき混和、それは六月のノルマンディ (Normandie) に於て、あつた。此月に特有な、そして次ぎに来る月と全く區別せられる特性、それは、是等無邪氣な動物、植物に依つて生活する種類が凡て生れてゐる、が生餌を必要とする殺人種はまだ生れてゐないといふことである。羽蟲が多く蜘蛛がゐないといふことである。死は始つてはゐない、愛のみが働いてゐる。怎ういふ考が私にやつて來た、がとても愉快にはなれなかつた。萬物が信頼し切つて生活してゐる斯ういふ恵まれた聖い時に、私は既に殺害を演じてゐた。人間のみが神の平和を破つてゐたのだ。此思ひが私に苦しかつた。犠牲が大であらうと小であらうと、それは大したことではない。死は矢張死だ。而も私が此春の優しい平和を亂暴にも攪亂したのは、宇宙の田園詩を汚損したのは、何等重大

慈

な機に接したのでもなく、又何等挑みを受けたからでもない。

慚う次第に考へを擴げながら、私は床上から時々窓の方を眺めた。私は、若しや山蜂がまだ少しは動きはしないだらうか、實際に彼は死んで了つたのかどうか、それを觀察した。だが不幸にも駄目、完全な不動。

悲

それが約三四十分も續いた。次ぎに突然、彼の様子をほんの一寸とでも知ることの出来るような何等の動きも見せなかつたのに、吾が山蜂は確固りと勢ひよく飛び上つた、恰も何事も起らなかつたかの如くに、何の躊躇も見せなかつた。彼は、もうその時、完全に温まり、日光の一杯に輝いてゐる庭の中に飛んだ。

私は敢て告白するが、幸福になり安堵したのは私自身であつた。けれども、彼は疑ひもなく、と私は思ふ。彼は、その小さき用心の中で、若しも自分が、自分に立歸つて來た生命の顯を一寸でも見せたなら、自分の死刑執行人は自分にとゞめを刺すであらうといふことを考へた。そこで、彼は巧妙にも死を装つた、自分が力と生氣とを充分取返すのを、自

分の乾いた暖かい羽根が完全に自分を運ぶ準備が出来るのを、待つたのであつた。そうしてから始めて、一飛躍、さようならとも云はずに出發した。

スイスの旅に於て、あつた。吾々が始めて眞面目な研究にかゝつたのは、外觀より外に分らない蒐集に最早満足出來ないので、メスと顯微鏡に依つて内部組織に這入り込まうと腹を決めたのは。その時矢張り吾々は始めての罪を犯さねばならなかつた。

慈

私は、想像以上に劇的な此の熱中、此の感動が吾々の旅行に障害をなしたことを言ふ必要はない。此の美しい、崇高な、莊嚴な地方は勿論その魅力を吾々の上に失つてはゐなかつた。けれども生命、苦しめる生命(又それは苦しみを與へなければならなかつたものだ)は此處に於ける心氣の轉換をなさしめた。此素晴らしい巨人の不滅の讚歌又は叙事詩は、此の吾がをそろしい小人達の劇に殆んど對立することは出來なかつた。一匹の山蜂は吾々からアルプスを奪つた。十日で死んで了ふ甲蟲類の苦惱は吾々の眼からモン・ブランを蔽

悲

ふて了つた。一匹の蟻の解剖は吾々にユングフロオの存在を忘れしめた。

構ふことはない、何が大で何が小か誰がよく之を知らう？ 大自然の胸の中に於ては、不偏な宇宙の愛の中に於ては、凡てが、大だ、凡てが重要だ、凡てが平等だ。吾々が眼を注いだ此の小生物界に就いての無限の研究以上に心を惹かれるものが何處に在らう？ 彼の連峰に登る人々、此の昆蟲界に下る人々、それは一であつた、同じことであつた。

(七月二十日、非常に暖かい、けれどもシロンとクラランの間にある湖水の上を渡る朝の微風がまだ肌寒く思はれる日に、妾は唯一人散歩に出た。夫は内に残つて書ものをしてゐた。太陽はヴォオ地方の妾達の谷を斜に這つて、サヴォワに對立してゐる山々を一面に照してゐた。既に輝き始めた湖水は、岩の鋭い稜角に反射して活氣を呈してゐた。

(時が経つて太陽は廻り、光景は變る。暖かい光りはシロンの彼方から此のヴァレエの長い隘路に射し込み、ミデイの尖りを照し、遠いサン・ベルナルの頂上をほんのりと彩色してゐる。けれども妾は此の輝かしい光景よりも、わがモントルウが陰影の中に休んでゐる

朝の時が好きだつた。それはその小さな聖堂にとつての信仰の時であつた。聖堂の臺地は中腹にあつて、脊に急坂を負ひ、樹木が生繁つて暗かつた。そのテラスの下に鐘乳洞の様な美しい苔むした洞穴があつて、ヒヤリとする様な涼しさを保つてゐた。その上に、心地のよい木のベンチに囲まれたお寺、葡萄作り達が書物を借りに行く小さな書庫(別な寺)最後に美しい泉などが優しい威嚴を以つて小さな可愛氣な集ひをなしてゐる。その朝は殊に、今日の日の暖かさを豫告する霧に半ば蔽はれて、此の聖地はしみじみと信仰の思ひを起させてゐた。

(山へ行く淋しい、花に縁取られた最初の坂を登つて妾は屢々此處へ來た。妾は一書を携へて此處へ來た。けれども殆んど讀まなかつた。此の眺めに餘りに心が奪はれるのであつた。或は遠く氷つた湖水の面、メユリイの岩石、森、牧場、懸崖、或は近くクラランの住家、シロンの低い數々の塔、そして最後に私の視線は夫の勉強してゐる或友人の青い扉の附いた美しい家に歸るのであつた。妾は半ば夢みる心地であつた、戦く妾の心は聖い

調和の優しさを感じるのであった。

(けれども間もなく妾は自分が全く獨り居るのではないことを識つた。蜜蜂又は山蜂達が矢張早くから登山して、露の下を花の中へ滴る蜜を求めてゐた。輕快なみちしるべの類は是等羽蟲達の守獵を開始し、一方もつとのろのろしい動物達、蛆といふ暗い碧玉はその生活を雜草の底に求めてゐた。)

(そこで此日七月二十日、視野が機械的に足下に落つるまゝ、眼を餘りに輝かしい此の畫面から一時離した妾は、此の美はしい祝福された處に慘忍な鬪争を以つて著しい對照をなしてゐるシーンを發見して驚きの眼を見張つた。大甲蟲(セルフ・ヴォラン)と呼ばれてゐる、我が國では最も大なるものの一で、十文字になつた立派な鋏を備へた角のある、體の黒く輝く巨蟲が、體區の劣つた甲蟲を捕へて攻撃し始めてゐたのであつた。とは云ふもの、此の兩敵は、古武士の胸甲や籠手や脛甲をならつた様に、兩方共に驚くべき防禦の武装に蔽はれてゐて、その決鬪は長く慘酷なものであつた。共に殺人種で昆蟲を食として

生きてゐる兩者、自が臣下をむさぼり食ふをこと、してゐる大名達である。たとへ此決鬪の犠牲が何うあらうとも、小人民達は確かに嬉んでゐたのもあらう。けれども、かゝる場合戰士を引分けさせようとする本能的な、盲目的な力が、妾を驅つて之に干渉せしめた。妾は傘の端を以て、巧にみ、靜かに、兩者を傷けることなく、此の二人の鬪士の強者の方に手を引かせしめないではゐられなかつた。)

此の捕虜は持ち歸られて、何等訴訟の手續きもなく、その兄弟亂食の罰として、吾々の觀察に應ずべき判決を受けた。然しながら、吾々の方法は決して昆蟲類を刺さないといふことであつた。恐ろしい刑罰、痛ましい光景が終つてはゐない。その後一ヶ月及びそれ以上にも、諸君は是等哀れな十字架上の者達が猶動くのを見るのである。エーテルは一般に速かな、けれどもらくくとした死を與へるものである。其處で吾々は此の捕虜に充分エーテル麻醉を與へた。一瞬間彼は廻つた、そして落ちた。吾々は彼が死んだと思つた。一二時間過ぎた。處が見給へ、彼は生き反つて、慄へる脚に身を動かして、歩まうと努力す

る。彼は再び轉ぶ、が猶又も起きあがる。だが、彼は醉漢の様に歩くばかりであるといふことを言つて置かねばなるまい。子供なら之を笑つたでもあらう。吾々は笑ふ處ではなかつた、猶彼を麻酔させざるを得ないのだ。より強い一服がもられた。無駄、彼は又しても蘇生するのだつた。奇妙にも、運動能力を減殺した此種の酔は、それ丈過度に神経を、或は性的能力と呼ばれるであらう處のものを、刺戟した様でさへあつた。彼がそのよたよたする物腰と、最後の努力とを以てなさんと欲した仕事、それは、卓子の上に死んでゐた同屬の雌に接近することであつた。彼は彼女に脚で、そのをの、く腕で觸つた。彼は彼女をひつくり返した。彼女が生きてゐるか否かを確める爲めに（恐らく彼はもう見えなかつたのであらう）探つた。彼は彼女から分れることが出来なかつた。彼は、自分が死に類しながら、此の死者を蘇らせやうと計畫したのだと、人は判断したでもあらう。奇怪な、悲しむべき、けれども、自然は一なりといふことを（心で）知つてゐる者には、感激のある光景。人々はその爲に悲しめられた。吾々は、エーテルの力を借りて縮めようと試みた、此

のロメオから此のジュリエットを引離さうと努めた。だが剛情な此の雄はあらゆる毒藥を嘲笑して了つた。彼は痛ましく這廻つた。吾々は彼を大きな箱の中へ閉籠めた。其處で彼のその刑罰を終るのに十五日もかゝつた。諸君よ、諸君は吾々の罪を指摘することが出来るでもあらう。

此の抵抗的な消し難き焰を持つた強存在は、吾々を深い夢想に引入れた。此の殺人の中への第一歩に於て、自然は吾々に、彼女が生命に與へてゐる不思議な制しがたき忍耐をいとも巧妙に示さんと欲してゐたのだ。（愛は死の如く強し）とは誰が言つたか？ それは聖書だ。左様、そしてそれは又永遠の聖書である。そこで愛が生命を聖める以上に、生命を驚異すべきものとし、尊崇すべきものとし、神聖なものとするものに何があらう？ 凡ての存在が神の一部をなしてゐる聖なる時に、然らば此の生命を切斷するとは如何に悲しきことであらう！

吾々は申譯に、此の昆蟲が闇の中に六年を生活して、日の下に羽を持つて生活するのは、

繁殖の時を得るに足る多くも二ヶ月に過ぎないものであると獨言を言つた。そこで吾々は彼の壽命を多く奪つたのではなかつた。六七年の内の一ヶ月だ！ 左様、けれども此月、これが、彼の全生命が最も緊張した時期であつた。彼はそれまで生長して來た、けれども此の時眞に彼は生活してゐたのだ、力は満ちてゐたのだ。強く幸福であつたのだ。長い間の蟲、それが此の時に至つて、殆んど鳥になつてゐた、花の大地と暖い光線との子となつてゐた。吾々は、正に幸福の瞬間に好んで生命の絲を切るバルク(Pargue, ギリシャ神話、地獄の三女神、一は生命の絲を紡ぎ、二は之を巻き、三は之を斷つ)の如く振舞つたのであつた。

第三章 微細な地球建造者

此世界の下に、上に、中に、八方に、吾々の氣の附かない一世界がある。

時々、辛うじて吾々は或る幽かな咳き、騒音を耳にする、それに就いて吾々は言つて來た、(大したものではない、何でもないので)だが此は何でもないが、無限である。

無限な、眼に見えぬ生命、沈黙勝な生命、夜の、地底の、暗黒海の世界、吾々が呼吸する空氣中の、又は吾々の血液の中に混入して、人知れず吾々の體内を循環する微細物。

巨大な力の世界、吾々はそれを細分しては輕蔑してゐるが、時々恐怖させられる、それが意外な大示顯を以て人の眼に觸れる時に。

譬へば航海業者である、彼は夜海洋が煌々と輝くのを、火の環をなして踊るのを見て、始めは此光景に浮き立つ。それは十里に及んでゐる、その火は限りなく延びて行く、それは浪の動きに連れて動く、ほどけたり、結ばれたりする。それは何處までも、三十里も四

十里も延びて行く奇怪な蛇だ。これが皆、眼にも見えない極微動物の踊りなのだ。何の位の数であらう？ 此疑問に、想像力は恐怖する。其處には、他と比較にならない處の、優等生物の限られた自然性とは比較にならない處の、無限の力の、驚く可き富強の自然性が感じられる。

此小動物を擧げないでは、昆蟲類を、軟體動物類を語ることは出来ない、これは恰も彼等の下地である、その非常に簡単な構造の内には、既に彼等を代表し、彼等の準備をし、彼等を豫告してゐるものがある。強度の顯微鏡に依つて此昆蟲の縮圖を見れば、それは昆蟲の構造に類似し、その運動を模倣してゐる。球蟲類が明瞭に認められる時には、吾々はその口邊の觸覺に微細な腔腸動物を見ることと信ずる。殆んど眼に見えない動物としては、根足類は立派な堅固な殻を持たぬとは云へぬ、それは軟體動物、牡蠣や蝸牛の大きな殻と同様に立派に彼等を防禦するものである。

此微細物中の微細物とは何か？ これこそ吾々の棲息する此地球の建設者に外ならな

い。彼等の身體を以て、その残骸を以て、彼等は吾々の足下なる大地を備へる。たとへ彼等の極く微細な殻が猶そのまゝ認められようともし或は既に崩壊して石灰の状態になりつてゐようと、それで彼等が大地の巨大な部分を形成してゐないとは云へない。此石灰の唯一の洲はバリからトウルまで五十里の長きに達する。又他の巨大な廣さをなしたものはシヤンバアニ全土を蔽ふ。純粹なきめの細かい石灰は到る處に發見されるが、それは粉末状となつた彼等の殻に外ならない。

かくて最も大なるものを造つてゐるものは最も小なるものである。眼にも附かない根足類はピラミッド處か、アペニン山脈(Apenins、伊太利全土に擴る大山脈)中の最高峰にも劣らぬ記念碑を建設してゐる。だがこれもまだ餘りに小さい。チリーの巨體、世界をその足許に瞰下してゐる巨大なアンデス山脈は、此捕へ所のない、言はず眼にも見えない存在物の墓碑である。滅亡せる彼等の骸残を埋葬したものである。

現實の上層世界の下、生命の深淵の中に、或は時の暗黒の中に隠されたる裏面の世界。

若し神が彼等に言葉を與へてゐたならば、吾々の爲に爲して來た又は爲してゐる凡てのことを思出させる力を許してゐたならば、如何なることを彼等は語るだらう！ 原始植物や粗造的小動物達は、自分達の遺骸を以て人間に此地球の豊饒な地殻を、此の美しい人生の舞臺を造つて呉れてゐる。彼等は、正に慙う揚言する権利を持つてゐる！ (未だ諸君が眠つてゐる内に、と齒朶類は言う、我々丈が、その時未だ呼吸することも出来ない大氣を變換し、淨化しながら、何萬年を費して、麥と蕃薇とが繁殖することの出来る様な此大地を造つた。我々は諸君の爐邊を煖める巨大な炭層を造つた、又世界の大鐵工場を支へてゐる長さ百里に亘る炭層(ロンドンからニューカッスルまで)等の地中の寶を造つた。)

(我々は、と人間が侮蔑したり又は知りもしないでゐる微細物、名もなき暗黒の小動物達は言つてゐる、我々は諸君の養母である、我々は諸君の周圍や住居の準備者である。犀類や象鼻類の大化石が土壤となつたのではない。それは我々の骨若しくはむしろ我々自身である。諸君の都市や、諸君の王城や、諸君の殿堂は我々の遺骸で建設されてゐる。佛蘭

西はあの光輝ある飲料の歡びを分つてゐるが、あの立派な葡萄の花の活氣そのものは、一帯何處から來てゐるか！ あの乾き切つた丘陵ではないか、葡萄はその白い埃で成長する、この埃こそ我々なのだ、それが我々の先人達の秘めて置いた熱を再び出してゐるのである。)

此揚言は恐らく長いことであらう、凡てを代辯することはとても出来ない。是等無數の死者はその石灰分を以て吾々の營養分となるものを養つて、吾々の體内を通過してゐる。他にもまだまだあるだらう。石礫、硬い硅石さへ、生命を持ち、又生命を養つたのである。

ベルリン大學のエレーンベルグ教授 (Ehrenberg, 1795—5875 獨逸の博物學者) が、變にざらざらした角張つた脆い硅土質の石、金屬を磨く磨砂石は顯微鏡蟲の遺骸に外ならない、恐ろしく微細な滴蟲屬の殻から成つたものに外ならない、と發表した時、歐羅巴の驚きは大きかつた。此問題の微細蟲は、その石の一粒を計れば一億八千七百萬なければならぬといふ程のものである。

眼にもうつらぬ此地球の建設者達の事業、之を學者達は彼等の死滅せるものの中に見て感嘆してゐるが、旅行家達は其の生きた種屬の中に之を發見してゐる。それらは、現代に於てさへも猶永遠の活動をしてゐる、彼等自身は姿もみせず、一見した處全く何の力もない。だが、その結果から判斷すれば際限のない効果をあげつ、多數の物理試験所を啞然たらしめてゐる。死者が生者の爲になした仕事は、生者そのものが物語つてゐる。多くの小動物はその現在の創作品に依つて影をかくした彼等の先驅者達の代辯者であり、歴史家である。

彼等も亦先人達と同じ様に、自己の構造又は残骸を以て、海の中へ島嶼を、巨大な暗礁を浮ばせる、これが次第に連絡して遂には新しい陸地ともなるであらう。遠く例を求むるまでもなく、シシリー島に於て地熱に裂かれた海岸を蔽ふてゐる石蠶カサネの内うちで、ヱルメ(Vermes)といふ一微細動物は人類の曾つて企圖さへしなかつた様な事業をしてゐる。彼は自己の柔かい體を、絶えず分泌して行く石の被で保護しながら前進する。彼は次から次へ彼を

隠かくつて行く此管を繼續發展せしめながら、石蠶珊瑚類がその合間々々に残して置いた空隙を完全に充満する、暗礁の間隙を埋立てる、それからそれへと橋を架してそれらを連絡する。遂に是迄不可能であつた瀬戸の内に通路を造りあける。何日かは此建設家が周圍百八十里の此島の周圍に舗道建設の大業を成就するであらう。

だが、此事業が石灰質腔腸動物に依つて、あらゆる種類の珊瑚蟲類や石蠶類に依つて、大仕掛に繼續せられてゐるのは廣大な南洋の内に於て殊に著しい。動物の生育は泥炭苔の仕事に比較することが出来るであらう、それは下部を變質し崩壊せしめながら絶えず上部へと伸びて行く。凡てが此植物の如く、是等の珊瑚蟲もその建物そのもの、即ちぶよくしたまだ柔かい珊瑚も屢々魚類や蟲類の食物となる。彼等は吾々の牧畜がやる様にそれらを食べ、そしてその慈養分を吸つて、如何なるものも生命を支持することの出来ない石灰質として了ふ。近頃、英國の水夫は海底に此石灰製造場を發見したが、それは此食物を絶えず生物状態から無生物状態に變移せしめてゐたといふ。

かゝる破壊の原因も、彼等の大事業の續行には何の障碍にもならない。珊瑚蟲は絶えず島嶼を築いて行く、大海の怒濤に負けぬ様に完全に根を張つた堅固な堰を平然として築いて行く。彼等はその種類に依つて仕事を分擔してゐる。或る頼情なものは、沈靜な水中、即ち光の遠い非常な深奥の中で働く、他のものは、太陽の直下、破壊の眞唯中で働き、よくこれを制してゐる。

彼等は柔軟な、膠質の、弾力性のものを、その石の様な粗鬆な支柱に附着せしめては、巖をも飛ばし、花崗岩をも磨滅する様なあの狂亂怒濤を懐柔する。

氣候を支配する穩かな貿易風の下に、海は若し是等の生ける堰防がないならば、絶えず同じ様に規律立つた波を送るであらう、所が是等の堰防が波を激しく突きもどし、その波浪を粉碎して、波に永久の苦痛を與へてゐる。

水は彼等を撃つ、それが彼等に必要である。濤は彼等に仇をしてはゐない、波は彼等の爲に働いてゐるのである。波の暴力は彼等を磨滅しはしない。却て岩石を磨滅し、そこか

ら、彼等が生活し打建て、ゐる石灰を粉々に分離する。彼等に吸収され、動物化されてゐる此石灰質は無数の輝かしい花となる、活動的な生物となる、これこそ我が珊瑚蟲そのものである、水底を飾り立て、ゐる同類の世界であるのだ。

島の海岸上には、恙うして彼等の遺骸から植物に適する陸地が造られる、それが鹽縁に蔽はれる、鹽水に堪へ得る唯一の樹木、椰子に飾られる。これが植物地層である、これが不斷に増大する生命といふものだ。淡水は此植物に促がされて此處へ湧出づることでもあらう。

生れ出づる一世界の典型、椰子樹はその蟲を養ふだらう、鳥類は此處に宿り、人類はその果實を摘取るだらう。海からは破船、流木が送られて、此處にあらゆる種類の住民を次第に連れて來ることであらう。

かゝる島嶼の増大されしものは周回二十五里に及んでゐる、が猶それ以上大なるもの、豊饒なるもの、居住者を有するもの、人口稠密なるもの、マルディヴ群島 (The Maldives

印度洋上の諸島)の多くのもの、如きがある。

此建設家達の望みは、かゝる廣大なと思はれる創造に依つて満足することが出来た。けれども猶その堅固さを確立する爲に、彼はその擴がりを増大してゐる。彼等がその建築物を海底に支持してゐる控柱は擴がったり高まつたりして、恐る可き距離にある島嶼と島嶼を連結する所の暗礁となるのだ。熱帯地方に於て、燃ゆる様な一連の生命を捧じた此撓まざる建設者は、大膽にも海洋を切斷し、その流れを破つてゐる。彼等は既に航海業者を拒止してゐる。

ヌウエル・カレドニイ(Nouvelle Calédonie、大洋洲の一島嶼、佛領)は現在百四十五里の暗礁に包圍されてゐる。マルティヅ群島の連礁は四百八十英里。濠洲の東方に於ける珊瑚礁は三百六十里、内百二十七里は連續。最後に太平洋に於て危險島嶼と呼ばれてゐるものは約長さ四百里、巾百五十里に達してゐる。

若し彼等が此連結事業を繼續するならば、彼等はカービー氏(William Kirby, 1759—

1850、英國の有名な昆蟲學者)の豫言を實現するに至るであらう、氏は既にそこに一新天地、輝かしい、豊饒な、そして少しづつ、幾世紀かをかけて亞米利加を亞細亞に到達せしめる通路、巨大な橋となる天地を見てゐたのであつた。

第四章 愛 と 死

此原始的生命、その生殖がまだ發芽に外ならない様な、殆んど植物的な此生命の上に、明確に、個性的な、完全な一動物が創出されようとしてゐる、此動物では、凝集した神經の傳導綱が彼の行動や決意を促すことであらう。

その外見を昆蟲に比較することの出来る様な或る原始動物は、先第一に劣等民族の運動不可能な、外存に期待する生存から獨立する。彼は、各自が全體の生命の爲に自己を滅却してゐる共通宿命説から獨立して生れ出る。彼は自分に生きる、彼は動く、往き來する、前進し退却する、意志に従つて傾く、自己の必要、貪慾、氣まぐれに従つて行動を變化する。彼は自足だ、彼は豫見し、準備し、防禦し、意外の遇然に臨む。

此處に既に個性の最初の閃きがないだらうか？

此個人は自由である。彼は先第一に個性生活を支持し、強固にする條件を具備してゐる。

る。彼は饑餓を得て、即ち吸収しながら出る。そして、此の吸収を行ふことこそ、自然が彼に待つてゐる處の仕事である。彼は、世界を純化し、その障碍を除く爲に、生命に障碍をなす病的な生存者を葬る爲に、生命をあまりに烈しい繁殖の過乗から、飽滿の危険から救ふ爲にやつて來る。

吾々は今それを示さうと思ふのだが、如何なる存在も此程の力を持つものは地球上になからう。如何なるものも之程の精力を以て一般生存状態の上に影響するものはなからう。だが、此蟲の體軀、大いさ、重さに反比例した此特別な力は、或る嚴格な法則、個性の急速な、絶對的な、完全な(代々毎に)更新に従つてゐる。

愛は死を伴ふ。分娩、出産、それは死ぬことである。生る、者は殺すものである。

萬物に共通な此箴言、けれどもこれは如何なるものにあつても昆蟲程文字通りに實行されてはゐない。

先づ父に取つては、愛することは死ぬことだ。彼は自己の最も優れたものを與へねばな

らない、抜き取らせなければならぬ。彼は、自己復活の胎種を與へて、そのもの、中に甦らんとする爲めには、自己を滅却しなければならぬ。

母そのものにとつても、多種の昆虫に於て、その處罰は同じことである。彼女が愛し、出産する、するとまもなく彼女は死ぬのだ。愛は彼女にはその價値をみせない、その報酬を示さない。彼女はその子供を見ない。彼女は、死に對する慰めを持たない、自己そのものが他の中に生きながらへるのを見ない。

此母と高等動物の母との間の嚴肅な大きな相違よ！ 哺乳動物の雌は一般に我が愛の寶を自分の懷に抱え、我が身の熱を以て暖め、我が愛をふくませる。昆虫の母はどんなに羨むことだらう、若し彼女が此母性の尊い幸福を知つたならば！ 彼女は我が母性を續けんとすれば、冷たい大自然の中に求めなければならぬ、自分以外の物に、草木、果實、又は大地そのものに頼まねばならぬ。それは假借のないことだ、が慘酷ではない。これを眞面目に觀察しようではないか。若し死が母と子を分離するものならば、それはその親子

が、生活状態の營養方法上の互の相違から全く引離されてゐて、共に生活することが出来ないからであらう。彼は生れるやみすばらしい青蟲、幼蟲、暗い穴の人、夜に隠れた勞働者で、猶長い間、粗末な餌で、時には死骸そのもので口を過ぎて行かねばならぬ。彼女は、翅を持ち、姿容を變じてゐる、輕快な、高い生活に昇つてゐる、そして、花の蜜ばかりで生きてゐる、何うして、彼女が此の暗黒界に、その子が育つて行く様な卑賤の中に一致することが出来よう？ 此大地の陰鬱な子供にとつて好都合な、活氣を與へる様なものは、既に温い風と暖い光の中を飛翔した空中の母にとつては致命的なものなのでもあらう。

子供が完全に育つ爲に彼女は三重又は四重の搖籃に一時的の蔽ひを拵えてやらねばならぬ、彼女はそこへ不自由のない様に、保護者ではないが、眼が覺めた時に先づ見附けねばならない最初の食物、その幼弱に適した輕い食物を備へ附けて子供を託するのである。それが出来ると、彼女は戸口を閉ぢ、之を密封する、そして自分自身さへ除外して、こゝへ

歸つて來ることを禁じて了ふ。彼女は自己の權利を、自分に取つて代る宇宙の母たる大自然に譲らねばならない。

此子供は何の苦もなく生きる、猶自分からも絹糸の蔽を引出しては暖かい獄屋の壁を張る。遂には充分育つて、暖氣が外から彼を呼ぶ時に彼は出發する、之は解る、之はよく解る。人は感心するが驚きはしない。限りなき驚異を感じしめるのは次のことである、此の母（蝶、蠶蟲等）は、彼女が通つて來た様々な變遷、多くの脱毛期、はかない冬眠、變態等の後に、我子の爲に、再度舊知の場所たる元の木を、曾ては、青蟲に過ぎなかつた彼女が育つた所、自身の出發點たりし所を見附けるといふことである。人智を驚かす不可思議だ！……吾々が最も輕躁なりと信じてゐる彼等、蠅、小さな頭を持つた蝶、彼等は、近き死が愛の光りに照し出される時に、身を休めて、反省する、彼等は冥想し、回想する風だ。次ぎに誤ることなく、彼等は行く。其處に、あの木がある、彼等の最初の國、彼等の生れ故郷、彼等の搖籃たりし木が。彼はそれを元に返さうとする、そして彼等の子を保護するであらう。

彼等は急に慎重に、思慮深く、巧妙に振舞ふ。彼等はその子の隱家を造つてやる爲に、不思議な技術を実行する、信じがたい技倆を振ふ。何んな風に？ 何を？ 時に彼等の武器は、他の用に轉ぜられて、愛の手段となる。時にそれまで隠されてゐた新しい装置が現はれて來る、かように非常な複雑さを以てする、だが此仕事丈の爲に、此特別な日丈の爲にする！

昆蟲がかゝる母性の任務の爲に具備してゐる装置や、無限に變化する仕組に就いては面白い著書が書かれてゐる。是等の器具は屢々その精密さ、細かさ、巧みさを以て人の心を捕へるものである。それにはレオミュウルに依つて立派に記述された薔薇の羽蟲の例を引證すれば充分だ、その羽蟲の鋸は二枚の刃になつて互に反對の方向に動き、その鋸の齒の各々には又更に齒が附いてゐる。

愛の持つ古今未曾有の力！ たとへ此聖き力が彼等に此細かな機械を與へたとしても、

たとへ、それが母性としての燃え上がる様な欲求から来る努力の結果として、彼等が之を得るに至つたとしても、吾々にはこれらが彼等の中に浮き出る様に見える、全く意外な様子でその瞬間に働く様に見える。

その作業は、少くも、多數共和制の保護と援助との下に働く團體的な昆蟲類に取つては、簡單である。然しながら、孤獨な母達に取つては非常な苦難である、彼女は何等の補助者、夫もなく、友もなく、巨大な事業、時には巨人の製作物である様な建設をも企劃する。この様な建設が、如何なる忍耐力と意志の力とを必要とするかは、唯々驚異するの外はない。

母は過度な此仕事で数日の間に老けて了ふ。彼女は身をけづる、そしてその實を得ない。此勞役の搖籃は屢々他の爲に用ひられて了ふ。見知らぬ横領者が、殆んどこれを僭奪しないではゐない。此高價な製作物を利用して、其處を自分の子の宿として了ふ。それは唯に此嫡子の食糧を蕩盡して了ふばかりでなく、此相續者そのものをさへ食糧として了

ふ。

か、る手頼りなき結果を齎す此大事業に、誰か至高の同情を持たないであらうか？

七月の燃ゆる日に、此町（フォンテエヌプロオ）を圍む狭い一群の森が熱氣を集中してゐる様な物うい季節にも拘らず、吾々は絶えず住來してゐる孤獨な蜂の小止なき、忍耐的な勞働に驚異の眼を見張る。倦むことなき旅行を續けて彼女は山茶花と爽竹桃との鉢の近くにやつて来る。私は亦その大きなすらりとした姿の、黒味のまじつた褐色のものが、同じ間隔を置いて、殆んど五分間置き位に片々たる木の葉を折疊んで持つて来るのを見た、彼女はそれを或る深い穴から、自分の巢の作つてあるその鉢の土の中へ入れるのであつた。

三日間彼女は同じ熱情を以て働いた。彼女が最少限度の食物を取つたらしい形跡さへ、少しも認められなかつた。凡てをその仕事に打込んで、彼女は既に自分の生命に對しての心配を放棄してゐる様にも思はれた。

吾々が彼女に非常に接近することが出来た程、彼女は無我夢中になり、その行動は急が

しけであつた。彼女は何物にも恐れなかつた。吾々は氣樂に、その鉢の近くに立寄つて、其處へ腰を据えることが出来た。そして、彼女がその仕事に盡したと同じ忍耐を以て之を観察することが出来た。

四日目の朝吾々はその孔の塞がつてゐるのを見た。そして彼女が再び歸つて来るのを見なかつた。彼女は終つたのだ。疲れ果て、けれども終了の幸福に酔ふて、彼女は勿論我が運命を待つべく何處かの暗い陰の奥に憩つてゐたのだ。

吾々は、その仕事を驗べる爲に、鉢の内側に附いてゐる土を叮嚀に剥がしにかゝつた。

底には、殆んど指抜の様な形の二個の搖籃、即ち二人の子供がゐた。彼女等は矢張懸うした注意を怠らない。小兒の數丈の小室。

その各々は木の葉の二十六片から出来てゐた。レオミュウルは之に似た巢の中で十六片しか數へてゐない。入口を塞いでゐるその六片は完全な圓をなしてゐた、若し人がかゝる完全な此仕事に何等の器械も使用されてゐないことを考へるならば驚く可きではないか。

然もそれらは打貫鑿に打貫かれたかと思はれる様な同じ精密さを持つてゐるのであつた。

他の部分の木は葉は楕圓形に切られ、巢のぐるりに従つて、一個一個非常に巧みに重ねられてゐた。正に、疲れることを知らぬ母が寒氣と雨とに對して造つた屋根である。その奥の方に少量の蜜、母の残した最後の遺産が、彼女が永遠に捨てた人々の爲に置かれてあつた。

吾々は幸にも此子供達がその冬の隠家を造るのを見た。彼等にとつても土の底よりも吾々の屋根の下の方が過しい、であらう。母の計畫は完全に成就されることであらう。巴里に連れられて養はれ、面影を見られてゐるこれらファンテエヌプロオの精女達は、何日か春の朝に吾々の窓に巢立をするだらう、そして此若き蜂達はヒースの蜜か、少くもルクサンブル宮殿の蜜かを蒐集することが出来るであらう。

第五章 親なし娘寒がり娘

吾々は、母がその將來を慮り、之を養ひ、之に衣服を與へてゐる此の特權被造物の物語を、最も語り易く、最もお上品に述べて來た。けれども多くは、その最大多數は貧困と缺乏とに生れて來る。彼等は廣い世界の中へ裸で落ちて來る。

貧は大膽だ、缺乏は工夫だ、饑餓と慾望とに關する内部的の烈しい苦勞が彼等を鼓舞し、彼等の援助となる力強い器官を發達せしめる。

どんな器官か？ 忍耐の殉教者、スワムメルダム翁(Jean Swammerdam, 1637—1680和蘭の博物學者)が先づそれを看破した。孵化した卵の上に、此の不思議不可測な神秘の上に、鋭い眼を向けて、彼は生命の最初の輪廓を擱んだ、そしてその中に昆蟲の神秘なる深奥な決定的特徴を擱んだ。

彼はその微細な生物が柔軟な體で、嘴又は腮を前に突出すのを見た、口的前提と定めら

れた器官、明らかに未だ弱い此の生物を養ひ護る運命を以つた器官。

此の能動的な装置の後方、體軀の兩脇に、彼は一つの受動的な装置、一連の口又は孔瓣を見た、それは空氣を吸入る爲に開かれてゐた(氣孔である)。

巧妙な用心、眞裸で生れ、生活の中へ唯一人投げ込まれ、何等の援護なしに最も苦難な變態に耐へなければならぬ此の孤兒は、始めて生れた日からむさぼる様に食へる衣食はなければ、かゝる苦役に應ぜられない。彼は到る時、到る處に、殆んど呼吸し得られない空氣の中、不衛生な危険な場所に於てさへ、食はなければならぬ。此處に、自然が彼に與ふるに、言はば、清淨な空氣の中より外には生きられないであらう高等動物の呼吸よりも、一層緩慢な、一層狐疑的な呼吸又は換氣を以てしたその理由がある。高等動物に於ては、人類と同じく、血液は絶えず空氣に接して活氣を新にせんとしてゐる。然るに昆蟲に於ては、反對に、側面の氣孔を支配してゐる擁護装置は、常に侵人的空氣を調節する、必要に應じて之を漉したり、排除したりすることの出來る仕掛になつてゐる。此處に同じ目

的に對して、最も複雑したむづかしい機械的、科學的技術の工夫に無限の變化が見られる。驚くべきではないか。受入れるともなく受入れ、呼吸するともなく呼吸し、然も受動的である可き機能を能動的に支配し、信賴して信賴せず、捨て、をいて取る——これが此の生命の至難な問題であるが、それに對して青蟲は、數々の解決を發見してゐるのである。青蟲に充分に空氣をやつて呼吸させるだなど！ 萬能を振り廻す傲慢な人間達よ、これ、これこそは最も骨の折れる仕事で、大自然が根を枯らしてゐるものだ。

彼の換氣は母の懷にある胎兒のそれに似てゐる。けれども昆蟲の境遇は如何にみすばらしいことであらう！ 胎兒はやさしい母の圍ひに依つて世間との間に立派な仲介物を置いてゐる。昆蟲の胎兒は母がない。人の兒の様に乳の海を泳ぎはしない。彼は宇宙的生命の粗末な子宮にゐる。彼は大なる危険の中を、嶮しい大地の上を、あちこちぶつかりながら歩くのである。

近代人は昆蟲は幼蟲なりてふことを認めてゐる。けれどもそれは唯それを死刑に處す可

きものとのみ思つてゐる。何といふ矛盾であらうぞ！ 鬭争の眞唯中に投げ込まれたる幼蟲、それはあらゆるもの、鳥類や、昆蟲そのものさへの餌となるであらう！ 武装せる胎兒、それは眞實だ。此の柔かい青蟲がその脆弱な軀を、何等防禦の備へもなく、あらゆる危険に曝しながら、その威赫的な口を振りかざすのを見る程奇妙なことではない。

逃走は彼等にとつて殆んど何等の保護にもならない。彼等を最もよく擁護するものは顔だ。そこで彼等は光を避ける。彼等は出來得る限り大地の下、樹木の中、少くとも茂り葉の陰に棲息する。若し幼蟲、青蟲、毛蟲と呼ばれてゐるものに取つてそれが眞實でありとすれば、人は正に彼をこそ昆蟲と呼び得る。何となれば、彼の初期時代（幼蟲時代）は長く繼續し、蛹の時代及び最後の第三期時代は、一般に非常に短かいからである。多くの種類（黄金蟲、甲蟲等）に於ては地中の暗黒生活が三年六年に及び、太陽の下に三ヶ月である。

蜜蟻や蜂の如く太陽の下に長く生きる昆蟲さへも、好んで暗闇の中に働いてゐる。彼等

はその蜜房や蟻巣から見ても暗闇を大切にする。

そこで彼を一般に憊う言ふことが出来る、即ち、昆虫とは夜の子なり。

大部分は太陽を避ける。だが空気を避けるのは何うか！ 暖國の内に於てさへ、變化極りなき大氣は、その皮膚の未だ固つてゐない生々しい裸體にとつては非常な若痛である。吾國の氣候でも、彼に取つては一呼の空氣も必ずや小さな鋭い箭、細い無數の針の感じを與へずにはゐまい。あゝ！ 若し人間の胎兒が一二週間母の胎内から出たとしたならば何うか？ そして胎内に於て安らかに強く成育する代りに、大空の下に裸體を忍ばねばならぬとすれば何うか！ 彼の柔しい隱家を捨て、寒氣の中へ落ちるとすれば、その感じや如何ばかりであらう？ かゝることが昆虫のそれである。柔弱にして何物に對しても何等の防禦を持たず、眼も殆んど定まらない時、彼は、冷氣を、寒風を、様々な粗々しい物體の衝突を忍ぶのである。

或種の毛蟲は幾分立派な保證を得てゐる。或者は果實の中に宿つてゐる。又或者（蜜蜂、蟻等）は保護的社會を持つてゐる。だが大多數に於ては、昆虫は唯一人裸體で生ゐるのである。

常に美服を纏ひ立派に暖を得てゐる吾々智識階級の人々には必ず憊ふ言ふ、寒氣は一の賜で、食慾を喚起し、身體を強健ならしめると。だが貧しかりし人々こそ、彼等の言へる意味を最もよく理解するであらう。私をして言はしむれば、私の少年時の記憶は私に憊う告げてゐる、即ち寒氣はそれ自體が一つの苦痛である、そこには何等馴れるといふことはない、その長びくことは何等その苦痛を緩めるものではないと。酷烈困窮の冬に於て、寒氣の緩むことに、もの凄く慘酷と恐怖との状態から放たれ、内的調和の幸ある回復に戻る時、余は如何に精神的歎息を感じたことであらう！

とは言へ、私は、寒氣が優れた強壯劑であつて、精神を力強く目覺めしめ、之を刺戟するものであることを、否むものではない。寒氣は饑餓と同じく、或は多分それ以上に、技術の大練磨者である。饑餓は力を奪ひ、寒氣は力を與へるものである。

それは、此の生る、や先づ何よりも絲巢を以て自らを蔽はんとする小動物に取つて力強い千萬の鼓吹者である。食物に不足してはゐない。自然は彼女等に到る處豊富な食卓を準備してゐた。凡ての植物界及び大部分の動物が、此を待つてゐるのだ。彼等は恰も母の胎盤にあつて安樂にその無爲を養はれてゐる胎兒の如く、安氣に怠けながら生きるのである。けれども寒氣は彼等を焼き、冷たい濕氣は彼女等を凍えしめ、その臟腑を痲痺せしめ、最後に光線が彼等を惱ます。彼等は自己の隱家を造らない限り休息することは出来ないのである。ほんの生れたばかり、やつと生命があるといふ程度にありながらも此最低階級の青蟲は既に技術家である、そして機を織り、絲を紡ぎ、仕立をして纏て一著の衣服を造る。そしてその餘りに感じ易い皮膚の上に第二の皮膚の如く、その痛ましい裸體を覆ふ。幸に用意せられた地所へ始めて彼が降立つ時、彼は吾々の衣服に於ける如く、先づその身丈に合せた可愛らしい外套を造るべく、暖かい毛織物、立派な毛皮にことをかゝさない。然も彼はそれを幾分弛めに造つて置く、恰も約しい母が成長する幼兒の爲に弛めて置

く様に、子供に取つては弛るすぎるその衣服は、今日はきつちり合ふが明日は窮屈になるであらうから。

冷たい青い木の葉、その艶々した光彩に接して生れて來たものは又一層の工業家である。彼等は驚異すべき技術を行ふ。或者は眼にも見えない細い綱を以て大きな物體を引あける、その仕掛はコンコルド廣場の方尖塔オベリスクを引あけて据付けるに應用した遣方に類似してゐる。又或者はそれ〴〵物に應じて不規律な形をなしてゐるものを切りきざんで、それを巧に綴り合せる。

かくして、あらゆる種類の工業組合が此の小世界の中に見られてゐる。仕立工、機織工、フェルト工、紡績工、抗道工等。そして、その各組合の中に吾々は又種類を見る。それ等は更に自己に適當した様々な手段に依つて各自専門を異にしてゐる。

仕立屋は雛形を切る。或葉から適宜な一片を切取る。次ぎにそれを他の葉の上に持つて行き、之に仕附をかけて、第一の雛形通り第二のものを截つ、そしてそれらを一緒に縫ひ

合せる。それが終ると、その鱗状をなした頭を以て、丁度仕立師がアイロンを以て縫目を平にする様に、葉脈を平らにする。次ぎに自分で着なければならぬ此の衣服に、最も上等な絹の裏を附けるのである。

或者は截箴細工をなし、或者は寄木細工を、又或者は箴木細工をする。着物が縫ひあがると彼等は自分の周圍にある物を巧に糊附けをして、之を掩ふて了ふ。例へば水邊にゐるものは、苔とか、浮草とか、胎貝とか、又は小さな蝸牛とかいふもので、自分の着物を粉飾するのである。

抗道工夫は二枚の葉の中に長い室を造り、出入口からなる此の隧道の中によろしく身を落着ける。

難行苦行だ、けれども種類の見えれば嘆稱すべき公平さが存在してゐる。幼弱にして働くものが成人すると殆んど活動しないものと、その反対なものと。蜜蜂は幼蟲の状態に於ては両親から榮耀榮華に育てられ、常に車に乗せられ、搖籃に揺られてゐるが、成人の曉

は極端な勤勞の一生を送る。

反對に他方には、青蟲時代には絲を紡ぎ、機を織り、艱難辛苦しながら、その後では薇蓋の花に喲々密語するより外に何等の仕事をも持たぬ昆蟲もある。それは胡蝶君である。

大多數に取つては、苦役は少年時にある、幼蟲時代、青蟲状態にある。二重の烈しい苦役だ。一方から見れば、無限な内部的慾求に迫られた、食料に對する、燃える様な、要求の多い、不斷の追求である。自己を充實し、更新し、獲得器官を造り直し、更に新しい器官を造り出さうとする慾求である。

母のない是等の哀れな孤兒の生活は、この勞役と病的な發育といふ二つの嚴烈なもの、間に造られる。

脱皮と雖も安易のものではない。

その肉體に密着した衣服を換ふ可き痛ましい時期が此の小動物に来る時、彼は不快に悩まされて、その寄葉を棄て、憔悴して淋しい場所に這ひ寄る。慙ふした弱々しい力ない、

委縮した、あまりに變り果てた彼を見るならば、諸君は彼が將に死なんとしてゐるのだと言ふでもあらう。そして實際此の困難な變動期に多くが倒れるのだ。

消極的に、枝に垂れ下がつたま、彼は自然がその作業をなすのを待つ、その表皮がその下にある第二の皮膚から離れるのを待つ、その第二の皮膚にのみ生命の力を頼んでゐるのである。

最近非常に艶々として來た彼の着物が、恰も最早無用のもの、様に、萎縮涸乾するのを見るのは此時である。それはやがて風に吹き飛ばされて行くもの、様である。

だが之を破る爲には、病人はその衰弱にも拘はらず、四方八方に動かなければならぬ、身を捻らし、膨張し、緊縮し、出來得る限りの力を出して、一生一代のあらゆる行動をなさなければならぬ。

遂に彼は打勝つた、古い皮膚が裂けた、そして私は彼が全身汗にまみれてやつと自由になるのを見た。

未だそれへ觸つてはいけない、一寸觸れても彼に傷を負はせて了ふであらう。彼はそれを知つてゐる、身動きもしない。彼は蒼い顔をしてゐる、まるで喪神してゐるかの様だ。その皮膚がもつと丈夫になり、その足が確かになるまでは、彼は歩行を慎まなければならぬ。間もなく、幸にも攝食が彼の元氣を回復した。恐ろしい食欲が彼にやつて來る、それは彼に再び力を得さしめ、再び脱皮の用意をさせるのである。かゝるものが彼の運命だ。遂に最後の變態に到達するまでは、彼は常に連續的分娩の中に自己出産をなす可く運命づけられてゐるのである。

若し彼の努力又は苦痛がその思想を閃めかすとすれば、彼は脱皮期毎に恚う獨言を言はずにはゐるまい、(さあ放棄された! …… 私は終ひになつた。もう安靜になれるだらう。これが私の最後の變化なのだ。) 大自然は是に答へる、(まだ未だ! 何うして! お前はまだ生れてはゐないんだよ…… お前は何かつて? 唯の幼蟲ぢやないか、今剥けようつていふ假面だよ。)

何と！ 此假面は望を起して仕事をし、工夫をめぐらして堅忍持久、時にはその中から頭を出さんとする本能よりも一層進歩してゐるやうではないか！ 此程の勤勉と此程の巧妙とを包む皮膚、それはやがて涸乾して風に吹き飛ばされねばならぬものなのだ！

他事はともあれ、或朝のこと、何とも知れぬ焦慮が、不安が彼を捕へた。不可思議な刺戟が彼を新事業に押しやつた、或は言ふでもあらう、彼の内の他の彼が活動するのだ、或定められた目的に向つて動き出すのだ、そして成化せんとするのだ……何者に？ 彼はそれを知つてゐるか？ それは斷言は出来ない、けれども遂には彼が恰もそれを知れるかの如くに賢しく、行動するのを諸君は見られるのだ。彼を捕へんとし、彼を麻痺せしめんと、力なくも彼を凡ての敵に渡さんとしてゐる睡眠の豫感が、突然彼に新しい活動力を伸展せしめるのである。(動かう立派に！ 動かう活潑に！……噫呼！ 何て私は睡らうとばかりしてゐたのだらう！)

第六章 變 態

木乃伊、蛹

我が世の幼年時代を尊敬しようではないか。元始時代の人々に、彼等が昆蟲の演ずる不思議な劇から得た慰安希望を示さうではないか、そこから古代埃及が汲み取つてゐた不滅の思想を認めようではないか。此劇はカノーブ (Canope, 埃及の町) に於ける如何なる聖史劇よりも、エルウジス (Elousis, 希臘アゼン近傍の町、女神セレースの寺院があり、宗教劇など行はれた) の歡會よりも遙に心を静め、涙を拭ふものである。

喪中の未亡人、絶えず變らざる悲しみを身に味はへる女神イジス (Isis, 埃及の女神) がその夫神オジリス (Osiris) に別れた時、彼女は希望をスカラベ・サクレ (鍔蟲) に繋いだ、そして我が涙を拭ふてゐた。

死とは何か？ 生とは何か？ 睡りとは又目覺めとは何か？……諸君は此小神秘劇を見ざるや？ 人間に運命の戯れを演じて見せる此墓標の無言のコンフィダン（従者）を見ざるや？ 彼の卵の中に眠り、後に又蛹の内に眠る。彼は二度生れ、二度死ぬ、幼蟲、蛹及びスカラベとして。その各々の生涯に於て、彼は幼蟲又は假面、來る可き生涯の前兆である。彼は自己を準備し、自己を産み、自己を解へす。最も失望すべき墳墓から、彼は輝やかしく飛び出る。塵の上に、彼は輝やく。埃及の荒野の上へ、その最も悲惨な時に、彼は輝き出で、凡てを壓倒する。その寶玉の翅の中へは、全能の日輪がその姿を寫すのだ。

彼は何處にゐたのか？ 汚穢な物陰に、夜の中に、死の中に。或る神が彼を呼び出したのだ。其神は此寵愛せられた魂を猶より立派にすることであらう！……温き光り……あらゆる生命の創造者の公平、不偏な愛の上に基かれたる希望である。

其處で此未亡人は死者の近くに未來の輝やかしき保證、妻の叫びを表現する、（聖なる

神よ！あの人の爲に、又妾の爲に、貴方が昆蟲になさせ給ふ處を、なさせ給へ。我等が兄弟たる羽蟲達になさせ給ふと劣らず、夫にもなさせ給へ、我が愛する人になさせ給へ！）

近代科學は此古代詩を打破つてゐるだらうか？ 此神秘を自然へ完全に立返らせてゐるだらうか？

斯學の創始者スワムメルダムは、青蟲が既に蛹を、それどころか蝶さへも包含してゐることを發見した。青蟲はその中に、粗製のな翅を、未來のその生物が持つ可き吸液管を持つてゐるといふことを見出した。

そればかりではない、マルピギイ (Malpighi, 1628—1694 伊太利の解剖學者) に依れば純白な眠りにある蠶の蛹は既に未來の母としての特質を備へてゐる、彼女が蛾として産殖しなければならぬ卵を持つてゐる、といふことだ。

處がまだそればかりではない。レオミュウルは榭の青蟲、やつと數時間を経たばかりの

青蟲の内に、未來の母のその卵を發見した。即ち昆蟲の子供は、青蟲といふそれ自身動、卵に過ぎない状態にある此子供は、既に、その子供を、その卵を持つてゐるのである。これが三個の存在の同一性である。何回となく來る中間死と思はれるものは、唯一の繼續的生命である。

凡てが明快に思はれる、ではないか？ 古代の神祕は崩壊したかしら？ 人は豊富な智識に物事の祕密を見たのではないかしら？

レオミュウルはさうは思はなかつた、吾々にあれ程深奥なものを傳へたレオミュウルその人は。彼は自己の觀察を行ひながら、満足したらしくもない、そして告白してゐる、(彼等にはまだまだ知りたいことが何と多く残されてゐることであらう。)

實際、想像力を混亂恐怖せしめるものがあるではないか、一匹の青蟲が一本の絲の太さから既に脱皮、變態等の諸要素を含んでゐること考へるならば、三段の發達、いや八段の發達をさへ含んでゐることを、猶、その蛹の覆ひを、完全な蛾を、呼吸消化用の脈管や感

覺器官や運動筋肉等無數の器官を一個一個と凡て疊み込んでゐるのを考へるならば！

自然が柔しい手加減を加へつゝ、高等動物の小兒をその幼稚な生活から獨立の生活に移し、幼時の器官をそのまゝ、新しい仕事に適應せしめるものであることは、吾々も知つてゐる。此處では、それがさうではないのだ。それは唯單に状態の變化ではない。單にその到達點が異つてゐるばかりでなく、非常な對照をなして、相反してゐる。従つて、新生命の装置がなければならぬ、初期器官の廢棄といふ斷然たる犠牲がなければならぬ。

他生物に取つては巧みに陰されて行はれる變化が、此處では赤裸々である。白晝公然と身を變化せしめて、細い絹絲に依つて樹枝に吊垂つてゐる多くの青蟲は、その驚く可き離れ業を間近に、眼のあたり見ることを吾々に許してゐる。

何といふ嘆稱すべき、又憫む可き努力であらう！ 此小さな、弱い、柔かな、なよ／＼した蛹が、手もなければ足もないのに、唯その膨らませたり縮めたりする力丈で、自分自身此重苦しい窮窟なからくりを遂に脱出するとは！ 其處へ我が手足を投げ出し、頭か

變

ら身を離し、それ處ではない、自分から自分を引出し、内部器官の多くを投げ出して了ふとは！

長い間の重苦しい假面（とはいふもの、それはほんの今し方まであれ程力強い生命を活かしてゐたもの）から慙うして脱出した此小さな魂は、その假面が下るまゝに、溷死するまゝに放つて置いて、巧みに絹絲の結び目まで登つて行く。そこで彼は蛹の新しい自我に定着しようとするのだ、しかし一方元の自我は風に打たれて、やがて何處ともなく飛んで行かうとしてゐる。

態

凡ては變化してゐなければならぬ。脚は脚ではないであらう。凡ては輕快でなければならぬのだ。草の葉の先にも殆んど休まない様な空の子が、太い短い足、鈎や吸口や様な重い道具を備へた足を持つとしたら、何んなものであらう？

頭は頭ではないであらう、少くも兩頤の巨大な装置は消える、後の、それを動かしてゐた筋肉の装置もさうである。凡てさうしたものは假面と共に投棄てられた！ 偉なるかな

！ 此動物は咀嚼の人から吸収の人になる。しなやかな吸液管が生ずる。

若し青蟲に何か彼獨特なものがあつたとすれば、それは消化器官である。然るに噫呼！ この存在の本質は既にもうないのだ！ 吸収の喉道、健啖な胃、貪婪な腸、凡てさうしたものは除去されるか、又は殆んど無に歸してゐる。一體何うするのであらう？ 或種の蛾に於ては、此新生物は食料を給せられても、唯それを味ふ口より外に持たないとは？ 屢々下口をさへ持たない程、消化作用を超越してゐるとは？ 彼は爾後無用の道具を苦もなく放棄してゐる、自分の胃の腑を吐き出してゐる！

變

偉なるかな、壯なるかな、これ以上偉大な光景があり得ようか！ 生命がかゝる點まで變化し、諸器官を支配し得るとは！ これ程迄に舊自我を超脱して華々しく浮びあがるとは！……奇蹟とも云ふ可き慙うした變形を吾々に示して呉れた彼等に、私は心の底から言ふ、（感謝！）

態

此の動物の内には、何といふ驚くべき信頼の存することであらう！ 凡てを放棄すると

は、何の躊躇する處もなく、その力強い逞しい生存を、ほんの今し方まで自分であつた處の完全な組織を、その自己自身そのものを、放擲するとは！ 私はその幼蟲をその假面なりと言ふ、だが何故か？ その自我性は、少くとも精力的な青蟲に於ても、あの非常に柔軟な蝶に於けると同じ様に力強いもの、様である。さらば、彼が勇敢にも溷死せしめ、何物になる爲にか？ 自滅せしめる處のもの、それは實際に彼女の自我存在である、何等安心にならない、小さな柔かい、白味がかつた一個の塊がそれだ。彼女が巢を造るや直ちにその蛹を開いて見給へ、その經帷子の中に、諸君は一種の乳狀液を見るに過ぎないであらう、そこには何者も現はれてはゐない。唯辛うじてそれかと思はれる程の或輪廓を見るか、又は見る様な氣がするに過ぎない。或時間内には、それは何か分らないが細い針を識別することが出来る。それが未來の蝶の四肢かと諸君は想像することも出来る。恐ろしい間隙だ！（多くの種類のものに）舊狀の何ものももう見えず、新しい何ものもまだ現はれない一瞬間がある。エゾン(Ezon)が若返る爲に、魔術女メデ(Medea、希臘神話)の釜の中

へ細かく截り込まれた時、若し其處を搔廻してみたなら、諸君はエゾンの肢體を發見したでもあらう。だが此處には全然それがない。

然しながら、忠實な此の木乃伊は、墳墓の暗黒、無氣力、束縛を素直に受けつゝ、細い絲に身を卷かれてゐる。彼女は自己の内に或力を、存在理由を、猶ほ生きて行くべき原因を感じてゐる。然らば何の原因ぞ？ 何の理由ぞ？ 前代の仕事に依つて蒐集せられた生命力である。彼が勤勞な青蟲として堆積した處の凡てのもの、それが彼の死の障礙であり、彼の衰弱を不可能ならしめる力であり、彼をして臆て單に生きるばかりではなく、輕快な生涯を送らしめる處のものである。その生活の力こそ、彼が前生涯に於て盡した努力に正比例してゐる。

嘆稱すべき報償！……かくも底深く生命に侵入してみても、私は始めて肉體の終運性フタクワテを見たと思ふ。私は此處に公平を、不滅性を、希望を發見するものである。

さうだ、古代人にも理があつた、そして近代科學にも理がある。それは死である。そし

てそれは死ではない。それは、或は、部分的の死である。そして此の死は決して他の何者でもないであらうか？ それは誕生ではあるまいか？

私は、私の生活した限りに於て、私が毎日死に、毎日生れて来たことを認めてゐる。私は痛ましい脱皮、恐ろしい變態を忍んでゐるのだ。私は一度ならず幼蟲から蛹へと通つて來てゐる、より完全な状態へと。それは或期間を経ると、他の關係から見ても不完全なもので、變態の新しい圓を完成せしむる道へと私を前進させるものである。

凡てそれは自分から自分へではあるが、それは取りも直さず、自分から、曾つて自分であつたものへとである。自分を愛し、自分を欲し、自分を創造したもの、さもなくば私が愛し、私が創造した處のものへである。それらは又私の變態であつたか、さもなくば變態であるであらう。屢々私が自分の内に擱む此發聲又は發動が私をしてかく叫ばしめる。
〔あ、是、これは我が父の身振だ！〕 私はそれを豫見したことがなかつた。若しそれを豫想してゐたならば、それは行はれはしなかつたであらう。反省が凡てを變へたに違ひな

い、がそれに考及ばないので、私はそれをなしたのだ。或優しい感情、神聖なる飛躍に囚はれて、私は活けるが如き我が父を自分の内に感じたのだ。吾々は二人であるのか？ 吾は一人だつたのか？ ……あ、それは私の蛹だつたのだ。現在の自分、此の私も又明日來るべき者、我が子、又は我が思索の子の爲に同じ役をつとめてゐるのだ。私は、我が父や長老達や恩師達から受けた根柢的本質の外に、又私が他の人々にゆづるであらう處の藝術的歴史家としての繼承物の外に、私の内には、猶殆んど發達しなかつた處の胎種があつたことを知つてゐる、感じてゐる。或ほかの人が、多分優れた人であらうが、自分の内にあつたのだ、それは浮び上がらずに了つたのだ。何故に、此私をして偉人たらしめたでもあらう優れた胎種が、何故に、時に私が自分の内に感じてゐた處の力強い翅が、此の生命の内にその活動の中に發達しなかつたのであらうか？

之等の期を逸した胎種は私の内に残つてゐる。恐らく此の生命の爲に、だが或る他の存在の爲に残されてゐるのである、誰がそれを知らう？

或る天才哲學者は言つた、若し人の胎兒、母胎中の囚人が物を考へ得るならば、彼は言つてゐるであらう、(私には様々な器官が備はつてゐるが、此處では何の役に立たない。脚も歩くことをしない、胃も齒も食へることをしない。待ち遠いことだ！ これらの器官は私に慚ふ云ふのだ、自然は貴君を外界で呼んでゐると、時が來れば、私は他の住居を、生活を持つたらう、そして、是等の器官は皆役を得るだらう……彼等は休業してゐる。彼等はまた待つてゐる……私は人間の蛹に過ぎない)

第七章 鳳 凰

光景は完全に一變する。乾き縮こまつてゐる灰色な又は黒味がかつた木乃伊から、一存在が、復活者が、鳳凰が青春の輝きに包まれて躍り出でるのを諸君は見るであらう。

我々ならば青春の日から出發する、それは先づ蝶から始めて、後に腰を曲げ、衰弱するに至る様なものである。然るにかゝる我々とは反對に、彼は先づ陰慘な時代、長々しい暗黒生活から始めて、遂に青春時代に浮び出で、そこで華やかな死を遂げる。

此の出發に助力せよ。春の温かい氣息は植物を目覺めしめてゐる、彼の宴席は備へられてゐる。多くの花は彼を待つて、その蜜を分泌してゐる。彼は遅い……それは彼を保護してゐたあの胃がたい覆ひが、今日一寸の間彼の障碍となつてゐるからである。あの様な大變化に疲れて、弱つてゐる彼は、此、彼を窒息せしめはせぬかと危まれる程餘りに堅固な搖籃を、如何にして破るであらうか？

その或者には(例へば蟻の如き)他からの手助なしには遂に自由になることの出来ない程、困難な状態に監禁せられてゐる種類がある。其處で外から彼を無理やりに引出す、云はゞ分曉せしめる、彼を幽閉してゐる頑固な此の産衣から引離す。恵まれたる困難、それは代を異にする人々への繋縁を造るものである、此の恩人を、自由になる此の子供に結び付けるものである。教育を又社會そのものを始めるものである!

だが、多くの昆蟲にあつては此の恩人は大自然そのものに外ならない。盡きない愛情と發明力とを持つてゐる此の慈母は、此の小兒に、此の關門を開くことの出来る、此の牢獄を破ることの出来る、そして彼を自由の日の下に導くことの出来る魔法の鍵を與へる。(どんな鍵だ?…又どんな風にして、と諸君は問ふであらう、此の柔弱な小兒が、堅い目のつんだ織物、時に二重になり、又長い冬の期間の雨が持つて來る沖積土で壁を塗られてゐるものを取餘くのか? 噛み破るのか?)

さあ我々なら全く弱つて了ふ所だ。處が大自然は弱りはしない。ほんの小さな、極く簡

單な手段で、彼女にはこと足りる。彼女は此の困難を巧みにくゞる、軽くあしらふのだ。一例を挙げれば、かの蠶蛾は繭を發見する。何處に? その眼の中に! 彼の復眼は、その細いダイヤモンドの尖端で此の絹の牢獄に繭をかけて切るのだ。

他の或者は(それは黄金蟲だ)地中に閉込められてゐるのだが、その當日になると急に立派な機械師になる。自分自身を以て、その全身を以て、彼は挺を造る。その後部端は、正に一個の鶴嘴である、堅い尖端である。彼はそれを確りと埋める、身を定着する、身を確然とする。此の支點から、彼は恐る可き力を出す、そしてその堅牢な兩肩を以て、その重い土塊を持ち上げ、緩める、そして遂に日の目を見る。その重々しい器官を、翅を、翅の鞘を擴げる、そして黄金蟲らしく飛んで行く。

又不器量な抗道夫の蟻蛄は、若し、地底から這出る爲に、あの巨大な二本の手、むしろ力強い二個の繩まきやを持つて進路を開くに非ざれば、倒底表面に達することは出来ないでもあらう。不器量な爲に、彼はそれ程春に情おもひをかけない、それ程に戀愛的ではない。けれども

彼には其奇怪な姿を朧ろ氣な月光より外にはうつし出さない丈の用心がある。彼の物悲しい叫び聲は、彼が呼びかけてゐる女の心を動かす。彼女は其の聲に引かれて現はれる。けれども之が我が子孫の希望を夜の中へ歸す爲め、保護者たるもの陰へ託す爲めである。

脆弱な水生蟲、蚊蚋かろうばは此の大切な日に大膽な航海者の役を演ずる。彼が見棄てた覆ひが猶彼に役立つ、即ち彼の船となるのである。彼はそれへ乗船する、その上へ立つ、その新しい翅を帆として擴げる、かくして航海する。そして大概難破することもなく岸邊に到着する。そこでその翅が乾かされて今度はそれが彼を運ぶ、狩獵へ、快樂へ。一時間もする内には彼は此の新らしい技術の凡てに通曉して了ふのである。これが教へられもせずに學んで行く愛の本質である。

愛は翅を持つてゐる。神話は全く理があるのだ。それは本來の意味に於ても比喩的の意味に於ても眞實である。此の短い期間に於て、自然は愛の對照に向つて飛翔する根強い力

を示してゐる。萬物は彼等自身の上に浮び上る。凡てが光明に向つて登つて行く、凡てが希望の翅に乗つて求めて行く。内の焰が亦美しい色に燃えあがる。各自が身を飾るのだ。各自が他の意にそはんと欲するのだ。

蝶はその翅を飾る大きな天鷲絨の眼を以て諸君を凝視するの風がある。あらゆる種類の鐵蟲は動く寶石の様子、その焰の様な光澤と燃ゆる様な活氣とを以つて諸君を驚かす。遂に瞑府の懐から、彼自身、覆を除去して裸體となり、燦然たる星の様に、愛の焰を輝やかしてゐる。

策略ばかりで生きてゐる沼澤の陰氣な幼蟲は素敵な女丈夫となる、「お嬢さん」と呼ばれてゐるすらりとした飛行士（蜻蛉）だ。これは最も完全な飛行の自由を示す此種の第一人者、昆蟲類中の燕である。誰か此牧場或は水の上を、廻轉、逆轉、中返りとあらゆる運動をなすその姿に眼を惹かれないものがあらうか？ 一見すれば如何にも氣迷れな飛行である、だが決して決して。それは一種の狩獵である。優美な然も迅速な、無數の昆蟲の根絶

である。吾々に遊戯と思はれるものが、此の光輝ある戦士が自己の戀愛期を養ふ貪慾飽くなき吸収なのである。

是等爛漫たる美事さが全く美はしい天候の賜であるなど信じてはならない、彼等が愛と死との爲に装つた輝びやかな舞踏者が、唯單に太陽の恵みであるなど、此の全能の裝飾者がその光を以て、これら吾々が彼等の翅の上に驚異の眼を見張つて發見する七寶を、寶玉を焼き出だすのだなど、考へてはならない。他に猶一の太陽が、全世界を北極の霜の中までも照す太陽が、即ち愛が、此處にそれ以上の働きをしてゐるのだ。それが彼等の内部生命をあふるのだ、彼等のあらゆる能力を驅つてゐるのだ、そして一定の時期に、尊き花を開かしめるのだ。これら爛爛たる色彩こそ最も雄辯なる彼の明快な精根である。これが、その頂上に到達し、そこに自己を打立て、勝利を勝ち得、自己を分散し、捧けて了ふ完全な生命の誇りである。これが希望の習慣であり、止むに止まれぬ祈願であり、愛の對照への溢れ来る呼び掛けの言葉である。

あまり美はしくない、陰鬱な氣候の處にも、熱帯地方に見る様な輝やかしい衣を、諸君は見るであらう。誰か、我曇りがちな定まらぬ空の下に、斑猫の身を光らせるのを見ないものがあらうか？ 夏が一瞬間しかない様な陰鬱な荒野に於てさへ、愛は、恰も太陽に反抗する様に、貧弱な裸の大地に反抗する様に、彼等に、華美な光彩を、豪華な衣服を、裝飾を生ぜしめてゐる。こゝに於てか、悲惨なシベリヤには昆蟲民族中の王者が濶歩してゐるのだ。慘忍なロシアの風土天候も、慘酷な且つ恐王イワン(Ivan IV, le Terrible)露國最初のツァー、在位一五三三—一五八四年)より豪邁な狩人たる巨大なる甲蟲類が緑や黒や莖色、さては濃藍のモロッコ皮で、黒ずんだ碧玉の輝きにまで身を装ふのを禁じてはゐない。或者に至つては、皇帝やビザンチン朝王子(ボルヒイロジエネート)の神聖な舊衣を借奪して、金の縁の着いた緋衣を着て横行濶歩してゐるのである。

殆んど同じ状態にある我等のシベリヤたる高い山々、例へば、あのピレネの氷塊、あの霞の鋭い打激を受けながらも、猶臆することなく、やはり尊貴な昆蟲が得も云はれぬ立派

な装ひをして飛んでゐる、眞珠色の縞子と黒い天鵞絨との飛白になつたマントを着たロザリイがそれである。

アルプスの高峰に、グリンデルヴァルト (Grindelwald, スイス・ベルヌの一寒村氷雪に名あり) に、あの吾々を襲ふ恐るべき氷塊、吾々の膚を突裂く針を持ち、吾々をこゝえしめる鋭い息吹を持つた氷塊の襲撃にも、吾々は或さ、やかな、だが心を魅せられる愛の發言を見て驚くのである。永遠の笞刑を耐えてゐる殉教的樹木、幾本かの瘠せた樺の中には哀れにも小さな、上品な、そして優美な植物が猶根氣強く花を咲かせようとしてゐる。薔薇色の、だが少し董色が、つた花を、正に此の悼ましい處に相應はしい花を。此の悲壯な薔薇の友として、あらゆるものより危弱な、非常に小さな昆蟲が登つて來てゐる、吾々は彼等が猶モンブランの此の大雪にかじかんでゐるのを發見するのだ。彼方には、も早空も見えない、此方は、見渡す限りの經帷子。詩人たる彼は正に二つの色調を解してゐる。彼の翅の空を寫した青色は、何といふ細やかなものであらう、恰も霜の白粉を以て輕やかに

磨かれたかの様である。巖を覆す嵐も雪崩も彼には何の恐れにはならない。此の恐ろしい巨人の息吹の下に、その逆立てる氷の髭の中に、又その畏こき肩の中に、彼は大胆に飛翔する。此の小人は明らかに想像してゐるのだ。此の永久の冬の王様は、その死の王國內に、此の空の光りを猶保存してゐる愛の最後の翅の花を、破壊するのを躊躇すだらうと。

第二篇 昆蟲の藝術と使命

第八章 スワムメルダム

一六〇〇年以前に何か無限なものが知られてゐたらうか？ 何もなかつた、無限に大きなものもなければ、無限に小さなものもなかつた。此の問題に就いて、あれ程屢々引用されるバスカルの名文も、非常に老いた、而も非常に若い人類の素朴な驚異である、彼は自己の驚くべき無智を悟り始めたのだ、遂に現實といふものに眼を開いたのだ、そして此兩者の深淵の間に眼覺めたのであつた。

一六一〇年にガリレーが、和蘭から擴大鏡を取寄せて、望遠鏡を造り、之を以て空界を眺めたことは誰一人知らぬものはない。が、スワムメルダムが粗末な顯微鏡を巧みにあやつりながら、之を下方に向けて、始めて無限の生存物を、生命を持つたアトムの世界を認

めたことは、一般にはそれ程知られてゐない！ 彼等は、相繼いで此の世に出た。彼の偉大な伊太利人（ガリレー）が世を去らんとした時（一六四二年）に、此無限小世界のガリレーたる和蘭人（スワムメルダム）は生れてゐるのである（一六三七年）。

驚く可き革命ではないか。生命の深淵はその深みの中に、何億萬とも數知られぬ未知の存在を、敢て夢想だにせられなかつた奇怪な生存物を示しながら出現したのだ。けれども最も甚だしいのは、科學の方法そのものが變つたといふことである！ それまで吾々の五感を信賴して來た。最も嚴格な觀察は、五感の承認を頼みとしてゐた、そして、五感の判斷に抗議することは出来ないと思つてゐた。然るに、此處に於て、經驗及び五感そのものさへ、或有力な補助物に修正されて、唯に五感は吾々に事物の大部分を隠蔽してゐるばかりでなく、五感が吾々に示す處のものが常に誤つてゐるものであることを、自認するに至つた。

此二大革命がその創始者の上に全く變つた印象を與へたのを見る程奇異なことはあるま

い。凡てが調和して、驚く可き進歩を見せてゐる空界の無限の前に立つたガリレーは、驚異と共にそれ以上の歡喜を味つた、彼はそのことを快活な文章に託して歐洲に傳へた。顯微鏡的世界の無限の前に立つたスワムメルダムは恐怖に捕はれた様である。彼は、互に啖ひ合つて鬭争してゐる自然界の深淵の前に立つてたぢろいである。彼は困惑してゐるのだ、彼は、之が爲に自分の凡ての思想、信仰が動搖するのを恐れてゐる様である。奇怪な陰鬱状態、それが彼の大事業と共に彼の生命を縮めてゐる。吾々は少しく此科學の創始者に寄路して行かうではないか、彼は又科學の殉教者でもあつたのだ。

スワムメルダムの没後百年、彼の大醫學者ボオラアヴ（Boerhaave, 1668—1738, 和蘭醫學者にして植物學にも通じたる有名なレド大學教授。）は或敬虔な意圖を以てあの「自然の聖書」を公刊したが、その中に意外な、吾々を沈思默考せしめる様なことを言つてゐる、（彼は情熱的な悲哀を含んだ焔の如き想像力を持つてゐた、それが彼を崇高ならしめるのだ）と。即ち此忍耐を要する事業の大家の中での大家、最も極端な微細物の倦まざる

観察家、自然を非常に深く、眼にもとまらぬ點まで追求せるものは、一個の詩を持つた魂であつた、想像の人であつた、無限を欲求してそれ以外の何物をも欲しない、そして遂にそれを得ることなしに死んだ所の憂愁の人の一人だつたのである。

性質の違ふ二つの才能の珍らしい結合ではないか、それは一寸見た丈では相反するものだ、即ち廣大なものに對する愛と、最も微細なものを追求する趣味、崇高の求心性と、アトムの區別を求めて飽くことを知らぬ執拗な分析。けれども實際に於て、之等の特性はそれ程對照してゐるものだらうか？ 決してそんなことはない。大自然に對して愛の心を持つた人は、之等のものが共々にうまく掛合つて行くものだと言ふことを知つてゐる。大もなければ、小もないのだ。愛あるものに取つては、單に一本の髪の毛も、一世界と同等である、時にはそれ以上でもある。

彼は一つの博物標本室に生れた(一六三七年)。此が彼の運命を決定した。その父アムステルダムの藥劑師が造つてゐた此標本室は、雜然渾沌たるものであつた。少年の彼は之

を整理して、その目錄を作らうとした。此慎ましやかな望みが次第々々に彼をして當代の最大博物學者たらしめて行つた。

彼の父は和蘭きつての熱心な蒐集家の一人だつた、様々な珍品の儘まざる貯藏家であつた。彼の家に充滿してゐたものは、繪畫ではなかつた、又古美術品でもなかつた。彼は、かの兩印度から船舶が運搬して來たあらゆるもの、礦物とか植物とか奇怪な異常な動物等を、金に絲目をかけずに買入れて、積上げて置いたのだつた。之等未知な世界の不思議が持つ、その光輝とその熱帶的な壯麗とは、其處の陰鬱な風土や暗然たる北海と對照して、此若き和蘭人、自然に對して私達の想像も出來ない様な熱烈な歸依と力強い好奇心とを抱いた彼の心を攪き亂したのであつた。

或卓越せる和蘭の畫家は、まだ若い十二歳の時の碩學グロシアス(Grotius, 1583—1645, 有名な和蘭の外交家にして法律學者)が、片々たる書類や地圖や、兩半球圖や、その他彼の博覽強記を示すあらゆるものに取圍まれてゐる處を素晴らしい繪に作つてゐる。だが、

若し此畫家が、或は寧ろあの力強い魔人レムブラン (Rembrandt, 1606—1669, 有名な和蘭派の畫家) が、此神祕的な標本室を、鑛物、植物、動物三界の燦爛たる渾沌を、そしてその大きな謎に捕はれてゐる若いスワムメルダムを描き出して置いて呉れたなら、私は何んなにそれを望んでゐたことであらう!

アムステルダムの雑踏、繁華な動きは彼の孤獨を助長してゐた。此商業上のバビロンは此思索家にとつては全くの無人境であつた。睡たけな運河の岸にあつて商業を事とする人の沈黙の海洋の中に、彼は恰も無人島にあるロビンソンの如くに暮した。彼を殆んど理解しなかつたその家人からさへも離れてゐた彼は、殆んどその室を出なかつた、そして父の店へも出来る丈顔を出さなかつた。

彼の唯一の氣晴しは、沼地の多い和蘭の至つて僅かな陸地の中に昆蟲を探しに行くことであつた。陰鬱な牧場はポール・ポッテ (Paul Potter, 1625—1654, 和蘭の動物畫家) に有名な牧畜に蔽はれてゐて、夏は、その濕っぽい暑氣の中に、動物生活の様々な状態を示してゐ

る。族人は驚異の眼を見張る、此地では鶴や鳩や烏や其他多くの敵同志が、豊富な食物の前に完全に仲直りして、共々に極く大人しく食をあさつてゐる。之等の畜類は、他所では殆んど見られない所の平和な、安心した風をみせてゐる。その夏は短かい、そして早くから秋の物凄さが始まる。人も自然も、此處では凡て、或非常な風習の柔しさと、眞面目さとの中に、極く平和に調和してゐるらしい。

全くの蒐集家に過ぎなかつた彼の父は、少年時のスワムメルダムが恚んな風に日を暮して行くのを見て心配してゐた。彼は我が子を宗教論に異彩を放つ様な名譽ある宣教師、雄辯な牧師にしたいと思つたのであつた。然しその子供は、次第に沈黙勝になつて行く様に思はれた。父は、心を悩めた上旬、榮譽から金へと方向を轉じた。恚うした非常に氣狂ひじみた、非常に病的な黄金の都の中には、如何なる職業と雖も、醫者程金の儲かるものはない。それは彼にとつては全然方向の相反する障碍であつた。がスワムメルダムは博大な心を以て醫學の研究に這入つた、けれども、醫學を創始するといふ條件を立て、ゐた。醫

學は未だ存在してゐなかつたのだ。其處で、彼が斯學を据えんとする根柢こそ、先決的な自然科学の創始だつたのである。健康な人間を知ることなしに何うして病人を癒やすことが出来ようか？そして又此健康人をば、一方に於て、之を表現し之を代辯してゐる所の下等動物を研究することなしに、何うして知ることが出来ようか？之等非常に微妙な神祕を肉眼を以て良く見ることが出来ようか？視覺の弱さは吾々に誤りを與へないだらうか？かくて科學の嚴格な創始は勢ひ我等の五感の改革とレンズの創造とを強要したのである。

本當の創造だ。顯微鏡を見たまへ。それは單なる眼鏡であらうか？此器械の眼球にスワムメルダムは支腕を附けた、その一は鏡を支へ、他は對照物を支へる。彼自身、或る最も困難な研究に當つた時、慙う言つてゐる、(自分は誰か他人に助力して貰はうと思つてゐた、けれどもさうした助力は障礙になるのだ。)此處に於て、彼は此口も利かない銅の人を、何時でも役に立つ處の控目勝な助手を造り出したのである。そのお蔭で、此觀察家は補足的な手と様々に異なる視力を持つた多くの眼を自由に使驅することが出来た。恰もか

の鳥類が自分の眼を或は大きく膨脹させたり、或は小さく縮小させたりして、廣大な全體を眺めたり、又は非常に細かく、微細な點まで見抜いたりする様に、スワムメルダムは漸層的な膨脹方法を、即ちレンズを様々な擴大率と様々な彎曲率とに使用する術を創始して、そして全體を見たり、各部分を研究したり、さては其各部をその位置に置いてみる爲に全集合體を再審し又、統一體としての調和を再び造りあけることの出来る様にしたのである。

之だけか？といふにさうでない。死物を觀察する爲には時が必要である、處が時間はその物を吾々から奪つて了ふ。死體は動かないから研究に便利の様であるが、ともすれば偽り勝である。死は一瞬間にしてその外面を固定される、處がその内部は融けて了ふのだ。スワムメルダムの新發見、彼は唯に觀察することを教へたばかりではなかつた、彼は常に觀察することの出来る様な方法を發見した。彼は保存注射に依つて、慙うしたはかない物體を固定せしめた、時をして停止せしめた、そして此死者の永續を強制した。露皇帝

ビエールは、久しい後のことであるが、彼の或門下生の家で、小さな子供の柔かい活々とした美しい體を見て、此薔薇色の肉體は生きてゐるのだと信じた、そして、之に接吻せずにはゐられなかつた。

慙うした凡てのことは言ふは易い。が、何といふ長い仕事であつたらう！ 何といふ努力だつたらう！ 忍耐と緻密と熟練との何といふ奇蹟であつたらう！ 殊に微細の階段を下れば下る程、吾々の用ゆる不十分な方法が次第に障碍となるのである。吾々はさうしたものに傷を附けずには殆んど觸ることも出来ないものである。吾々の武骨な指では最早摘むことが出来ない、それは陰となり、障碍となる。吾々の器械は慙うしたアトムの上に運用するには餘りに粗大である、吾々はそれを精細なものとする。がその時には、何うしたらその見分けもつかない尖端を之も明瞭見えない様なものの中に下すことが出来るだらうか？ 之等の二つの末端は、眼の前にありながら吾々を掠めて了ふ……唯熱情のみが、生命と自然とに對する制しがたい愛のみが、言はゞ、測り知り難い慈愛のみが、女性的な敏感さ

(一個の男性的な科學上の才能の内に於ける)のみが、よく此深奥の極に到達し得たのである。吾が此和蘭人は慙うした小生物を愛してゐた。彼は彼等に向つてはメスを放擲した程、彼等を傷けることを恐れてゐた。彼は出来る丈鋼類を使用することを避けた、そして非常に柔かい象牙を用ひたのであつた！ 彼はそれを顯微鏡的に細い、無限に小さな針とした、従つてそれは急速な使用に堪えない。それが又勢ひ彼をしてゆつくりとした觀察をなさしめたのである。

此自然に對する尊敬、此愛情は、自然からその報賞を得た。未だ非常に若い、レエド大學(和蘭の有名な大學)の單なる一學究に過ぎなかつた彼は、自然に就いて、最も高い、そして最も低い二つの深い手がかりを獲得した。先づ第一に彼は人間の母性と昆蟲の母性とを發見し理解した。此第一の問題、彼がレエド大學の先師達を征服した處の此非常にデリケートな非常に重大な問題を私は保留して、第二の問題を取らう。彼は蜜蜂の卵巢を精密に調査し敘述した、所謂王の内にそれを發見した。そして、これは女王或は寧ろ母であ

つたことを示した。彼は又同じく蟻の母性をも説明した。彼が明らかにした蟻の都市は、高等昆蟲の本當の神祕を現した、吾々をして此社會の實際の性質に通曉せしめた。それは決して君主國ではなくて、母性の共和國であり、皆が市民を育成してゐる處の廣大な公共的搖籃であつた。

昆蟲生活の最も一般的な事實、彼等の生涯の高い法則、それは「變態」といふことである。他の動物に取つては全く不分明な此變化は彼等に於ては非常に際立つてゐる。誰か、かの重い物々しい消化器官を引摺り、大きな毛むくぢやらの足を持つてゐる青蟲が、翅に任せて大空に舞いあがる胡蝶と同じものなどと、敢て主張したものがあつたらうか？

青蟲と蛹と蝶とは同一生物の三状態であることを、その生活の自然的な、正規の三革命であることを、明細な分解を用ひて、斷言し、明示したのは彼である。

歐洲の學界は此變態に關する新科學を如何にもてなしたか。それが問題であつた。スマムメルダムは、年も若く、そして、何等の權威もなければ、アカデミーの他位も、大學の

地位も持たず、自分の標本室に暮してゐたのだ。彼の生存中、否その没後五十年経つてさへ、殆んど如何なるものも彼のものは公にされなかつた。そこで、彼の發見は、彼の光榮をなす由もなく、萬人に流用せられ、利用せられたのであつた。

和蘭學界も冷酷であつた。レエド大學の幹部教授達は彼の反對者であつた、そして此名もなき一學生が其發見に依つて、彼等と同等、或はそれ以上の位地に置かれることを、快としなかつた。

父は彼を貧窮悲惨な状態に置いた、それが彼をして多くの人々の世話にならしめずには置かなかつた。可成に金のかゝる此仕事を續けてゐた彼は、國にあつては友人達の義侠心に助けられてゐた。レエドで彼の費用を負擔したのは、その解剖學教授ヴァン・ホルン(Van-Horn)であつた。

當時二個の有名な文藝院が成立されんとしてゐた、ロンドン協會と我が(佛蘭西)科學文藝院である。だが前者は殊にバドゥ(伊太利の大學)の學生、ハーラー(William Har-

vey, 1578—1658, 英の醫學者、血液循環を發見して名あり)の天才に鼓吹されて、伊太利に眼を向けてゐた。そしてかの非常に偉大な、非常に精確な觀察家マルビギイ (Marcello Malpighi, 1628—1694, 伊太利の醫、解剖學者)に問題を課した、彼は此頼みに蠶の解剖學を提出した。私は、何故之等の英國人達が和蘭に向はなかつたか、又何故スワムメルダムの天才をも審査しなかつたかを知らない。

彼は佛蘭西に於てのみ始めて迎へられたのであつた。彼が始めて其發見を公に發表したのは、此處巴里の近在に於てであつた。彼の友人テヴノオ (Melchisélec Thévenot, 1833—1907)、あの有名な旅行家がイシイ (セエヌ河岸の或村)に於ける自分の家に、様々な學者、語學者や東洋學者や、殊に、當時の所謂自然愛好者達を叫合した。これがそもそも我が科學文藝院の起原であつた。此偉大な和蘭人の啓示は此搖籃の除幕式をなしたものであると言ふことが出来る。

一佛蘭西人が當時ガリレーの最後の手稿を宗教裁判所から救ひ出してゐた。一佛蘭西人、

テヴノウが又してもスワムメルダムの財布と聲望とを支へた。彼はスワムメルダムを巴里に定住させようとしたらしい。然るに一方ではトスカアヌ大公が彼をフロレンスに呼び寄せてゐた。けれどもガリレー呪咀の聲は可成に高かつた。佛蘭西に於てさへ、あまり安心はならなかつた。あの神祕主義者モラン (Simon Morin, 幻想家、生きながら火刑に處せられた)が一六六四年巴里で焼き殺された、その時にモリエールは「タルテュフ」の初演を演じた (Molière, 1622—1673, 佛蘭西最大の喜劇作家にして又役者、監督を兼ね、その作 Tartuffe は背徳偽善の人物を扱へる一傑作である)。スワムメルダムは丁度此時其處に居合はして、是等二個の光景を眼のあたりに見た。

非常に實證的な彼自身が自分に神祕主義の奇妙な傾向のあるのを見たのは此時である。彼は、精密な研究に這入れば這入る程、愛と生命との普遍的根源に溯らんと欲したのでもあらう。彼を燒盡せしめた敢果ない努力だ。三十二歳の年から、仕事の過乗、苦惱、信仰的憂鬱等が既に彼を死に導いてゐた。彼は早くからかの沼澤地に極く有勝な發熱に捕はれ

てゐたが、それに殆んど何等の手當をしてゐなかつた。彼は毎日六時から正午まで顕微鏡を覗いた、そして、殘餘の時間には記述をこととした。恙うした觀察の爲に、彼は夏の日の強烈な太陽の光線を選ぶのであつた、そして極く僅少な光線をも失ふことを恐れて、冠物を冠らなかつた（屢々びつしより汗を流しながら）。かくて彼の視力は強く衰えて了つた。

一六六九年、彼が最初の論文、昆蟲類變態原理を公刊した時、彼は既に恙ういふ状態にあつたのである。彼が既に不朽の人であつたことは確かだが、と同時に、餓死の危険に頻してゐたことはそれ以上動かすことの出来ない事實だつた。父は爾後彼への扶助を中止した。スワムメルダムはその發見（淋巴管、ヘルニア等）に依つて直接醫術を、又外科醫術をさへも進歩せしめてゐた、けれども彼は醫者ではなかつた。彼は當時從順に開業せんと試みてはゐたのだつた、が彼は續行することが出来なかつた、そして病氣に罹つた。暖爐さへ彼にはなかつた。父は我が家を疊んで婚の家へ引取つた、そして、彼には何處か

他所へ、行ける所へ行くがい、と宣告した。或金持の友達が曾て屢々彼に我が家へ來て住む様にと懇望して來てゐた。父の家を放逐されたスワムメルダムはその友人の處へ行かうとした、そして、彼にその由を照介した、所が彼はもうそんなことを覺えてはゐなかつた。

あらゆる不幸は彼に覆被さつてゐた。哀れにも病める體を、アムステルダムの舗道の上にさ迷はせながら、何處へ置く可きかも知らない大きな蒐集を抱えてゐる彼は、又しても恐る可き打撃を受けた、母國の滅亡……大地が彼の足下になくなつたのであつた。

悲しむ可き一六七二年、和蘭はルイ十四世の倭人軍の下に潰滅せるかに見えた。祖國は、確かにスワムメルダムを甘やかしてはゐなかつた。けれども、何といつてもそわが自由の理性の、科學の、發生地だつたのだ、人間思想の隱家だつたのだ。それが、佛蘭西軍の襲來の下に、自ら救ひとして求めてゐた此大海の併呑の下に沈没して了つた。祖國は自滅より外には生きられないのだ！ 祖國は生きながらえ得られるのか？ 彼女は最早その

時から彼女自身の影に過ぎないものであつた。

恚うした變遷の盡きることのない憂愁が、あのルイスダエル (Ruyssdael, 1629—1682、有名な和蘭の風景畫家)、スワムメルダムと全く時を同じうして生れ出で、彼と同じ様に四十年代に死んで行つたルイスダエルにその畫を、その詩を作らせたのである。私はルウブル博物館にある彼の評價しがたい様な立派な繪を見る時、此二人を共に共に想はずにはゐられない。かの夕立の迫つて来る砂丘の物悲しい小路を辿る小男の姿は、私に我が昆蟲の探求者を想起させるのである。そして、あの嵐に應じて物凄く打ち合つてゐる茶褐色の水から成る棧橋の壯嚴な海景は、スワムメルダムが(涙と血潮との中に)その「蜉蝣」を書いた時、彼の心の内に起つた精神的暴風雨の劇的表現の様に思はれるのである。

「蜉蝣」は正しく死ぬ爲に生れ、特異な愛の一時を生きる羽蟲である。

だがスワムメルダムは恚ういふ時を持つてゐなかつた。そして彼はその非常に短い生涯を全然孤獨の裡に過した様である。三十六歳の年に、彼は既に自己の終焉を感じてゐた。

彼の胸に宿つてゐた想像と宇宙的な愛との根柢は、當時の無味乾燥の論議に依つて養はる可くもなかつた。處がかういふ状態の折遇然にも、彼の手に未知の一書、婦人の一書が落ち込んだ。その優しい聲は彼の魂にまで突き入つて、彼を幾分慰めた。その書といふのは當時有名なブウリニョン嬢といふ神祕主義者の一冊子であつた。

スワムメルダムは非常に貧しかつた、にも拘らず、彼は獨逸詣でを企てた、そこには彼女がゐたのだ。彼は其處にその慰安者を訪れて行つた。此事から、彼は眞の救ひを、少くも學者達、彼の競争者達相手の論戦から退いて、あらゆる征服を忘れ、自己防禦も自己の發見をも凡て神へ捧げるといふ眞の救ひを得た。

彼は深い深い孤獨の中へ引込まうと欲したのでもあらう。その爲に、彼はその尊い、懐しい標本室、彼がその生命をすり減らし、その心を打ち込んでゐた所の、そして遂には彼その人となり切つてゐた所のカビネを賣らねばならなかつた。彼はそれから別れねばならなかつた。その代價で、彼は自分の必要を充たせる丈の所得を得られるだらうと勘定し

た。處が、此不幸さへも、そして此彼が望んだ分離さへも、彼は持つことが出来なかつた。和蘭に於ても、佛蘭西に於ても此標本室の買手がなかつた。恐らく、虚名なものばかりを覗つてゐる金持の好事家達は、吾々には子供の様な歡喜を與へる之等の素晴らしい種類が分らなかつたのだらう。此大發見者の蒐集は最も重大なものを提供してゐた、彼の發見の順次配列、連鎖、此天才を様々な新發見に導いてゐた處の雄辯な活きた方法等を提供してゐたのだ。噫呼！それが散亂し消滅するのである。

一八六〇年には、長い間の病氣で、或は衰弱から、或は人生及び人間への嫌惡から、彼は閉ぢ籠つて最早外出しようと思ひなかつた。彼はその原稿を、彼が持つた唯一の友、彼の全生涯の忠實な友、彼自ら、その死に際して（比類なき）と呼んだ友、佛蘭西人テヅノオの手に渡した。彼は四十三歳で死んだ。

何者が眞に彼を殺したのだたらう？ 科學そのものなのだ。此の餘りに急激な啓示が彼を打つたのだ、そして彼を奪つたのだ。若しバスカルが自分の身邊に想像的な一個の深

淵が開くのを見たとするならば、此實際の深淵を、掘り下けても掘り下けても涯しのない此意外な世界を實際に見た所の此和蘭のバスカルは一體何うなる可きであつたらう！ 此處では、抽象的な大いさとか、無機的な微分子とかいふもの、次第に細くなつて行く段階が問題ではなかつた、それは實に、或る者の中に他の者が存在してゐる様な生物の漸層的な發達、驚嘆すべき運動の問題であつた。吾々が知つた僅かのものに見ても、各動物は一個の惑星をなしてゐる、即ち他のより小さい動物が住んでゐる所の、而もその動物は更に他の小さい動物に寄生されてゐるといふ様な、一個の世界である。そしてそれは、吾々の感覺の無力と、レンズの不完全とを救ふならば、無限に連續して涯しがないのである。スワムメルダムの手に依つて打開された此無限世界、それを凡ての人々は深めんとした、絶えず掘り下げんとした。此時から、歐洲人は様々な方法を以て之を行つてゐる。ルウエンホック (Leewenhoek) は此處に突進して、様々な世界を發見し獲得した。實證的な伊太利のマルピギイは恐らくその最も大膽なものとして現はれてゐた。彼は昆蟲が心臟を

持てりと證言してゐるのだ！ 此心臓は吾々のと同じく鼓動する。昆虫に、それ處か魂を與へるのも遠いことではない……當時猶存生中のスワムメルダムは、之に恐怖してゐる。彼は此坂を恐れてゐる。彼は此處から引返したかつたのでもあらう。彼は此心臓を疑はんとしたのでもあらう。

彼には、彼の手に依つて受けられた科學が、彼の多くの發見の流れの中に押流された科學が、何か大きな、恐る可きものを彼に齎らしたものの様であつた。それを彼は見たくなかつたのでもあらう。恰もナイヤガラの瀑布を造らんとする渺々たる海の穩かな水の上にボートを乗り出した人が、或靜かな、けれども制しがたい、無限の力を思はせる動搖を身に感じたかの如くである、それは彼を連れて行く、何處へだらう？……彼はそれを考へたくないのだ、敢て考へないのである。

第九章 顯微鏡

昆虫は表情を持つてゐるか？

人間が獲得したばかりの此第六感を備へた私は、自分の意志に従つて、二個の道を進むことが出来る。私は、彼の天體を追求し、捕捉し、計算しさへすればいゝのだ、その軌道に従つてそれらを追つて行けばいゝのだ。けれども私は自分がより強烈に他の深淵、即ち無限小の世界に、引着けられてゐるのを感じてゐる。私はこれらの極微分子の中に、私を魅了し、驚嘆せしめる所の強度の方を、認めてゐるのだ。私自身、一個のアトムではなからうか？ 木星とか狼星とか、さうした私から非常に隔離れた、私には殆んど何等の關係もない巨大な天體は、此の地下存在の秘密を私に教へはしないだらう。是等の存在は、反對に、私を圍繞し、私を壓迫し、そして、私に奉仕してゐるか、さもなくば私を傷害してゐるのだ。若し假に彼等が私に取つてさういふものでないとするも、彼等は私に取つて連

體である。

致命的關連だ。で私は彼等から回避することは出来ない。多くのものが、私の呼吸する空氣の中に、何と云はうか？ 私の血液の中に、私の體内に、棲息してゐる。私は、彼等を知りたい興味は持つ。けれども私のこの崇高な興味は、私の悲しむ可き、哀れな無智から逸し去るものである。その無限を洞察しない限りは此の世界から出ないものだ。

慚ふした考へを胸一充杯に抱いて、私は、顯微鏡の最も大きな、最も立派な使用法を完成した現代の一人、彼の優れた醫學者ロバン (Charles Robin, 1821—1885, 佛の有名な生理學者) の許へ趨つた。そして彼の教への下に、巧妙な光學器製造者ナシエの所で一臺の優良品を買求めた。私はそれを素晴らしい日光の射し込む自分の窓の下に据えつけた。

私はそれを顯微鏡といつてゐるが、それは正に一個のレンズ以上のものである。それは一人の手傳である。助手である。彼は吾々の不足を補ふ爲に手も眼も持つてゐる。而も、その眼は自由に働いて、對照物を好きな大いさに、或は斯々の部分を、或はその全體を見

ることの出来る様に變へる。彼が人を夢中にする魅力を出すことは、完全に首肯される。彼の爲にたゞへ如何に疲勞しようとも、一度彼に手を觸れたものは最う離れることは出来ない。彼はその初めから、既に知れるが如く、その父スワムメルダムを殺してか、つてゐる。その後如何に多くの勤勞家が、その生命といはないまでも、少くもその眼を彼に奪はれたことであらう！ 第一にユーベール (Huber, 1750—1831 有名なスイスの昆蟲學者研究の爲に早くから失明しその後は妻の助力に待つて研究を續けたりこいふ) が早くから失明した。あの黄金蟲に關して優れた大著をなしたストラウス氏 (M. Strauss) も殆んど失明した。蒼白い顔をした我熱情漢ロバンが既に此の坂に乗りか、つてゐる。而も停止することなく進んでゐる。誘惑は非常に強烈である。一度之を覗いた以上、誰かよく眞に放棄し得るであらうか？ 誰かよく、此吾々が存在する誤謬の世界に悦んで再び歸ることが出来るか？ 殆んど常に嘘物を見んよりは、むしろ全然見ざるに如かないのである。私

は彼の裁断を聞くべく一瞬間も無駄にはしない。私が提出した二個のものに就いてのその最初の可成粗末な答へは慚んなものであつた。

一つは白い細つそりした人間の手、何もしてゐない人間の、全く閑散な左の手。も一つは蜘蛛の足。

肉眼では、前者は可成心地のよいものに思はれる、後者は小さな黒つばい刃物、穢しく燻んだ、むしろ嫌らしいものだ。

顯微鏡では、これが正確に反對であつた。或る絨毛様のもので譯もなく淨められてゐる蜘蛛の足の中には、最も美はしい鱗の優美な楯目が寫し出された。それは、穢しいもの處か、非常な艶があつて、之を汚すことはとても出来まい。何をつけたつてその上を這り落ちて了ふに違ひない。此物は二個の目的を持つてゐる様に見えた。一つは非常に精巧な手で、之に依つて此の織姫がその絲を這つて昇降するものだ。も一つは、一個の楯として、此の注意深い織工がその作業中、あの極く細いむしろ雲の様な絲が、外氣に乾いて確固り

とするまで、そしてもう彼れ自身の上にもふわ／＼とする様なことのなくなるまで、その網を任意の位置に保つものである。

人間の手と來たら、顯微鏡の下に差入れることの出来る點は、レンズが最も低い度のものでさへ、巨大な、漠然とした、譯もなく粗雑な、甚しく無様なもの、様であつた。簡單な十二倍乃至十五倍大の中位のレンズで見えさへ、それは黄色ばい、薔薇色がかつた、粗い、潤ひのない、締りのない織物の様だ。一種薄琥珀の網だが、その網の目が一個々々不揃に膨らがつてゐる。

之程不面目なことはない。

此の假借のない判決は様々な花に取つても同じ様に酷烈であるが、人間の花に取つては恐るべきものである。最も若やかな、最も美はしい顔と雖も、此の實驗は試みない方が賢いことだらう。彼女は自分で戰慄するに違ひない。その毛穴は深い淵である。桃の輕やかな産毛はその美しい膚に取つての優しい冠飾であるが、これが、荒々しい荆棘、云はゞ？

未開の森林を呈する。

此の最初の實驗に於て、私は慙ふ感じた、即ち、此の非常に誠實な判斷は單に大いさに關する吾々の觀念を變へたばかりでなく、外面に就いても、色彩に就いても、形態に就いても、同じ様に變へたのだ、凡てのものを嘘偽から眞實へ移したのだと云はずばなるまい、といふことだ。

潔く諦めるの外はあるまい。此の眞理の聲がたゞへ吾々に何を語らうと、私はそれに感謝しそれを謳歌する、よしそれが私を怪物だと言はうとも。だがそれはさうとばかりは限つてゐないのだ。假に、それは慙ふした外皮に就いて吾々の觀念を甚しく變へて了ふものとしても、その代りに、眞に無限な、深奥な美の世界を示して呉れる。解剖の時、唯だ見ると恐ろしい多くのものが、可憐な心を動かされる様な美妙なものとなる、崇高な感と與へる様な詩的な魅力のものとなる。之は主張すべき問題ではないが、唯一滴の血、一見したゞけで氣持の悪い赤煉瓦の様な、べつとりした、不透明なあの血が、若しその乾いた處

を擴大鏡で見るならば、一個の蔷薇色をした素的な喬木性のものであつて、その細い筋は、恰もひしやけて厚ぼつたい珊瑚のその様に可愛らしいものである。

だが、昆蟲に就いて見ることにしよう。あの最も哀れな蟲、羅紗を食ふ小つぼけな牛虱ミトの蝶、最も低級な蟲と思はれるあの穢らしい白い蝶を取つて見ることにしよう。その翅丈を取つて見給へ。否、もつと限つて、その翅にか、つてゐる埃、軽い粉をほんの少し丈でい、吾々は之を見てびつくりしない譯にはいかない。自然は、こんな屑の様な創造物が、自由に、疲れずに飛ぶ爲に、最も巧妙な作業を施し盡して、その翅には、粉ではない、無数の小さな風船玉を撒きかけてゐるのだ。之は見ように依つては、バラシユートと同じい、非常に工合のい、器械で、開けば、此の小さな航空者をちつとも疲れさせないで、何時までも空中に保ち、もつと開くか又はつぼめるかすれば、彼を昇登させたり、或は下降させたりし、疊んで了へば、彼を休ませるといふ譯である。此の蝶の中の最小者は、慙うした保護の下に、空中の一流の鳥にも劣らぬ無限の飛行力を以つてゐる。

吾々人間の技術を凌駕してゐる彼等の恠ふした不思議な装置には、吾々は甚しく興味をそ、られる。吾々は彼等の恠ふした驚くべき珍奇な運動法を、恰も或る奇蹟に依つて此の世界に持つて來られた他界の住人でも見る心地で觀察するのである。然しながら、最も見なくなるものは、把握せずにはゐられない氣のするのは、その内部の状態だ。彼等の體内に包含されてゐる或る閃光を放つ焰である。何か彼の思想らしいものである。一體彼等は表情を持つてゐるだらうか？ 若し吾々が彼等の仕事に依り判斷するならば、彼等のあの奇妙な顔の中に、何か吾々人間の理智に似た様な智能の作用を看破し得るだらうか？ 犬やその他私の近くに居る諸動物の眼の中には或表情が感じられるものだが、蜜蜂とか蟻とか、さうした犬などには出來ない様な色々なものを造つてゐる天才的な建設家達には、何かさうしたものが發見されないものであらうか？

才人が曾つて私に恠ういふことを言つた。(少年、僕は昆蟲が非常に好きだつた。僕は青蟲を取つて來ては、蒐集したんだ。僕の好奇心は殊にあいつらの顔色を見たかつたんだ。

だが、僕には何うしてもそれが分らなかつた。何う見ても、あいつらは當惑した様な、沈鬱な、悲しげな顔をしてゐる丈なんだ。それで僕はすっかり張合が抜けて終つて、昆蟲の蒐集を捨て、終つたよ。)

私だつて矢張、此の新らしい研究に於ける子供だつた、新參者で好奇心に動かされてゐたといふのである。私の猛烈な好奇心は此の沈黙の小世界の顔色を覗きたいといふのだつた。聲がないのだから、その黙し勝ちな思想を捕へたいといふのだつた。思想？ 夢だ、少くも、不分明な、浮動的な本能だ。

私は蟻に就いて見た。

形體も色彩も映えないが、社會的の本能と教育意識とを非常な程度にまでもつた動物だ。私は彼等の活氣ある精神、彼等をして危険や障碍や冒険を譯もなく冒さしめるあの策略に富んだ、當意即妙的な精神のことを言ふのではない。

だから私は最も普通な種類の蟻、中性な、戀愛を免除されてゐる労働蟻を取る。彼等に

於ては性が仕事の爲に萎縮し、それ丈此の本能を發達させてゐる。彼等のみがその小さな都市のあらゆる仕事、日用品係、乳母、建築家等を千態萬様の發明力を以て努めてゐるのである。

私は或る非常に美しい日を選んだ、夏の激烈な光でなしに、秋の穏かな光に輝いた麗かな日だつた（一八五六年九月一日）。私は唯獨り或る大安息と深い沈黙との中にゐた、吾々には珍らしい此の世の完全な忘却の中にある。現在と過去との非常な動搖の後を受けて、私の心臓は一瞬間休止してゐたのであつた。

未だ曾て之程私が、耳になど決して這入つて來ない此の沈黙の聲を、聞き得る状態にあつたことはなかつた。吾々を八方から取巻いてゐながら、然も此迄吾々の交渉範圍外に、吾々の力の彼方に止まつてゐたあの小さな神秘の中に、或る靜かな優しい精神を以て、這入り込んで行ける状態にあつたことはなかつた。

我が蟻に面と向合つて、十二倍大の可成立派な擴大鏡を手にした自分は、彼を、机の上

に殆んど一杯に擴けられた大きな白い美しい紙片の上に靜かに置いた。

顯微鏡では一部分だけは見られたらうが、全體は見られなかつたらう。非常に強度の擴大率が、幾分第二義的な細部、例へば、蟻に生えてゐる極く微かな毛までも、物々しげに寫し出したことだらう。猶、彼は動くから、彼を顯微鏡の焦點に保つことが出来なかつたかも知れぬ。擴大鏡は彼の動く通りに動かせるから、彼の動くまゝに彼を見られるのである。

とは云ふもの、却々厄介だ。彼は素ばしこく動く、不安氣に、ひどく、此處から出ようとあせる。私が紙の中央に彼を視てゐると、もう彼は殆んど端つこの方へ行つて了ふのであつた。で彼を眠らして成可く動けない様にする爲に、彼に少しばかりのエーテル麻酔をかけねばならなかつた。

彼は見た處、非常に清潔だつた、全く釉藥をかけた様である。中性で雌ではないとは云へ、彼は可成強固な腹を持つてゐた。腹部は二段の小さな膨らみで胸部に接續してゐる。

その胸部から、強固な、殆んどまんまるい頭が恰好よくすんなりと浮き出てゐる。

此頭部は、恙うして全體的に見ると、鳥の頭の様だ。けれども嘴はない、其場所には圓形の突出部があつて、其の中によく注意して見ると、兩端が結合してゐる二個の三日月形のものがある。之が彼の齒又は顎である。吾々人間の様に上下に動くものではなくて、水平に、横に動く處の齒である。此蟲は此顎を多種多様な役に立てる。之は單に食ふ爲めの器具ではなくて、あらゆる技術の爲めの道具である、部分的には手を助けて、石を截つたり、物を捏ねたり、刻つたり、小さなものを持上げたり、運んだり、時には、大きな重いものさへも動かしたりするのである。

彼が非常に立派な鎧を着てゐることはよく解つた。エーテルは上向きをしてちつとも泌み込まなかつた、そして唯彼を茫然たらしめたに過ぎなかつた。一瞬間動かすにゐてから、彼は再度半ば甦つて來た、そして、恰も酔漢か又は偏頭痛にでもやられた人の様な動き方をした。彼は（俺は今何處にゐるのだらう？）とでも言ふもの、様であつた。そして

自分の歩いてゐる地を、大きな此紙片を識らうと努力してゐた。彼は幾歩かよろめき勝に歩いた、右に左に一々蹉きながら。彼は二個の器官を前に突き出した、私は始めそれを彼の足だと信じてゐたのだが、よく観察すると、それは本質的に違つたものであつた。

それらは眼の傍に生えてゐた、そして眼の様に、之が觀察の道具であることは明らかだつた。之等の觸角は、その名の通り、長く、強く、繊細なもので、ほんの一寸したものに觸れてもすぐ振動するのだが、肉付がよくて、その筋々は約二十本位の可動片を結び、互に他のもの、中へ組み込まれてゐる。手探りしたり觸診したりするに最も適した器官だ。だがこれには他の效用があるのだ。これに依つて蟻達は可成複雑した通知を一瞬間に傳へ合ふ。といふのは、事實それらが彼等の方向を轉換せしめ、彼等を後退せしめ、突然に進路を代へさせてゐるといふのである。これは明らかに、電信の様な或る言語である。此驚異すべき觸感器はよりの確に云へば一種の聽覺である、だからこそ、空氣の極く僅かな動搖にも振動し、あらゆる音波にも感じなければならぬ程動的なものである。

是等の運動や、此緻密なデリケートな觸感的、電信的な器官の合致、最後に物を考へるらしい此強固な頭、その凡てが或る幻を造つてゐた。彼の態度と云ひ、その觸診といひ、自分の境遇を考へようとするその努力といひ、凡てが借に吾々が是に似た様な状態に置かれたら慙うもあらうかと思はれる様な様子を彼の内に現はしてゐた。

彼は執拗に背中を私に向けてゐた。恰も自分の迫害者を見るのを恐れてでもゐるかの様だ。彼は私を恐ろしい巨人と見てゐるに違ひない。そして慙んな醉態に落ちてゐるにも拘らず、絶えず、力強い努力を拂つて、私から遠去かり、安全地帯に這入らうとしてゐるのだつた。

私は彼を柔しく注意深く連れ返した。けれども彼をして私にその面を見させることは出来なかつた。彼の嫌惡、勿論恐怖は餘りに大きかつたのだ。其處では私は彼をピンセットで捕へて、出来る丈さうつと、彼を仰向けにをさへることに腹を決めた。此のをさへが、たゞへ如何に軽いにもせよ、彼が呼吸してゐる側面の小孔（呼吸孔）を壓してゐるので、

彼の抵抗ぶりに依つてみても、それは彼に取つては無限の苦痛であつた。あの小さな足の爪や顎を以て、彼はピンセットを非常に強く叩へた、その度に空氣が振動するのが私に聞えた程烈しいものであつた。私は自分が蟻を抑へてゐるといふ此苦痛な態度を素速く利用した。私は彼の面體を眺めた。

最も意外に思はれるもの、そして彼に奇妙な面相を與へてゐるものは、主にその齒又は顎だつた、口の外部にあつて、一は右から、他は左から、互に出合ふ様に水平に出てゐる顎だつた。吾々のものは垂直ではないか。是等の前方に突き出た齒は凶徴を表はしてゐる、鬪争を示してゐるもの、様である。然るに、先にも述べた通り、そわらは平和の用を持つてゐる、そして、亦矢張手の役をも務めてゐるのだ。

之等の齒の後ろ、口の入口の所に小さな舌繫帶又は觸鬚が見られる。之が實際に小さな口の手であつて、其處へ來るものを擦つたり、いちつたり、ひつくり返したりする。

その額からは、別な、外部の手である觸角が出てゐる、極度に動くことの出来る、敏感

な、電氣的な手だ。

頭の後ろ、胸部から先づ二本の非常に巧者な足が始つてゐる、之がカービー氏に依つて、うまくも腕と名付けられたものである。

こんな複雑な器官が體軀の前に具へられてゐるので、彼の面相は錯雜曖昧たらざるを得ない。若し吾々人間に於て、肩から出てゐる手、體軀の下部に具はるべき四肢とは何等の關係なく、眼や口から六本の手が出てゐたら、一體何んなものだらう？

みんな活動と防禦との爲に與へられてゐるのだ。昆蟲が示す顔はその抵抗的な頭蓋骨だ、動かすことの出来る骨質の罐なのだ。此顔へその眼がしつかりと嵌め込まれてゐる、その眼は動かないといふよりは、むしろ、外部にある複合體だから、動かす必要がないのである。蟻の眼は五十の小面に分れてゐて、それが前後の凡てのものを彼に見せるのである。そこで嘆稱すべき眼光とはなるが、凝視ではない。何等彼の面を動かすべき外部の筋肉がない。従つて表情はない。

その代り其身振狂言は極端に表情的である。非常にいちらしいものでさへあると私は言はう。自分が非常にふらふらして、殆んど歩くことも出来ないといふことを知つた時、彼は、用心深い機敏な人がやる様なことをした。吾々が用へると同じ方法を以つて立ち直さうと努力した。彼はその全身を上部から下部へと法式的にマッサージした。恰も小猿の様に坐り込んで、口の中、細い處へその手といはうか前足を入れた、そしてその手を自分の脊中や胸を洗ひあける様に廻した。時々、彼は又頭部へ返して、兩手に頭をかゝえた、恰もそれは、彼の頭を無力にしてゐる此致命的な醉を揺り落さうとしてゐるかの様だつた。言はゞ彼は自分の考へを凝つと自問してゐたのだ、吾々が悪夢をみて言ふ様に、慙う獨言したのだ、(之は本當かしら？ 之は嘘ぢやなからうか？ ……仕様のない頭だなあ！ ……あ、一體何うしたつていふのだ？)と。

私は此時、自分達此二人は全々別世界に生きてゐるものだといふことを感じた。で、互に語合ふ可き何等の手段もない。彼を確むべき言葉が何かあるだらうか？ 私は聲だ、彼

は觸鬚だ。私の言葉の一語と雖も此彼の言語たる電信では通ずることは出来ない。

昆虫の肉體を蔽ふてゐる此永遠的な骨の箱は、吾々からも亦昆虫を隔離し、隠蔽してゐる。彼は心臓を持つてゐる、それは矢張吾々のと同じ様に鼓動してゐる、けれども、その鎧の厚さの中にあつて、その鼓動は分らないのだ。多くの沈黙者の中に吾々が感ずる様なあの話すことのない言語、それさへも、彼は持たない。彼は全く神祕と沈黙とに蔽はれてゐるのである。

彼は呼吸する、否むしろ、空氣を受入れる、顔からでもなく、頭からでもなく、脇腹からだ。彼には吐息、息吹きといふものが感じられない。さうとすれば、彼は如何にして語り、如何にして歎くだらう？ 彼は吾々の言語なんといふものは何にも持たない。彼は音響を持つてゐる、否、一つの聲を持つてゐる。

此固著した、何等の言を發することの出来ない運命を持つた動かない面は、一個の怪物又は妖物のマスクであらうか？ 否、その活動に依れば、あの反省に富んだ多くの行爲に

依れば、大動物よりも遙かに進んだ彼の技術に依れば、此頭の中には何者か存するといふことを、何うしても信ぜずにはゐられない。そして、生命の階段の最高より最下に至るまで、吾々は靈の同一性を何うしても感ぜずにはゐられない。

第十章 昆虫の使命と自然

昆虫は吾々の言語を持たない。彼は聲では喋らない。表情でも語らない。然らば彼は何で自分を説明するか？

彼はその力に依つて語るのだ。

第一、自然の過剰の上に、自然が消滅せしめんとあせつてゐる餘りに緩慢又は病的な一群の生物の上に、彼が加へてゐる無限な破壊行爲に依つて。

第二、彼は猶その目覺ましい精力に依つて語る、殊にその戀愛期に於て、自分の色彩、活氣、毒物（その多くは吾々の藥である）等に依つて語る。

第三、最後に彼は自分の技術に依つて語る。それは吾々人間の技術を豊饒ならしめるものである。

これが第二篇の凡ての主題である。

先づ彼が吾々を最も傷害してゐる所から、そして、死の援助者、その限りない熱烈な、飽くなき破壊行爲と思はれる所から、此の問題に手を附けるとしよう。その歴史を仔細に視て、より深奥なその意を掴まうではないか。

吾々人間の狭量や、嫌忌や、恐怖や、狭い利己的な判断等に答へる爲には、自然の大きな必然的な反動といふものを考へねばなるまい。

自然は秩序立つた一定の波を以て進んではゐない、自分自身への逆行後退をやりながら進む、それが自然に調和を與へてゐる。是等の外見的には後退りする運動の上に時々落ちる吾々の近視眼的視力は、心配したり、恐怖したり、全體を誤解したりする。

之が無限愛の本體であつて、常に創造しながら、一創造をなす毎に、それを無限に支へて行かうとする。然しながら、その無限そのもの、中に彼は又最初のを分解して了ふ様な敵對的な創造を發生せしめる。若し彼が奇怪な破壊者を創造するとするならば、それ

らは必ず他の多産な怪物を阻止する爲に、救済又は抑制として來るものであることは確かである。

草食昆蟲は原始世界植物の恐ろしい混雜を禁制するものであつた。

處が此の草食類があらゆる法則、あらゆる理性を踏み破つた時、之を閉息させる爲に蟲食昆蟲が出現した。

是等、強猛な創造界の暴君は、その武器やその翅に依つて、征服者の征服者となつたかも知れない、そして、最も弱い種類を極端に抑壓したかも知れない。處が、此の全昆蟲類の上に、最も弱い飛行者の上に、突然大きな翅が、優越な暴君が出現した。鳥類である。

あの御自慢のトンボは燕に依つて掠奪されて了つた。

慙うした連続的な破壊に依つて、創造は阻止されずに、繼續される。そして種の均衡が行はれる。萬物が繼續し、生存し得る様に。或る種が切り詰められ、ば、切り詰められる程、それは多産となる。それは溢れ出るだらうか？ 溢れやうとするその瞬間に、その種

が相手の破壊者に與へた所の新繁殖に依つて、その剩餘が平均されるのである。

緩慢な當代の人々よ、瘦せた陰鬱な西洋の人々よ、切詰められ、手入され、凡てを奪り取られてゐる小さな園に育つた人々よ、諸君はそれを大文化と呼んでゐるのだが、私は諸君に願ひする、何うか、諸君の心を大きく擴けて呉れ、そして慙んなこせくしたものでない他のものを想像する様に努力して呉れ給へ、若し諸君が此の地球の原始的な力を少しでも理解しやうと欲するなら、大地が暖かい濃霧に潤されて、その胸に始めて青春の血潮を湧かした時、彼が擴けた豊饒と過剰とを、少しでも理解しやうと欲するなら。現今でも地球上の最も熱い國々は、蒼白い頽廢状態ではあるが、猶幾分さうしたのを見せてゐる。阿弗利加は、大部水分を失つてゐるが、最もよく保守された地帯には、當時の思出として、あの巨大な、肥えた草、木綿類コットンといふ草の様な木を保存してゐる。北米ギアナやブラジルの未開の大森林では、氣狂じみた植物が混亂錯雜として、規律もなく際限もなく、巨樹を蔽ひ包んで、之を窒息せしめ、腐朽せしめ、その殘骸の中に埋没せしめてゐる。こ

れこそ古代の大渾沌の不完全な相なのだ。此の不純に堪へ此の死の氣息を呼吸し得る程汚穢な動物は、唯あの大きな腹を持った爬蟲類、鈍重な鼈類、青い海曼（鰐魚）、泥と毒とに膨らがつた蛭等ばかりであつた。かゝるものが當時大地の住民だつたのだ。かゝる恐ろしい息苦しさの下に、呼吸を取ることも出来ない大地は、今日吾々人間を生存せしめてゐる此の清い空氣を吹くことは決して出来なかつたのであらう。

此時高空に基礎を据えたのは鳥類である、彼は此渾沌の渦巻の中へ飛び込んで行つて、是等怪物の或物を、空の方、高い森林の頂に奪ひ歸るのだつた。けれども、此の不斷の闘争は、若し下界で無類の齧齒類が此渾沌を明るくし、是等恐るべき獸類の隠場を露出し、大地を窒息せしめてゐた垣毛を太陽の光線に開かしめなかつたならば、是等種族のいまわしい繁殖の下に、永久に繼續したことであつたらう。最も原始的な昆蟲類が、此の世界を再び住み易き處となさしめた最も巨大な事業をなし就けたのだ。彼等は此の渾沌を貪り食つたのだ。

〔因小果大だ、何うしてそんな小さなものが無限を薊り盡したのだらう？〕と諸君は言はれるだらう。だが若し諸君が、あの蠶が一朝孵化して、如何に豊富な桑の葉も満足するとの出来ない様な素晴らしい饑餓を持つ時の、あの目覺めを、一度實際に見さへすれば、諸君は慙ふした疑を抱かなくなるだらう。彼等の主人は或る立派な豊富な桑畑を以て彼等を満足させることが出来ると思つてゐる。がそんなものは未だ何の役にも立たない。人々は彼等に森林を持つて行つてやる、すると彼等は、矢張り要求して止まない。二十歩以上離れた所で、諸君は或る音響を耳にする、恰も不斷に流れてゐる、そして常に波立ちながら砂礫を磨して行く流れの様な奇妙な、斷えることのない物音を聞く。そして諸君の判断は誤つてはゐない。是は流れなのだ、是は急流なのだ。生命を持った物質の無限の河なのだ、それは、慙ふした多くの小さな装置を持った大機械の下を、ざわめいたり、反響したり、咳いたりしながら、植物の生命から昆蟲の生命へ移つて行くのだ、そして靜かに、避けがたい力を以て、動物性に溶け入るのである。

最初の時代に再び歸る爲には、下層では此の大渾沌の腐朽を切り開き、上層では樹木をそれらの寄生植物の緊縛から解放し、猶進んでは小枝を襲撃し、灰色の陰を明るくした所の、あの最も恐るべき破壊者、あの最も執念深い齧齒類、彼等こそ未來の種の恩人であつた。中絶することのない、彼等のあの制しがたい、破壊行爲は、自然がそれまで没頭してゐた植物の狂亂状態を正氣に歸へした。自然は何程産出しても無駄だつた。彼等は征服した、彼等は美事に空地を造り出した。そして怪物達は、その繁殖の巢窟から追出されて、次第に亡滅し、此の大曝露に依つて、その森を光の子たる鳥類に譲るに至つた。

此の光の子である鳥類と、その反對者たる夜の子昆虫類との間に於ける何といふ深い一致であらう、何といふ美はしい協調であらう。昆虫は彼を此の深淵の中に生かすめ、彼にその敵手を渡したのだ。かて、加へて、豊饒な慈養が昆虫を強健にし、激昂せしめるに従つて、その血液があゝの活氣旺盛な植物に洶酔した時、未だ曾つて見られなかつた狂激が始められた。そして大膽凶惡な種類は最早かの怪物の隱家を食む丈では満足しなくなつた。

彼等は、怪物そのものを掠奪した。螫、錐、吸口、銳利な齒、尖つた鋏、未だ名もない様な未知の武器の庫が、此の生きた物質を料理する爲に生れ出た、伸びた、鋭く尖らされた。それが必然であつた。それは生れつ、ある世界の穢はしい濕疹を剃る剃刀となつた。此の生きた物質、穢はしい濕疹が幽かに動物らしくなつてゐたものを、あの半睡状態の青蟲を、血の蒼褪めた蟲を、未だ不潔な蒼白の生命を養育し、繁殖せしめて居たのである。彼等は恚ふした燃ゆる様な試練を通して烈々たる生命を獲得し、高等昆虫となつたのである。

私は、是等の屏が小さくなつて鎧を着たような動物よりも、より強く、より確固たる、より永續的な、より恐るべきものが、此の地上に在るのを知らない。甲蟲カラブ、皂莢ナレコルス、飛生蟲セルワゴラン等は中世期のあらゆる武器よりも恐ろしい様々な武器を非常に軽々と身に附けてゐる。それは彼等の體軀に依つてのみ始めて吾々に首肯出来る所のものである。相對的に見て、その力は眞に驚嘆すべきである。假に、かゝる割合の力を持った人間があると考へて見給へ、彼

はその腕にルクソールの尖塔オピリスを支へて了ふであらう (Longsor 古代埃及の町、巨大なオベリスクに名あり)。

慙うした併呑的な力は、昆虫の内に巨大な力の原動力を集中しながら、その色彩の力に依つて光明の中に移された。色彩の力に次いで、生命の最も熾烈を極めた種類に於ては、道徳的な力が來た。優れた野蠻な英雄、大甲蟲スカウは、謙讓な市民をなした蟻や蜜蜂に依つて消滅させられた。其處では美は調和といふことになつた。

これが昆虫の全歴史である。然しながら、是等最後のものが——その出發點を輕蔑してはならない——我が地球を造り、準備してをつた有益な齧齒類や坑道夫達を吾々に導かすにはるなかつたといふことは、より高遠な何ものかであらう。

彼等の事業は既に終了してゐるか？ 決してさうでない。無限の地帯が、云はゞ古代のまま、に取残されてゐる、恐るべき、不健全な繁殖状態に置かれてある。亞米利加の中央部に於ける世界第一の密林は今でも矢張人類を撃退してゐる。人間は其處へ行けば死ぬより

外はないのだ。人間の手は、其處では熱に細つて、その寶を掴み出す丈の力さへなくなる。一本の樹木が路上に倒れんか、それは無氣力な人間に取つては、超ゆべからざる障碍となる。人間はそれを廻る。だから、高い草の中に道が廻つてゐるのが見られる。幸にも、白蟻はさう容易く退却しない。若し彼等が此の樹木に衝突するならば、彼等は決して是を廻避しない。廻路をしない。彼等は勇敢にも真正面から之を攻撃する。彼等は必要な丈の工夫を何萬でも繰り出す。そして二日か三日の間に、その樹木は食ひ盡され、路は自由となる。

慙うした國に於ける自然界の高遠な法則、救済の法則は、凡て減少し行くもの、凋落し行くもの、沈滞するもの、従つて有害なものを急速に破壊するといふことである。生命の坩堝に依つて熱烈な純化をなすといふことである。此の坩堝は、殊に昆虫である。彼の狂熱的吸収を責めてはならない。誰か焔を責めやうなどと考へるものがあらうか？ 焔はそれが燃えない時のみ責む可きである。是と同じ様に、生ける火、昆虫は、燒盡す爲に生れ

てゐるのだ。彼は燃えてゐなければならぬ、抑制することの出来ない食慾の爲に、慘酷であり、盲目的であらねばならない。節制、謙讓、憐憫等は彼のものではない！人間やその他高等動物の憐れした凡ての道徳は想像することさへも出来ない無意味なものであらう。犬の感受性や愛情を持った昆蟲を考へることが出来るか？ 昆蟲が海狸の様に泣くだらうか？ 鶯の様な憧憬や詩を持つたらうか？ 最後に人間の憐憫などを持つたらうか？……だが若しそんな風なものだとすれば、それはその職分たる解剖者、切開者、破壊者、よりよく言へば、弛緩を禁じて死を促進せしめ、それに依つて生命の光輝ある歸趨を急がしめる處の、大自然の普遍的傳意者として、全く能のない、全く不適當な昆蟲となり終つて了うであらう。彼を通して、氣樂な手輕な自然は、野蠻な嬉びを現はして言つてゐるのだ、(病弱もなければ、老衰もない！……あらゆる衰退を一蹴せよ！……永遠の青春に幸あれ！……生きおりたるものは死せ！)と。

是等死の作因に似た羽化昆蟲の熱狂が屢々生の原因となつてゐることを注意せよ。熱つ

ばい濕氣にだらけた病的な獸類に對する彼等の猛烈な迫害は、その救済である。彼等は、愚かにも屈從的になつて了ふかも知らない。屢々熱氣に縛られて、陰鬱な、身動きさへも出来ないものとなり、再び身を起すことさへもなくなつて了ふだらう。處か苛酷な刺戟は再び彼等をして立派に立たしめることが出来る。自分の脚の上に戦きながら立上つた彼等は逃げ出す。昆蟲は彼等を放置しないで、之を追迫する。そして血まみれになつた彼等を土地の乾燥した、水の清冽な、體の爲になる地方へと導いて行く。此の熱狂的な彼等のガイドは、此處まで來て了うと、自分自身が満足されないので、彼等を棄て去つて、再び不健全な霧の中へ、あの死の王國の方へと引返す。

阿弗利加のスターダンに於ける小さなナムといふ羽蟲は、獸類の移住を絶對的に指導してゐる。乾燥期に、彼は駱駝に猛威を振り、象の耳の中へ大膽にも這入り込む。是等の巨獸達は、止むなく此翅を持った牧人に押しこくられて、南方の熱地を逃れ、大急ぎに、北方の微風を求めて行く。牛達は反對に、彼の爲に守られて、主人たるアラビア人と共に、氣

樂に南方に残るのである。

最も恐ろしい昆蟲、ギアナの巨蟻は正しく彼等が持つ貪婪の力の爲に祝福されてゐる。彼等なしには、家屋の板敷や木組や、又僅かな隙間等、暗黒の中に猖獗を極めるあらゆる怪物の類を徹底的に掃蕩する手段はない。處が、一朝、是等の黒軍が家屋の門前に出現する、これが即ち訪問蟻である。人々は身を退いて彼等に路をあける、彼等に家屋を明渡す。(お這入り下さい、諸君、往くなり來るなり、何卒自由になさつて下さい……)家の主人が此處に止つたら、それこそ自分の身の上が危いことだらう。何となれば是等斷乎たる訪問者達は、その法則として、彼等が進行する處に如何なる生物をも残して置かないからである。あらゆる昆蟲が先づ滅亡させられる、巨大なものも、微細なものも、巧みに隠されてゐる卵さへも。次ぎに小さな動物だ、蛭も毒蛇も野鼠も、如何なるものも逃れることは出来ないのだ。その場所は何等の跡形も残されず一掃される。ほんの小さな残物も忠實に食ひ盡される。

亞米利加アンティル群島の巨大蜘蛛は、慙うした恐ろしいそして完全な掃蕩をする程に猛烈ではないが、然も、家屋の清潔法をば立派に行つてゐる。どんな忌はしい蟲と雖も彼等に見逃されてゐるものはない。是は奴隸より遙かに適當な、非常に優れた召使である。其處で人々は彼等を尊重して、なくてはならない家僕として彼等を買入れる。かくて市場に、蜘蛛の取引が行はれてゐる。

シベリアでは、蜘蛛は非常に尊重されてゐる。非常に短い夏にも拘はらず、藪蚊や蚋の跳梁跋扈する此極北の世界は、人間の爲に是等蚊軍に對して巧みな狩獵をなす所の此益蟲を恩人と見てゐる。その完全な用心深さ、此上なき巧みさ、外氣や天候の様々な變化に對するその洞察力等がシベリア人をして、彼に對する慙うした考を抱かした、數多くのシベリア民族は、我が世界の存在は此巨大な蜘蛛の力に負ふものであるとさへなしてゐる程である。

第十一章 昆虫と人類

或る小鳥の狩獵家が、或る立派な術學的な記録中に次の様な逆説パラドクスを述べてゐる、(近來の小鳥の増加は葡萄や馬鈴薯の病源をなしてゐる、云々)と。何うしてだらうか? 著者は言ふ。一八四五年九月に始めて突發した此病氣は、顯微鏡的の微細動物や寄生植物から來てゐる、それまでは恙うしたものが昆虫に依つて絶滅させられてゐた。處が此農業上の保護蟲は、一八四四年來鳥類に依つて絶滅されて了つたに違ひない。一八四四年五月のあの鳥類保護といふ致命的な法律が鳥類を増殖せしめ、その結果、彼等鳥類に依つて、昆虫はついまれ、亡ぼされて、我が植物の爲めに、その目に見えない敵軍に備へてゐた救助を最う續けられなくなつたからに違ひない、と。

此假説は機智頓才を以て組立てられ、且つ、事實と時代とに立脚したものの、様にさへ思はれるが、その凡てが或一點の上に支へられてゐる。若し此點が缺けるならば、此假説は

崩壊する。

鳥類は此法律に依つて有効に保護されて居つた、そして、十二年此方彼等は増殖するこゝとが出来た、地上の主人公となり、暴君となり、益蟲類の根絶者となつた、遂には不幸にも是等の昆虫は殆んどその影をひそめて了ふであらう、とそれは假定してゐる。

之に對して三つの答がある。

(一) 鳥類は少しも増殖してゐない。増殖を恣にするのは、法律ではなくて、鳥屋である、狩獵家である。さればこそ、恙う彼等は答へてゐる、(餘りに鳥類を狩盡して了つたので、それ以來法律が之を保護するに至つた、或る地方では狩獵が事實上不可能となつた、何となれば、最早殺すべき鳥がゐらないからである。)

プロヴンスのあの藪蚊の最も甚しい處(従つて鳥類の最も必要とせられる處)やカマルグ島などでは、狩獵家は食用鳥類のゐない處から、今では燕を殺してゐる。彼等は燕が群をなして來る箇所に待伏して、首尾よく、唯一發で多くのものを殺してゐる。

(二) 昆蟲は決して鳥類の爲に滅亡させられてはゐなかつた。影をひそめた昆蟲とは何んな種類のものであるかを農夫に聞いてみ給へ。彼等が如何に探してみても無駄である。唯一種類だつて減少したものが見付かりはしないのだ。反對に、此問題の時期に於て、彼等が増殖し、成長し、全盛を極めてゐるといふではないか。そして、彼等が其の目に見えない小動物と自由に闘ふのをさまたけたものは全くないといふではないか。

昆蟲の一種類と雖もなくなりほしない。がその代りに、立派な觀察家は、その狩獵や博物史に關する著書の中で、吾々に慙う教へてゐる、即ち、鳥類の多くの種類は間もなく消滅するであらう、と。

(三) 鳥類は、此記録の著者が言ふ様に、無智無謀な殺害者ではない。それどころか、彼等は、吾々に取つて最も有害な昆蟲を選んで殺害してゐる。彼等が昆蟲に對して實際殺害的な挑戦をなす時期は、彼等がその幼兒を養ふ時期である。彼等はその子供等に何を持つて行つてやるだらうか？ 食蟲類では駄目だ、武装し、鎧装した彼等甲蟲や、飛生蟲等、

鐵の様な甲に蔽はれ、鉋や鈎を備へ、不撓不屈の生命を持つたものは、頬白の子供には恐ろしい食物となるだらう。慙んな食物の前に出れば彼等はむしろ逃げ出してさふだらう。注意深い母が取つて來てその子供に與へるものは、決してこんなものではない。それは柔かい、と同時に乳質を持つた蟲である。脂味の多い、慈養分の豊かな幼蟲、柔かいおいしい青蟲等凡て木々の葉や果實や野菜等を食ふ動物、正に吾々の庭園を荒すものである。

従つて、昆蟲に對する鳥類の仕事は、農業と正確に一致してゐる。

然しながら、吾々は此著者が言ふ様に、鳥類が創造界の唯一の清淨器であると云ふのではない。盲目でない限り、無智でない限り、鳥類は昆蟲と共に此法則を分擔してゐるものであることを、認めずにはゐられないであらう。昆蟲の行爲そのものは、勿論、原子的生物界の探求に於ては、遙かに有效である。昆蟲の眼は顯微鏡である、従つて、鳥類には解らない多くの暗い場所に於て、微細生物を識別し、捕獲する。他方、鳥類は、遠い視界とか飛翔とかを必要とするもの、即ち、空中に、従つて吾々の肺臟の中に浮遊してゐる眼に